佐々木合気道研究所　研究論集

所長　佐々木 貴

合気道の思想と技

開祖も合気道には形がないといわれていたが、合気道が分かるのは技を通してだけであり、技ができる程度にしか理解できないと思われるので、技の探求は大切である。また、技には哲学、思想が含まれていなければならないと考えるゆえ、合気道の思想と技の関連を追及していく。

＜タイトル一覧＞

第701回　合気と合気道

第702回　天之御中主神と合気道

第703回　「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」と

第704回　続「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」と

第705回　開祖の教えに従って技を錬磨

第706回　魂を表に出すのは阿吽の呼吸

第707回　魄と気と魂

第708回　魂の学び

第709回　気と息

第710回　西田幾太郎の禅と合気道

第711回　空の気を脱して真空の気に結ぶ

第712回　「合気会」認可申請上申書の“合気道”

第713回　合気道は無抵抗主義

第714回　水の位と息

第715回　密教と曼陀羅と合気道

第716回　比礼振り（ひれぶり）

第717回　天の呼吸との交流なくして地動かず

第718回　魂の学びの合気道へ

第719回　顕幽神界と意識・無意識

第720回　合気道の時間

第721回　まずは天の浮橋に立たなければならない理由

第722回　六根で魂が花咲く

第723回　高御産巣日神と神産巣日神の摩擦作用

第724回　地上楽園建設の生成化育とは

第725回　天の気、天地の呼吸、地の呼吸・潮の満干と正面打ち一教　＜その１＞

第726回　天の気、天地の呼吸、地の呼吸・潮の満干と正面打ち一教　＜その２＞

第727回　魂は科学されて出てくるもの　＜その１＞

第728回　魂は科学されて出てくるもの　＜その２＞

第729回　心、念と魂

第730回　武技は日月の息と地の息と合わして生む

第731回　魄の稽古からの脱出のために

第732回　月の呼吸、潮の満干の呼吸

第733回　赤玉、白玉

第734回　正勝、吾勝、勝速日について

第735回　魂の技　心と魂

第736回　魂の技を生む

第737回　使命は万有万物にある

第738回　近代スピリチュアリズムと合気道の霊魂

第739回　三つの鍛練で真理の力

第740回　顕幽神界・過現未と繋がるのはひびき

第741回　天の気に結ぶ

第742回　タカアマハラになる

第743回　気を感じ、つかう

第744回　四つの宝の中の潮の干満

第745回　魂を表に出す阿吽の呼吸

第746回　己の行は皆のためのもの

第747回　魂の比礼振り

第748回　三元八力の技

第749回　日に新しく進んで向上する

第750回　宇宙生成化育の大道を歩むために

第751回　光と熱と力

第752回　△○□と

第753回　魄でない力を生むために

第754回　合気道はやはり武道

第755回　□の火の地の呼吸で

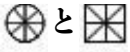
第756回　天の呼吸から始める

第757回　天の叢雲くきさむはら竜王の“くき”

第758回　宇宙との一体化のために

第759回　イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビで技を

第760回　神々が協力してくれる

第761回　とを技に

第762回　技と性

第763回　気形の稽古

第764回　沢山の衣服に包まれている

第765回　古い衣服を脱ぐ

第766回　布斗麻邇（ふとまに）の御霊

第767回　布斗麻邇（ふとまに）の御霊　続

第768回　赤玉　白玉

第769回　魂の比礼振りと六根

第770回　△○□

第771回　フトマニ古事記　その１

第772回　フトマニ古事記　その２

第773回　フトマニ古事記　その３　布斗麻邇御霊“高皇産霊神・神皇産霊神”

第774回　フトマニ古事記　その４　伊邪那岐の御霊、伊邪那美の御霊

第775回　フトマニ古事記　その５　謂伊豫の二名島

第776回　フトマニ古事記　その６　謂筑紫島

第777回　フトマニ古事記　その７　謂大八島

第778回　宇宙の法則とは

第779回　宇宙との一体化

第780回　布斗麻邇御霊で技を

第781回　あ、お、う、え、い

第782回　△○□

第783回　信じる事が大事

第784回　摩擦連行作用

第785回　合気は科学である

第786回　魄を土台に魂で

第787回　気の妙用

第788回　合気妙用の導き

第789回　気と魂魄の違いと関係

第790回　「ア、オ、ウ、エ、イ」と「ス、ウ」

第791回　アオウエイのエイ

第792回　イクムスビと布斗麻邇御霊で

第793回　息から気へ

第794回　呼吸法が出来る程度に

第795回　桃の実と地ひきの石

第796回　古事記は法典

第797回　ウの言霊

第798回　言霊の妙用

第799回　エの言霊と目

第800回　イの言霊と頭

【第701回】 合気と合気道

長年合気道を修業しているわけだが、“合気道”や“合気”とは何か等が自分なりに分かったのは最近のことであると思う。合気道を修業しているのに、“合気道”や“合気”がどのようなものであるのかが分からなければ、修業の意味がないわけだから、本来ならば修業の初めに知っておかなければならないはずである。それが半世紀の修行の後、ようやく分かったわけであるから恥ずかしいかぎりである。
要は、“合気道”や“合気”が何たるかを知らずに長年修業を続けていたのである。下手をすれば“合気道”とは違うことをやってしまっていたかもしれないのだ。

これまでの“合気道”と“合気”の私なりの解釈は、“合気道”とは、宇宙との一体化への道であり、“合気”とは宇宙との一体化である。また因みに、“道”とは目指す目標と己を結んだモノ（道）とした。
この解釈でここ数年、合気道の修業をやってきたが、“合気道”や“合気”は、私のこの解釈より複雑であり深く、不十分であることが分かってきたので、“合気道”と“合気”の更なる研究をしなければならなくなったのである。
研究材料は『合気神髄』『武産合気』である。大先生がこれをどのように説明されておられるのかを確認することにする。

大先生は、“合気”について次のように説明されている。
○「合気では、自己の気と、この宇宙と一体となる。（合気神髄p172）」
○「合気というものは、宇宙の気と合気しているのである。（同上）」

合気の解釈はこれまでの自分の解釈と同じだが、これに自己と宇宙が一体化する（合気する）のは気であるということが加わったのである。自己の気と宇宙の気が一体化（合気）するのである。

それ故、大先生は気が大切であると、
○「合気はすべて気によるのであります（合気神髄 P32）」
○「合気は十分気を知らねばならない（合気神髄p88）」
と言われているのである。

尚、宇宙には二つある。一つは１８３億年前に出来た大宇宙、マクロクスモスであり、二つ目の宇宙は、時間と空間を超越した万有万物である。天地、日月星辰、人間、動植鉱物、海川森山等々である。気によって大宇宙だけでなく、万有万物と合気しなければならないと大先生は次のように言われている。
○「深山幽谷にこもった折には、自然と気が発生してくる。天地の合気、心の合気が、そこにむすばれていく（合気神髄ｐ８９）」

大先生はこのように、身近な深山幽谷に入って気を発生して天地に合気し、万有万物と合気していけばいいし、宇宙と合気するために縦横十字の天の浮橋に立たなければならないと次の様に言われている。
○「「ｳ」は浮にして縦をなし、「ハ」は橋にして横にして横をなし、二つ結んで十字、ウキハシで縦横をなす。その浮橋にたたなして合気を産み出す（合気真髄Ｐ１２９）」
また、
○「合気では、自己の気と、この宇宙と一体になる。このやり方を、たえず自己でやるのである。円に十、気の線を描いているのである。合気というものは、宇宙の気と合気しているのである。合気は天の科学である。精神科学の実践を表しているのである。（同上）」

更に、大先生は合気の別な面や働きを説明されている。
○「△○□の気の熟したるを合気と申し、・・・（合気真髄Ｐ．５１）」
○「合気は宇宙組織の玉のひびきをいうのであります」

○「十字つまり合気である」
つまり、宇宙一体化の合気のためには、これらの要因（側面）が必要であるということであり、合気には多くの要因があるということだと考える。

かっての大先生のお話もそうだったが、『合気神髄』『武産合気』を読んでいて、“合気”や“合気道”が分からず、難しかった原因のひとつに、“合気”と“合気道”が明確に分けてつかわれていなかったことにもあると考える。
“合気”がときに“合気道”の意味につかわれたり、逆に “合気道”が“合気”の意味でつかわれたからである。例えば、
○「**合気道**には松竹梅という三段の法があります。松は礼、竹は・・・、梅は法の徳。この松竹梅の三つの法則で合気は進んでおります。」
ここでの“合気“は明らかに最初に”合気道“であるはずである。
○「**合気**の稽古はその主なものは、気形の稽古と鍛錬法である。気形の真の大なるものが真剣勝負である」
ここの“合気”は宇宙との一体化とも解釈できるが、“合気道”の方がわかりやすいと思う。
○「相手が木刀を持ってくる。相手を絶対に見ない。**合気**は相手の目を見たり、手を見たりしてはいかん。自分の心の問題、絶対に見ない。（合気神髄　P119）」
ここも上記と同じである。
○「**合気**は魄を排するのではなく土台として、魂の世界にふりかえるのである。世の中を守るところの道は、霊魂を守り、魄の世も守り、魂魄調和のとれたアウンの呼吸をもって、すべての生成化育の道を悉く守り、栄の道を愛育することの競争である。」
ここも上記と同じである。
○「円の動きのめぐり合わせが、**合気**の技であります。技の動きが五体に感応して、おさまるのが円の魂であります。（合気神髄ｐ120）
ここの合気の技は、合気道の技をいっているはずなので、合気道と解釈した方が分かり易いと思う。
等々まだまだあるが、例はこれぐらいにしておく。

それでは、何故、大先生は“合気と合気道”を明確に言われたり、書かなかったのだ

ろうか。私が思うに、大先生にとって、“合気”も“合気道”もほとんど同じであったのではないかと拝察する。それは合気道の形（かた）と技が結局は同じになるということに似ていると思う。

しかし、我々初心者ははじめ、“合気”と“合気道”を明確に区別して修業していくべきであろう。そして“合気”や“合気道”を更に深く研究する必要がある。

【第702回】 天之御中主神と合気道

合気道の技は体（魄）と精神（魂）の二元の交流によって生み出していかなければならない。またそのためには、天之浮橋に立たなければなし、天之浮橋に立つ折は、天之御中主神にならなければならないと大先生は教えられている。

天之御中主神にならなければならないわけだが、この天之御中主神が難題なのである。何故ならば、天之御中主神を説明した文献がほとんどないと言われるからである。天之御中主神がどのような神なのかが分かなければ、天之御中主神になることも天之御中主神に繋がることもできない。

まず、天之御中主神に関しては、古事記や日本書紀にさえ次の様にしか記述されていないと大本教教祖出口王仁三郎聖師はいう。
「『古事記』にも、単に造化の第一神として、劈頭に御名称を載せてあるに過ぎぬ。『古事記」の筆録者たる太朝臣保万侶は、序文の初めに、“それ混元既に凝り、気象未だ効あらわれず。無名無為。誰か其形を知らむ”、と書いてあるだけであり、『日本書紀』の方では、本文に天之御中主神の御名称さえ載せず、単に此の神の性質の一小部分を捕え、“古天地いまだ剖わかれず、陰陽分かれず、混沌溪子の如し”などと書いてあるだけだ。これも決してわざと書かぬのではなく、書きたくとも、とても窮屈な漢文などで書きこなすことができなかったのであろう。」（『世界更生第３号　「大本略儀」出口王仁三郎』）
と言われる。
また、出口王仁三郎聖師は、「天之御中主神は日本占有の神ではなく、世界各国で

種々雑多な名称を付して読んでいるという。例えば、太極、天、梵天、エホバ、ゴット、ゼウス等を初め、種々あり、そして是に対する観念も、浅深大小、決して一様ではないようだが、畢竟我皇典の天之御中主神を指すものである。只此神の徳性が余りに微妙、幽玄、広大無辺なるがために、大抵の経典は、辛うじて神徳、神性の一小片端を捕うるに止まり、世界中何処を捜しても、此神に就いての観念を伝え得たものは一つもない」という。（同上）

そこで出口王仁三郎聖師は、天之御中主神を簡単に述べると、無限絶対、無始無終に宇宙万有を創造する全一大祖神、宇宙の大元霊であるとしている。そして、この天之御中主神は宇宙の外にもあらず、又宇宙の内にもあらずということで、この神は宇宙と合一状態にある、つまり、天之御中主神は宇宙の本体それ自身であるという。
また、天之御中主神の観念は、活機凛凛たる神霊原子が充実し切り、磅はくし切った至大天球、無始無終、永劫不滅に活動して至仁、至愛、至正、至大、み威を以って天地、日月、星辰、神人、その他万有一切を創造せらるる全一大祖神であるという。

「合気道は、自分が天之浮橋に立つ折は、天之御中主神になることである。自分がスを出し、二元の交流をして、自分にすべての技を思う通りに出してゆくことである。体と精神と共に、技を生み出してゆく。（武産合気Ｐ．１０１）」とあるように、体と精神を交流させるために、天之御中主神となって「ス」を出さなければならない。これを出口王仁三郎聖師は、「天之御中主神が万有を捲き収めて帰一せる絶対一元の静的状態が、即ち「ス」である。宇宙根元の「ス」は現に差別界に生息する人間では経験することは出来ぬが、小規模の「ス」は間断なく経験し得る。万籟声を潜め、天地間、寂たる境地は、即ち「ス」である。安眠静臥、若くは黙坐鎮魂の状態も、同じく「ス」である。「ス」は即し絶対であり、中和であり、統一であり、又潜勢力である。

合気道は天之浮橋に立ち、天之御中主神になり、そして「ス」を出さなければならない。
それでは合気道の道場ではどうしているかという事になる。道主の稽古時間にはこ

れをやっているのである。小規模の「ス」である。
先代の吉祥丸道主の時から現道主まで、稽古の始まる前は、換気を止め、窓を締めるのである。真夏の暑い日でも同じである。初心者や、まだこの「ス」の重要性が分からない稽古人は、何故、暑いのに換気を止め、窓を締めるのか分からないし、中には文句を言うのもいる。
天之浮橋に立ち、天之御中主神になり、そして「ス」を出して稽古をするために必要であるのだが、それは己自身で気がつかなければならないと思うので、それは言わないことにしている。

今回は、大本教の出口王仁三郎聖師の文章をつかわせてもらった。
出口王仁三郎聖師は植芝盛平大先生が師事した先生であり、大先生は多くの事を学ばれた。大先生の教えの中には出口王仁三郎聖師の教えがあるから、大先生の書かれている『武産合気』や『合気神髄』などで分かり難い所があれば、出口王仁三郎聖師の文章が助けになるかも知れないと思い、使わせて貰った次第である。また、これからもお世話になりそうである。

参考文献　　『世界更生第３号　「大本略儀」出口王仁三郎』

【第703回】「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」と

合気道は魂の学びであり、魂を表に、魄を土台にした技をつかうと教えられている。しかも、魄を排するのではなく土台として、魂の世界にふりかえるのであるのである。
この稽古に入るところから魂の学び、真の合気道が始まると考える。それ故、これまでの合気道は、この真の合気道のための準備段階であり、魄の土台をつくる、魄の学びの段階ということになろう。
そしてここからそれまで築き上げた魄（体、魄力）を土台として、魂に振り返る修業をしていくことになるわけである。従って、魄は大事であり、鍛えれば鍛えるほどこの土台がしっかりするわけだから、十分鍛えなければならないことになる。合

気道は、力は要らないなどの迷信に陥らないようにすべきである。

「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」とどのような技になるかというと、相手との接点にある己の手先に己の体の重さが伝わり、相手の手とくっついてしまい、そしてそのくっついた接点の手を通じて相手と一体化し、己の心や念の魂によって相手を自由自在に導くことができるのである。
これまでの腕力の魄の力でつかっていた技とは異質なものになり、相手は自由に動くこともできなくなるし、また、反抗や反撃の心も消えるようである。

相手との接点にある己の手先に己の体の重さが伝わらなければ、土台が出来ず、魂（心、念）が働かない。しかしこれは容易ではないだろう。まず、どうしても、それまでのように腕力をつかってしまうからである。それ以外に、肩を貫き手・腕を十分に伸ばさなければならない。手先に体重を掛けるためには、手先と腹をしっかり結んでつかわなければならない。
片手取りなど相手に手を掴ませる場合は、己の体重を相手の手に掛けるのはそれほど難しくないが、正面打ちや横面打ちで打ってくる手に掛けるのは至難の技である。例えば、正面打ち一教はこの意味でも最も難しいと思う。
しかし、この件に関しても、有難いことに有川定輝先生に以前教えを受けていたのである。これまで未熟故に気づかなかったわけだが、最近その理合いが少しずつ分かってきたので、先生の教えを思い出しながら挑戦しているところである。
その教えは、①踵とから着いて爪先を上げて、同時に上げた手で体重を落とす　②相手の打ち下ろす手を己の手刀（小指の下から手首にある膨らんだ部位）で接し、抑える　③阿吽の阿で接し、抑え、導く　④体幹と手をしっかり結び、体幹でやる　⑤肩を貫いて指先を伸ばす等々

上記の①~⑤（③は除く）がよく分かる有川先生の正面打ち一教の写真を掲載する。



「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」とこのように技がつかえるようになるということである。魄の学びから魂の学びに振り返えなければならない。ここから真の合気道を楽しむことができるだろうと楽しみである。

【第704回】 続「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」と

魂の学びの真の合気道に入っていくと、前回『第７０３回「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」と』で書いたように技が変わってくる。相手とくっつき、相手と一体化し、相手の反抗心を消滅させ、相手を自由に導けるようになる。これまでの魄に頼った技とは違ったものになり、合気道の技の集大成であり、武道の理想ではないかと思う。

しかし、もしこれだけならば、合気道や武道界においては意味があるだろうが、他の世界・分野や一般社会の人々にとってはあまり興味もないだろうし、どうでもいいことであり、精々「魂の学びをご苦労さん」と言ってくれるということだろう。
合気道では高尚な“魂の学び”の修行をしたとしても、世間では井の中の蛙と見ているはずである。
勿論、合気道をつくられた大先生は、井の中の蛙の合気道をつくり、残されたのではない。
合気道の修業の目標は、つまり、合気道修行者の目指すべきものは、宇宙との一体化であり、また、合気道が目指すモノは、宇宙天国・地上楽園建設である。これらの目標は、合気道の領域を超えて、万人、万有万物が無意識の内に感じ、求めてい

るはずなので、共感、賛同してくれるはずだと考える。

更に、魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導いて技をつかうようになると変わってくるものがあるようである。それは、

- **欲がなくなる**。余分な金や物を持とうと思わなくなってくるし、他人の豪邸や高級車等々興味がなくなる。名を売って有名になろうなどとも思わなくなる
- **感動しやすくなる**。自然でも、人間の情でも感動し、笑顔になったり、涙するようになる。
- **悪いことができなくなる**。道徳的に悪いと言われること（盗み、誤魔化し、嘘等）はやる気がなくなってくるようである。また、虫が殺せなくなる。部屋に入ってきた虫は外に出してやり、血を吸いに来た蚊でも、殺さないように追い払う。
- **自分がわかってくる**。自分は何者なのか、何をすべきか、そしてどうなるのか等がわかってくる。
- **使命を自覚する**。自分はこのために生かされ、そのために、様々な機会にいろいろな支援や試練が与えられてきたことがわかる。
- **死にバタバタしない**。８０年間近く生きてきたこともあるが、癌などの病気があるのではないかなど心配したり、病気になったらどうしようなどと心配しないようになる。あちらにお任せである。

等々、魂の学びの修行に入っていくと、それまでの考えや気持ちとは違ってくる。一皮むけたようであり、心体を覆っていたベールが一枚剥がれたような感じである。

しかし、これを読んだ人は、これは私個人の事で、私には当てはまるかも知れないが、我々には関係ないだろうと思うかも知れない。
そこでこれらの変化は、個人的な特殊なものではなく、誰にでもできる変化、普遍的な変化であるはずだとの根拠を紹介することにする。それは大先生の体験からの教えである。
「合気を修したならば、悪いことをしようと思っても悪いことはできない。というより悪い想念が消えてしまう。欲望がなくなるのである。只修業しようとする大欲

はなければならないけれど、すべて天の使命を想い、悪い執着も去って忘れてしまう。それは私の体験で明らかである。」（武産合気 P.86）

私の魂の学びで変わったことは、上記の大先生の体験の方向性と同じであるから、私の修行に大きな間違いはないということになるだろう。

合気道の魂の学びの修行は、このように宇宙との一体化、宇宙天国・地上楽園建設のお手伝いであるから、武道を知らない一般人にも関心が持たれるはずである。特に、最近は力と力のぶつかり合いの戦争や争いが世界各地で頻発しているが、人類や世界はこれをどう解決できるか分からず、苦悩している。
私が知る唯一の解決策は合気道にあると思う。勿論、合気道とは真の合気道である。魄（財力）と魂（心、精神）とバランスを取り、魄を土台にして魂で魄をつかうことである。それ故、魄（財力）が大きければ大きいほど、それに対する魂（心、精神）を鍛え、磨かなければならない責任がでてくることになる。合気道で云う、天の浮橋に立つということである。金のある国や人は容易ではないが、責任重大である。真の合気道を学び、自分を変え、世の中を変え、そして世界、宇宙に天国を造っていって欲しいものである。
大先生は、人に３日でもいいから合気道を学びなさいといわれたといわれるが、この理由だったのだと考える。

【第705回】 開祖の教えに従って技を錬磨

合気道を始めて約６０年になる。開祖には最晩年の５年ほどお教えを受けることができた。はじめに教えて頂いたのは、大先生（開祖）をはじめ、当時、若先生と言われた二代目道主の植芝吉祥丸先生の他、斉藤守弘先生、藤平光一先生、山口清吾先生、多田宏先生、有川定輝先生という蒼々たる先生方に教わっていた。しかし先生方は年が経つにつれて、お亡くなりになったり、道場を離れられたりして、今ではそのどなたにも教えて頂くことが出来なくなった。

先生に教わっている間は、先生の教えを忠実に実行し、守っていけばよかったが、

先生方が亡くなったり、遠く離れてしまわれると教わることが出来なくなる。そして分かるのである。教えて貰っている内は、気楽なものであったこと、そして今後は誰に習えばいいのか、どのように修業をしていけばいいのかということである。

私の最後の先生は、有川定輝先生であったが１３年前に亡くなられ、それから先生方の教えを受けることがなくなった。そして今日まで誰に習えばいいのか、どのように修業をしていけばいいのかを考え、試行錯誤してきたが、ようやくその答えが出たようである。
一言で云えば、合気道の開祖の教えに従って技の錬磨をしていくということになる。大先生の教えは、画像や動画の他、『武産合気』『合気神髄』にある。

しかしながら、これらの大先生の教えには、魄の教えはほとんどない。手足の上げ下ろしや体や技の具体的なつかい方などは書いていないのである。その上、画像や動画も、そしてまた『武産合気』『合気神髄』は難解である。
何故難解かというと、大先生は見える世界の顕界の事を書いているのではなく、目に見えない幽界で幽界や神界の事を書かれている故、日常の顕界の目で見ても分からないのである。
『武産合気』『合気神髄』の大先生の教えは、魄ではなく、魂の教えなのである。魂の学びのための教えであると考える。だから大先生は、合気道は魂の学びであると言われているのであると思う。
『武産合気』『合気神髄』の教えが分かるためには、魂の学びである真の合気道の稽古に入っていかなければならない。
魄の稽古で心身を鍛え、魄の限界を覚え、そして真の合気道の修業に入るのである。

ある程度魂の稽古が出来るようになると、それに比例して『武産合気』『合気神髄』が分かるようになる。そして開祖はどのように技や体をつかっていけばいいのかを教えて下さっていることが分かるのである。だから、その教えに従って、技と体をつかって修業していけばいい事になると考える。

具体的な例として呼吸法で説明する。

まず、魄の稽古では、①持たせる手を鍛え、力一杯つかう　②鍛えたその手を諸手に持ってもらう。相手の諸手の力より強い力が必要なことが分かり、腰腹や体幹の力をその手でつかうことを覚える。③しかし、相手も腰腹や体幹の力で掴んでくると、力は５分と５分と拮抗する。これまでが魄の稽古であり、そして魄の限界ということになる。大部分の稽古人はこの壁にぶつかり、悩んでいるはずである。

この壁を破るためには魂の学びに入らなければならない。合気道は魂の学びであると大先生は言われている。魂の学びの合気道をすれば、大先生は教えて下さるということである。
大先生は『武産合気』で、
「今は丁度二度目の岩戸開きの時、魂の使命の実をむすぶ時である。知恵正覚の鍛練をすべき秋である。即ち魄を土台となし、地場・地祇・いわさかとし、その上に人はひもろぎとなって、その使命を行うことである。そして引力の鍛練を進んでゆかなければならない。そして真空の気と空の気は、合気によく性と技とにむすんで、技の上に科学しながら武産の神より与えられた力を得なければならない。そして表裏なく、魂を上にしなければいけない。（武産合気　P.97）」と言われている。

この教えを呼吸法に関連付けて解釈してみると、

- 「**二度目の岩戸開きの時、魂の使命の実をむすぶ時**」とはアマテラスの岩戸開きに次ぐ岩戸開きであり、つまり魄から魂が表に出て働かなければならないということだろう。
  ＜呼吸法＞では、これまでの様に魄（腕力）ではない、魂（心、精神、念力、気持ち）で技をつかわなければならないということだと解釈する。
- 「**知恵正覚の鍛練をすべき秋である。即ち魄を土台となし、地場・地祇・いわさかとし、その上に人はひもろぎとなって、その使命を行うことである。**」とは、顕の幽、魄の魂への時代の秋（幽の幽、神の時代の春。幽の顕の日月星辰時代の夏等と解釈する）の稽古をしなければならない。また、魄、つまり身体をしっかりした土台とし、そしてひもろぎとなって神の声（一元の大神の意志）に従って技をつかうということであろう。

＜呼吸法＞では、魄の身体をしっかり鍛えて土台とし、このしっかりした土台から魂（心、精神、念力、気持ち）で技をつかい、相手を導く。

- 「**そして引力の鍛練を進んでゆかなければならない。**」とは、そうすると引力が養成されるということであるし、引力がつくように鍛錬しなければならないということである。
  ＜呼吸法＞では、魂が働いてくると、相手をくっつけてしまう引力が働いてくる。魄でやっているうちは、相手を弾いてしまい、引力が働くのは難しい。
- 「**そして真空の気と空の気は、合気によく性と技とにむすんで、技の上に科学しながら武産の神より与えられた力を得なければならない。**」とは、宇宙の気と己の気を合わせて、技と結び、法則に則って技をつかい、神通力が得られるようにしなければならない。
  ＜呼吸法＞では、阿吽の呼吸によって、宇宙と己の気を結び、宇宙の法則に則って技と体をつかうと大きな力（神業）が生まれるということだろう。
- 「**そして表裏なく、魂を上にしなければいけない。**」とは、技を掛けるのに、身体（魄）を土台とし、その表に魂が来るようにし、魄が表になって魂が裏になるようなことがないようにしなければならない。
  ＜呼吸法＞では、身体に十分気と力を満たし、この土台をしっかりして、後は、裏に控える魄の後押しによって、魂（心、精神、念力、気持ち）で技と体をつかうのである。

大先生は、もっともっと沢山な大事な事を教えようとされているはずだが、残念ながら未熟故今のところはこんなところである。
分からないのは仕方ないだろう。分かるように、出来るようにしていくしかない。
それがこれからの修業になる。
しかし、今回、大事な事が明らかになった。『武産合気』『合気神髄』の中に教えがあるという事である。迷ったり、行きづまったら『武産合気』『合気神髄』が教えてくれるはずである。

【第706回】 魂を表に出すのは阿吽の呼吸

合気道は魂の学びであり、魂を表に、魄を土台にした技をつかわなければならない

わけだが、それでは魄の力に頼らなくなり、魂を表に出して技をつかうためにどうすればいいのかという事になる。
「魂を表に、魄を土台にした技をつかわなければならない」も大先生の教えであるが、「魂を表に出して技をつかうためにどうすればいいのか」も大先生は教えておられる。それでは、大先生はどのように教えられているかというと、例えば、「魄力でやってゆく国は、最後は上手くゆかない。阿吽の呼吸でやってゆくこと、あくまで魂を表に出すことである。（武産合気 P.103）」と言われているのである。しかし、このままでは分かりづらいので、「国」を「技」と換えてみれば分かり易い。つまり、「魄力でやってゆく“技”は、最後は上手くゆかない。阿吽の呼吸でやってゆくこと、あくまで魂を表に出すことである。」となる。合気道の教えは、時間空間を超越した、つまり万有万物に適用する宇宙の教えであるから、「国」を「技」にも適用できるわけである。柔軟な頭でないと、大先生の教えは中々理解が難しいことになる。

そして更に大事な事は、「阿吽の呼吸でやってゆくこと、あくまで魂を表に出すことである」。ここで大先生は、魂を表に出すためには、阿吽の呼吸でやることであると言われているのである。つまり、阿吽の呼吸でなければ魂を表に出すことはできないという教えなのである。

しかし、阿吽の呼吸をつかうのも容易ではないだろう。阿吽の呼吸がどんな呼吸なのか、他の呼吸とどこがどう違うのか、どうすれば阿吽の呼吸ができるのか、阿吽の呼吸で何故魂が表に出てくるのか等々を理解し、そして身につけなければならないからである。

更に魂を表に出して技をつかう場合、前にも書いているように、魄の土台をしっかりするよう魄を十分鍛えなければならない。そして、その十分に鍛えた魄の力の土台をつかわずに、土台の表に出る魂で技をつかうのである。この魄の力に陥らないのは至難のわざなのである。

また、阿吽の呼吸のためには、「身心統一が肝要」であり、「念を五体から宇宙と気結びし、宇宙の中心に立つことである」と大先生は言われている。

そして、「阿吽の呼吸は五体のひびきであり、千変万化する」とも言われている。これによって五体のひびきと宇宙のひびきとが同一化して相互交流し、技が生まれるというのである。勿論、五体と宇宙の異質のものが同一化したり、相互交流するのは「気」（生命力）である。これを「気の妙用」という。この「気の妙用」にも阿吽の呼吸が必要不可欠なのである。

これらは私が考えた事ではなく、大先生の下記の教えを引用、解釈したものであるから信じなければならないことになる。
「武道の奥義は、念を五体から宇宙と気結びし、同化して生死を超越し、宇宙の中心に立つことである。このようにして出た技は、愛の恵みの技となるのである。これは武産合気。これが結びはひびき、それは五体のひびきである。阿吽の呼吸である。これは千変万化するのである。これには初めに述べた技の発兆の土台、身心統一が肝要である。
宇宙のひびきと、同一化すること。そして相互交流。この変化が技の本となるのである。すなわち、「気の妙用」である。五体と宇宙のひびきの同化。これにより光と熱と力が生まれ、この現象は微妙な妙用である。」（合気神髄　P.176）

阿吽の呼吸で、魄を土台に、魂を表に出して技をつかえるようになると、相手の魄の力は抜け、相手とくっつき、魂（念、心）で相手を導くことができるようになる。阿吽の呼吸で、魄を土台に、魂を表に出す稽古は、片手取り呼吸法、坐技呼吸法、後ろ両手取等が分かり易いようなので、これらの片手取り呼吸法、坐技呼吸法、後ろ両手取から始めたらいいと考える。そして片手取り呼吸法、坐技呼吸法、後ろ両手取を阿吽の呼吸で、魄を土台に、魂を表に出すことができるようになったらば、他の技でやり、そしてすべての技でできるようにすればいい。これで魂の学びの合気道、真の合気道の修業に入っていけるものと考えている。

【第707回】 魄と気と魂

合気道を修業するに当たって、まずは目に見える形を覚えることから始める。合気道の基本の形を覚えながら、体を鍛え、力をつけていくのである。これが魄の稽古

である。
この魄の稽古も非常に大事であることは言うまでもない。何故ならば、次の魂の稽古に繋がっていくので、力を十分につけていなかったり、体がしっかりしていなければ次に進めないからである。
合気道には力が要らないなどという人がいるが、力は要るし、力はつけなければならない。確かに大先生は、我々が力んだ頑張り稽古をしているのを目にされると、道場にお入りになり、合気道は力は要らない、米糠三合を持つ力で十分だ等と言われていた。このようなことを鵜呑みにして合気道には力は要らないとなったのだろう。大先生は力んだ稽古をご覧になっても叱ることはなかったし、逆ににこにこされてそんなに力まなくてもいいと注意をされ、そして力まないが力強い技を示して下さった。
だが、大先生が、力を入れない、気を抜いた稽古を見つけられると烈火のごとく激怒された。力一杯相手を投げたり、受けを取るのは勿論の事、しっかり相手に掴ませ、また正面打ちや横面打ちでもしっかり打ち、受けなければならないのである。だから初めて１，２年間は、正面打ちで思い切り打たれたために、手の尺骨に痣ができたので、そこを打たれると飛び上がるほど痛かった。また、思い切り掴ませるので手首は太くなり、手首の毛も濃く、太くなっていった。

この二つの事から分かったことは、一つは力一杯稽古をして力をつけなければならないということ。二つ目はつかう力はその内の一部、理想としては米糠三合を持つ力である、つまり、力をつけるが、その力に頼るなということである。

これまでの力は魄の力である。合気道で錬磨する技をつかうに当たって、この魄の力をつかわないということになる。しかし、相手に技を掛けるに際してこの魄の力に代わるもの、しかもこの魄の力より強力なものが必要になるわけである。

合気道は魂の学びであるから、魂が魄に代わらなければならないことになるわけだが、魂（心、念、精神）で技を掛けようとしても、中々思うように上手くいかない。
そして最近分かった事は、魂の前に「気」に働いてもらわなければならないという事である。それが何故分かったかと言うと、一つは呼吸法の鍛練稽古で実感した

事、二つ目は、大先生の次の教えに出会ったことである。
「技は動作の上に気に練り気によって生まれる。（中略）また魂をその中におこし、磨き妙なる技を出し・・・（武産合P104）」。

まず、呼吸法の鍛練稽古での、魄の力に代わる気の実感である。片手取り呼吸法でも坐技呼吸法でも気の力を実感できるが、そのための条件がある。それは魄の力でしっかりした土台を造らなければならないという事である。しっかりした体幹、折れ曲がらない手先・腕、そして阿吽の呼吸でやることである。
坐技呼吸法で具体的な技の説明をすると、①両手を腹と結び、息を吐きながら腹で手先を前に出して相手の手と結ぶ　②阿吽の阿で息を引きながら、相手の手が接している手首を支点として、手先を前に伸ばし、支点の上の腕と上腕を肩そして腰腹に伸ばし結び、③腰腹に結んだら、息は更に阿で引きながら、腰腹から出てくる「気」を手先に流すと手を動かさなくとも相手は浮き上がってくる。ここでこの「気」を四魂や三元や八力に練り、そしてその練った「気」をつかっていけばいい。
これまでは腰腹や手の、所謂、魄の力で相手を持ち上げていたわけだがが、この力はこの魄の力に代わる力であり、魄の力より強力であり、相手に不快感を与えない自然な愛の力と言えるだろう。

この坐技呼吸法での感覚は、先述の大先生の教え「技は動作の上に気に練り気によって生まれる。」と一致する。
魄の力に代わるモノは「気」ということになるわけである。
更に、魂に代わっていくわけだが、それは次回にすることにする。

【第708回】 魂の学び

前回の続きである。
合気道は、魂の学びであるから、魄の稽古から脱出したいと模索している。
ああでもないこうでもない、こうなのかああなのかと研究している。お陰で少しはこれまでの魄の稽古から、ちょっとだけ魂の学びの稽古へ舵が切れてきたようだ。

有難いことに、いろいろなモノが導いてくれ、魂の学びの稽古を支援してくれている。能力や才能がある人なら、もっと迅速・早急に会得していると思うが、そうでないので遅々としている。だが、事実を受け入れ、己の力に見合った努力をするほかないと焦らずにやる事にしている。

お蔭様で支援者にはまだ見放されていないようで、先日、大いなる教えを大先生の合気神髄から受けた。
それは先ず、「合気道は、魂の学びである。魂魄阿吽の呼吸である。（合気神髄P.12）」である。今追求している「魂の学び」は「魂魄阿吽の呼吸である」という教えである。「魂の学び」をどのように身につけていけばいいかというと、魂魄阿吽の呼吸で身につけていけばいいというのである。魂魄と阿吽の呼吸で技と体をつかえということであると考える。

もう少し詳しく説明する。先ず、この「魂魄」に関して、
「合気はある意味で、剣を使うかわりに自分の息の誠をもって悪魔を払い消すのである。つまり魄の世界を魂の世界にふりかえるのである。これが合気道のつとめである。魄が下になり、魂が上、表になる。それで合気道がこの世に立派な花を咲かせ、魂の実を結ぶのである。（合気神髄P.13）」と言われている。
「剣を使うかわりに自分の息の誠をもって悪魔を払い消す」とは、魄のかわりに息（阿吽の呼吸）で魄（悪魔）を消し去ってしまい、魂の世界にかえてしまうことである。
「魄の世界を魂の世界にふりかえる」とは「魄が下になり、魂が上、表になる」ことであり、魂の世界にふりかえることによって、魂の実を結ぶのである。

次に阿吽の呼吸である。
大先生は、「阿吽の呼吸の理念力で魂の技を生み出す道を歩まなくてはならない。（合気神髄P.12）」と言われている。
阿吽の呼吸の理念力で魂の技を生み出さなければならないと言われているのである。つまり、阿吽の呼吸は理念力を有しており、そしてまた、魂の技を生み出すということである。
まず、阿吽の呼吸は理念力を有すのだから、阿吽の呼吸には理と念が無ければなら

ない事になる。理とは法則（宇宙の法則）と念とは心、真の心＝魂であろう。

合気道は、魂の学びであるとは、魄が下になり、魂が上、表になる魂魄と理念力の阿吽の呼吸で技を生み出す修業をすれば、魂の技の実が得られるということではないかと考える。

【第709回】 気と息

これまで体のつかい方にも法則があると書いてきた。それは体に関しては腰腹、足、そして手の順に動かして技を掛けなければならないし、そしてまた、腰腹の前に息が先行しなければならないと書いてきた。要は、息で体をつかい、技を掛けるのである。
息は、イクムスビである。イクムスビはイーで息を吐き、クーで息を吸い（引く、入れ）、ムーで息を吐く。ムーで相手と離れ、ビィーのイで息を吐きながら相手と結び・・と続くわけである。

この順序の法則で技をつかわないと、相手と結ぶ事も、相手を導くことも難しい。この息→腰腹→足→手の順序の法則に則って技の錬磨をしていかなければならないのである。慣れてくればそれまでのこの法則を無視したり、軽視していた稽古とは質の違う、次元が変わる稽古になるはずである。先ずはこのイクムスビの息づかいによる体づかい、技づかいの稽古をしなければならないだろう。

しかし、この法則に則った稽古をある程度続けて行くと、この法則もまだ万全ではないことが分かってくるのである。イクムスビの息によって、腰腹、足、手とつかっていくのだが、時として、息が続かなかったり、吐くと吸うが混同してしまうのである。クーで吸い続けなければならないところを吐いてしまったり、吐いたり吸ったりしてしまうのである。イクムスビの息づかいの法則違反である。
だが、不思議な事にこの息づかいの法則違反でも技は上手く掛かることがあるのである。何故、法則違反でも技が上手くかかるのか？

その答えは、更なる法則である。息に先行し、息を変化させる息の生親である気である。気によって息を微妙に変化させることにとって、体と技が上手くつかえるということなのである。つまり、気を上手くつかえば、息は微妙に変化し、技が上手く効くようになるということである。
大先生は、これを「気の妙用は、呼吸を微妙に変化さす生親（いくおや）である。これが武（愛）の本源である。気の妙用によって、身心を統一して、合気道を行じると、呼吸の微妙な変化は、これによって得られ、業が自由自在に出る。」（合気神髄　P.85）と言われておられる。
気の妙用によって、心身を統一して技をつかえば、息の微妙な変化が得られるのである。気を出すためには阿吽の呼吸で手に対照力を働かせ、魄（身）を土台にし、魂（心）を上・表とする心身統一をするのである。この出てくる気によって、息を微妙に変化させることができ、そして技を自由につかえることになるわけである。

気が息に先行し、息を微妙に変化させるように意識して技を掛けていけばいい。まずは気を出すのである。その後、息、腰腹、足、手とつかうのである。
これが一番分かり易く、身に着きやすい稽古法は、昔はどの時間もどの先生も準備運動代わりに必ずやられていた「転換法」であると思う。特に、これは気の転換には最適である。

【第710回】 西田幾太郎の禅と合気道

合気道に入門した頃、合気道はどんなものなのかほとんど知らなかった。
今思い出すだけでも冷や汗ものであるが、例えば、合気道の技は凄いモノで、修業は大変だろうが、修業の暁には気合で敵を倒せるようになるのだろうとか、力をつかわなくともチョチョイガチョイと敵を投げたり、極めたりできるのだろうと思ったのである。勿論、これは稽古が進むにつれて、幻想であると分かった。
その後も周りから合気道とは何々であるとよく聞くこともあった。その一つに「合気道は動く禅である」ということである。ヨーロッパでもよく言われていたようだし、これで合気道に入門した人も多いはずである。
「合気道は動く禅である」それほど理解に苦しむことではなかったし、ある程度そ

うかもしれないと思いながら稽古をしてきた。禅のお坊さんが坐禅をするというのは、体をつかうことで、それは合気道では形稽古で技の錬磨をすることであり、禅は座って考え、合気道は技の錬磨で考えるからであろうと思ったのである。

最近、また一寸禅に興味を持ち、禅と合気道の関係について本やインターネットなどを見たので、その関係を少しまとめてみたいと思う。

先ず、合気道の稽古をしていて、これは禅と共通するなと思われることに度々遭遇していたことである。合気道の稽古をしていると、合気道はパラドックスの連続であると驚かされる。稽古の節々でそれまでやっていたこと、考えてきたことを否定し、それまでの真逆を行わなければならなくなるのである。その真逆に踏み切れずにそれまでと同じようにやれば上達がないのである。そのパラドックスについては度々書いてきた。例えば、力はつけなければならないが力はうかわない。技を掛けて相手を倒すのではないが相手は倒れなければならない。ぶつかって、ぶつからない。動かさないで動かす。相手が一人の時は多人数と、多人数の時は一人と思う等などである。
これは禅問答のようだろう。これからもこのパラドックスは続くものと思っている。

次に禅は坐禅を組んで本来の自分、真の自分を探し求めると言われる。私自身は禅の修行をしたわけでもないし、坐禅を真剣に体験したわけでないので、禅はよく分からない。本やテレビなどで知る程度である。
最近、ＮＨＫテレビで西田幾太郎「善の研究」が放映されたのを見、そしてそのＮＨＫテキストを購入して読み、この機会に禅を合気道に関係づけて考えてみることにした。西田幾太郎の『善の研究』や禅の書物を読んだわけではない。只ＮＨＫテレビのテキスト、それもそのテキストを書いた批評家（若松英輔東京工業大学教授）の解釈に則ったものであることをお断りする。

まず、西田幾太郎は、「禅は人格の実現である」と言っている。
これは合気道でも同じであるだろう。合気道はこれを知育・徳育・体育・常識の涵養及び真善美の探究とも言っている。知・徳・体・常識を育て、至真、至善、至美

の人格をつくり上げるのが合気道の目的ということにもなると考える。
そのため禅では坐禅を組み思惟するが、合気道は技を練ることによって宇宙との一体化を図っていき、稽古の中や道場の外で思惟していくことになる。
尚、前出しの若松英輔教授によると、思惟するとは、こころの奥にあるもの、世にいういのちの営みという。また、思惟と同じような言葉に、「思考」と「思索」があり、「思考」は、俗にいう「あたま」で行うもの、「思索」はこころの営みという。
合気道と結び付けて解釈すると、思考の合気道は、形を覚え、力に頼る物質的稽古であり、思索の合気道は、魄の力ではなく心や念をつかう稽古であり、思惟の稽古は、真の心であり宇宙の意志と力である魂の合気道であると考える。

『善の研究』にある西田幾太郎の禅の「善」は、若松英輔教授によると「社会生活における“個”と、他社と共にある“個”は両立し得ます。この二つの“個”が共に開花することが、西田のいう“善”なのです」、そして「彼にとって“善”という。とは、“大いなる自己の開花であり、それに基づいて”行為“することなのです」という。
合気道では、地上天国や宇宙楽園の建設、万有万物の生成化育を乱さず、支援するのが善ということになろう。

西田幾太郎の『善の研究』を、一寸目を通しただけなので正しいかどうかは分からないが、禅はこれまで修業し思索してきた合気道とは大いに共通点があるが、違いもあるように思える。
私の印象としては、「個から出発して個を超えていこうとする」とか、禅は人間主体、自己主体であるあるようだ。西田幾太郎は宇宙を感じようと坐禅を組んでいたようだが、その宇宙の営みを感じようとはしたようだが、自分に取り入れるようなことまではしなかったようだ。それに対して、合気道の植芝盛平翁は宇宙の営みを身につけ宇宙と一体化し、神と交流し、顕幽神界を行き来され、そして万有万物の生成化育を助け、地上天国、宇宙楽園建設に励んでおられたのである。開祖は合気道の目的は、「宇宙の大虚空の修理固成」であると言われている。

合気道の植芝盛平翁の伝記『合気道開祖　植芝盛平伝』（講談社）に、「ところが実際には、開祖は日ごろ、禅にさほど興味を示さなかった。真に深い禅学・禅道に

ついてはもちろん謙虚にその価値を認めていた」（234頁）とある。また開祖は「私の武産の合気は宗教から出てきたのかというとそうではない。真の武産から宗教を照らし、未完の宗教を完成へと導く案内である」（合気神髄 P115）と言われているのである。
植芝盛平大先生が何故禅にそれほど興味を示されなかったのかのお気持ちがよく分かる。

また、同書に、鈴木大拙師が道場を訪れ開祖に会われているという。そして禅と合気道とは自然に結びつくものであると合気道の感想を述べられた。
因みに、鈴木大拙師の禅は、「禅とは自己の存在の本性を見抜く術であって、それは束縛からの自由への道を指し示す。言い換えれば、我々一人一人に本来備わっているすべての力を解き放つのだ、ということもできる」という。
やはり人格の実現ということになると思う。

禅と合気道は歴史が違うが、禅の世界には世界に大きな影響を与えたような著名人を数多く輩出している。近世以降でも、例えば、西田幾太郎、鈴木大拙、大森曹玄やアップルを創業したスティーブ・ジョブズや、著名なドキュメンタリー映画監督であるマイケル・ムーア、元巨人の川上哲治、京セラの稲盛和夫会長などは誰でも知っている。しかし合気道では、大先生がおられた頃は多くの産業界、政界、芸能界、スポーツ界等々多くの著名人が合気道に心酔したり、稽古をしておられたが、残念ながら、最近はその名を耳にしない。
個人の人格の実現を目指す禅の方々が世の中で活躍されているのに、神人同一化や宇宙との一体化を目指し宇宙天国・地上楽園建設の生成化育を目指す合気道にそのような人が出てこないのは残念である。大先生だけの合気道にしてしまわないようにしなければならない、というのが今回の結論である。

参考文献　　ＮＨＫテキスト　２０１９．１０月　「善の研究　西田幾太郎」
『合気道開祖　植芝盛平伝』（講談社）

【第711回】 空の気を脱して真空の気に結ぶ

合気道の修業は技を練って精進していくが、合気道の技を身につけていくのは容易ではない。そして長く続ければ続けるほどその難しさが分かってくるものだ。初心者は合気道の技がよく分からないので、基本の形を覚えれば技がつかえたと思い、分かったつもりになり、合気道の難しさに気づかないものだ。

先ず合気道の技は、宇宙の営みを形にし、宇宙の法則に則っていなければならないということを認識しなければならないが、これが最初の関門である。例えば、陰陽十字などである。

次に合気道を創られ、技を残して下さった開祖は、技を生むためにはやるべき事をやらなければならないと教えておられるので、その教えに沿って技の錬磨をしなければならないということである。
例えば、「天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す」「陰陽と陰陽とを組んで・・・技を生み出してゆく」「「天の浮橋に立たねば武は生まれません。」等など沢山ある。
つまり、このやるべき事である法則によって稽古しないと、合気道の技は生まれないという事なのである。

さて、今回はこの技を生むためにはやるべき事の一つである「空の気を脱して真空の気に結ぶ」を研究したいと思う。
この点について開祖は次の様に言われている。
「まず、空の気は物であります。それがあるから五体は崩れず保っております。空の気は重い力を持っております。また本体は物の気で働きます。身の軽さ、はやわざは真空の気を持ってせねばなりません。空の気は引力を与える縄であります。自由はこの重い空の気を解脱せねばなりません。これを解脱して真空の気に結べば技が出ます。」（合気神髄 P.67）

この文章は懇切丁寧に詳しく書かれていますが一寸難解である。そこでこれをもう少し簡単にまとめてみると、「空の気は引力を与える縄であります。自由はこの重い空の気を解脱せねばなりません。これを解脱して真空の気に結べば技が出ます。」となるだろう。

上記のものより字面の意味が分かり易いだろう。しかし、この字面の内なる真の意味は難しいだろう。

“空の気を脱して真空の気に結ぶ”は、長年に亘って抱いていた課題であったが、最近その意味するものが多少分かってきたようなので書いてみることにする。
まず、ここで難しいのは“空の気”と“真空の気”であろう。
これを大先生の教えと己の稽古から解釈してみる。
“空の気”を大先生はここの最初の文章では、「空の気は物であります。それがあるから五体は崩れず保っております。空の気は重い力を持っております。また本体は物の気で働きます。空の気は引力を与える縄であります。」と言われている。
これから先ず、空の気は物であるということである。精神的な物ではなく、物理的な物であるということである。これは見えないから、幽の幽ではなく、幽の体であると考える。そして人体には気（生命エネルギー）が満ちており、五体を崩れずに保っている。また空の気は重い力を持っているから、体を重くし地に落すこともできるわけである。更に、本体は物の気で働くとあるのは、己及び相手の本体（体幹と考える）は手足（物）に満ちた気によって働き、動くということだと考える。
そして更に、空の気は引力を与える縄であるは、空の気には引力があって、相手と結んでしまう引力があるということである。実際にこの引力の手で相手と磁石のようにくっついてしまうことも出来る。

次に、“真空の気”は「身の軽さ、はやわざは真空の気を持ってせねばなりません。」と言われている。また、大先生は別なところで、「真空の気は宇宙に充満しています。これは宇宙の万物を生み出す根源であります。」とも言われている。
“空の気”は物であり己自身の中にあるのでそれがどのような物であるか理解するのはそう難しくはないが、“真空の気”は身の回りに充満し、万物を生み出しているのだが、己の外の宇宙にあるので、それがどのような物であるか理解したり実感するのは難しいのだと思う。しかし“真空の気”は実感するほかないのではないかと考えている。

鳥たちが木に止まったり、地で遊んでいるのを見ていて不思議な事に気がつく。どんなに小さな鳥、大きな鳥でも重さがあるのに、飛びあがり、飛んでいくのであ

る。これを上記の“空の気”と“真空の気”の法則に合わせて見ると“空の気”と“真空の気”が分かってくるようである。鳥たちは、“空の気”と“真空の気”を上手につかっているのである。
まず、鳥は飛びあがる直前に五体に満ちている気を体に集めて、地や枝に接している。空の気の凝縮である。そして空の気を出し真空の気を思いっ切り取り入れ飛び上がるように見える。恐らく息を吐いて空の気を出し、真空の気を吸って飛び上がっているわけだが、この際、枝や地との結びを断ち、宇宙の真空の気と結んでいることになる。

これに関連して思い当たることがある。中学、高校のクラブで走高跳をやっていたが、今思えば無意識の内に、“空の気”と“真空の気”でやろうとしていたようである。空の気を五体に満たして地を踏み込み、飛び上がる直前には腹に気を集めて体を十分地に接触するわけだが、これが空の気である。そして飛び上がる際には、息を入れて体に“真空の気”を満たし、地との引力を断ち、飛び上がっていく。この真空の気”は、大先生が言われるところの、「弓を気いっぱいに引っ張ると同じに真空の気をいっぱいに五体に吸い込む」というモノであろう。

入門して間もなくのある時、本部で教えておられた有川定輝先生に、これまで何をやってきたかと聞かれたので、陸上競技の走高跳ですとお答えすると、先生はそれを合気道に役立てるといいと言われたのである。私は、走高跳は重心を上に上げる動きなので、重心を下げなければならない武道には役立たないのではないでしょうかと言った。先生は分かっていないなという顔で苦笑いされていたのを思い出す。今になると全くその通りで恥ずかしいかぎりである。“空の気”と“真空の気”の法則を駆使すれば、走高跳にも役立つはずなのである。恐らく走り幅跳び、三段跳び、棒高跳びなどの飛び上がる競技は勿論の事、１００ｍや２００ｍなどの走り競技でも、“空の気”と“真空の気”を駆使すれば超人的な記録が出るのではないかと期待している。また、剣や杖もこの“空の気”と“真空の気”をつかえば、合気剣、合気杖になるはずである。
因みに、空の気は体を重く沈めることになるので、鳥や走り幅跳びのように空の気から真空の気に結ばずに、空の気から空の気に結べば、体は更に重く沈むことになる。これを極限まで取り入れているのが、開祖が最高の魄の世界であると言われた

相撲であろう。
これから有川先生の御忠告を生かして“空の気”と“真空の気”の技を鍛錬していきたいと思っている。

“空の気”と“真空の気”が少し分かってきたところで、今度は技を生み出すために、この“空の気”と“真空の気”をどのようにすればいいのかということになるが、それは前の文でもう説明した。簡単に言えば、この重い空の気を解脱して真空の気に結べば技が出るということになるわけである。
鳥が飛びあがり、飛ぶよう、走高跳で思い切り踏み込んでバーを飛び越えるように“空の気”と“真空の気”をつかえばいいと考える。
四方投げでも、呼吸法でも、空の気を脱して真空の気に結んだ技でやれば相手は倒れてくれるようだ。

【第712回】「合気会」認可申請上申書の“合気道”

合気道を精進していくためには体を練り技を練っていかなければならないが、体と技をどのように練っていかなければならないのかの為にも、合気道の哲学、理合いの為にも合気道の聖典である『合気神髄』『武産合気』を読まなければならないと考える。
しかしながらこの両書は誰もが知る如く非常に難解であり、一度や二度読んだぐらいでは理解できないどころか、何度読んでも分からないだろうと思われる箇所も多数ある。これらの難解の箇所は稽古のレベルが上がることによって分かるようになるようだが、レベルアップは何時、どのぐらい現れるのか分からないので、これだけに期待することは出来ないことになる。

この聖典となる『合気神髄』『武産合気』は、大先生のその都度の最高のお考えを言われ、書かれたものであると思う。だから難しいわけである。
そこでこの両書を理解する為に、これ以前に言われた事や書かれたものを研究すればいいと考える。つまり、他の書籍や書き物も研究するという事である。

最近、『合気道開祖　植芝盛平』（講談社）を読み返したところ、これまではっきりせず、よく分からない事で明らかになったことがある。
この本の中にある、“「合気会」認可申請上申書”（P.274）から、これまではっきりしていなかった合気道の明確な定義、そして又○△□と動が少しはっきりしたのである。
その一部を引用し、そしてその解釈をしてみる。
「そもそも合気道とは、（略）天地に融合する心身の保健、加害に対する護身の技術であります。護れば一つの球となり、展けば四角となり、構えては錘となり、動いては繭形となり、縮みては珠玉となり、真に千変万化、名状することが出来ません。」

先ず、合気道の定義である。明確に健康法であり護身の技術であるとある。武道を知らない役人にわかるよう、そして占領しているＧＨＱにも刺激せず納得してもらえるよう気をつかわれているご苦労が感じられる。武術と言わずに護身の技術であるとしたことである。勿論、この後、合気道は地上天国建設や宇宙との一体化に変わってきたが、最初の定義は明らかに健康と護身武術であったわけであり、敵に負けないための武術であったわけである。今の合気道は争わない愛の武道ではあるが、根底には護身の技術である武術があることを再認識する必要があるように思う。

次に合気道の○△□と動きに関してである。“護れば一つの球となり”とは、心を円くして、息と気を腹に集めて身を護ると気に包まれ、心と気が球の○になるということであると考える。方円の器で包み込むということだろう。

“展けば四角となり”は、息を引いて相手を向かい入れる時は万全の四角になるということであろう。大先生は、引く息（吸う息）は四角で、吐く息は丸く、そして四角は万全の態勢と言われているからである。

“構えては錘となり”は、三角法の半身の構えであり、心を円く体三面に開く構えである。相手に対する場合はこれで構えなければならない事になる。

“動いては繭形となり”とは、合気道の技と体の動きは繭形になるということである。これまで技を掛ける際は、手も腹も∞でつかわなければならないと書いてきたが、この∞こそ大先生が言われている“繭形”ということになるはずである。これで合気道の技と体の動きは“繭形（∞）”にならなければならないことが明確になったわけである。

“縮みては珠玉となり”とは、阿吽の呼吸で息を引く場合も息を吐く場合も腹中に玉が産まれる。この玉は息と陰陽によって左右前後に動く珠玉になるということだと考える。体も技もこの玉で掛けるとも言っていいほど重要な玉ということである。

これで合気道は武術的な要素があること、健康法である事、○△□の事、技も体も“繭形（∞）”につかわなければならないことなどがはっきりしてきた。偶には原点に帰ることも必要なようである。そして『合気神髄』『武産合気』を理解するためにも、更に他の文献や書物を研究することにする。

参考文献　　『合気道開祖　植芝盛平』（講談社）

【第713回】 合気道は無抵抗主義

大先生は、「合気道は、まずは天の浮橋に立たなければならない」、「天の浮橋に立たねば武は生まれません」と言われている。天の浮橋に立つことによって天地、宇宙と一体化し、魂魄の正しく整った上に立った十字の姿で盤石になるわけである。この態勢に敵（稽古相手の受け手）が手を掴んだり、打ち込んで来ても、こちらが何もしなくともその手を弾き飛ばしたり、引っ付けてしまう。
過って大先生はこれを稽古の折によく見せて下さり、そして次の様に言われていた。「敵が、“宇宙そのものである私”とあらそおうとすることは、宇宙との調和を破ろうとしているのだ。すなわち、私と争おうという気持ちをおこした瞬間に、敵はすでに破れているのだ。そこには、速いとか、おそいとかいう、時の長さが全然存在しないのだ。合気道は、無抵抗主義である。無抵抗なるが故に、はじめから

勝っているのだ。邪気ある人間、争う心のある人間は、はじめから負けているのである。」（武産合気　P.8）

ということは、天の浮橋に立ち、無抵抗主義にある相手に攻撃を加えることは負けになるとしたら、攻撃もある合気道の稽古の意味がなくなるのではないか？
しかし、稽古はこれまで通り続けなければならないと思う。その理由は、

- このレベルに達する人はそういないだろうから、当面は心配しないで引き続き技を練っていく稽古をすればいいと思うから
- 天の浮橋に立ち、無抵抗主義を会得する為には、技を練り合う稽古が引き続き必要であるから
- 技の錬磨の稽古を通して、天の浮橋や無抵抗主義を身につけていけばいいと思うから

等である。

天の浮橋に立ち、無抵抗主義に身を置くと、相手の力と心が萎えてしまい、攻撃力がなくなってしまうので、そのままでは稽古にならないことになる。そこで相手に攻撃するよう導かなければならないことになる。しっかりした体（魄）を土台にして、その上の念・心（魂）で相手が攻撃するように導くのである。気と息と共につかうのである。

また、天の浮橋に立ち、無抵抗主義に身を置くと、合気道は勝負が厳禁である意味がわかるし、勝負の無意味さがわかってくる。
まだまだ出来ないし、十分には分からないが、無抵抗主義に徹することができるように修業をしていかなければならない。
そして今の混乱した世界を、合気道の無抵抗主義に導きたいと思っている。

【第714回】 水の位と息

合気道の相対稽古で技を掛ける際、何よりも最初が肝心である。

これまでは相手と接したところが最初の肝心であると書いてきた。相手との接点を動かさずにその対照を動かさなければならない。そうしないと技にならないし、相手に返されてしまうのである。
さて、今回はこれまでの相手と接した処を最初とするのではなく、接する前を最初にするというものである。つまり、相手と対峙した処を最初の肝心とするということである。前の最初の相手と接したときのように、対峙したときに相手と一体化し導くということである。大先生の技の凄さと美しさの要因の一つは、この接する前の最初にあったと考える。大先生は相手と触れる前の相手と対峙した時点から技をつかい始められていたのである。

大先生は、「昔は、兵法に畳の上で道により、天地の息をもって相手の距離を“水の位”とし、それを彼我の体的霊的の距離のなかにおいて相対す。
相手火をもってきたら、水をもって対す。相手を打ちこませると誘ったときは、水が終始自分の肉身を囲んで水とともに動くのである。すなわち相手が打ってくれば、水とともに開くから打ち込まれない。すべて打ち込まれるにも、この真理と合した呼吸で行われなければならない。」（合気神髄 P.98）と言われている。

要は、“水の位”の相対から始めるということである。“水の位”で相手との体的霊的の距離が取れること、水が自分の肉身を囲んでいるので水とともに動くことが出来ること、相手が火をもって攻撃して来たら水で対処できるということである。
しかし“水の位”は身の回りをＨ２Ｏの水が囲んでいるわけではない。ここの“水”は息であり、それも吐く息である。
大先生は、「丸くはくことは丁度水の形をし、四角は火の形を示すのであります。」と言われているのである。それ故、相手と対すれば息を吐くことになる。息を吐くことによって、相手と霊的に一体化し、そして息を引いて火と共に相手に接して技を掛け、最後に息をはいて技をおさめるのである。

因みに、吐く息は、〇―水―天の呼吸―日月の息―和霊
ひく息は、□―火―地の呼吸―潮の満干―荒霊
と教わっている。一般的には、吐く息の方が引く息より強く激しいように思われるが、合気道に於いては、引く息（吸う息）は火であり、潮の満干を生じ、そして荒

魂で激しく、強力な息づかいなのである。

相対稽古で相手と対するときは“水の位”を最初の肝心としたいものである。

【第715回】 密教と曼陀羅と合気道

合気道をつくられた大先生は、合気道を精進するために、「武を修する者は、万有万神の真象を武に還元さすことが必要である。たとえば谷川の渓流を見て、千変万化の体の変化を悟るとか、また世界の動向、書物をみて無量、無限の技を生み出すことを考えるとかしなければいけない。」(合気神髄 P.106)と言われている。これは合気道だけをやっていても限界があり、精進出来ないし、また、身の回りにあるモノすべてから学ぶことができると言われているのである。

今回は、密教と曼陀羅から教えを乞いたいと思う。何故、密教なのかというと、密教の修行の目的は仏との一体化であり、そして合気道は宇宙との一体化であるから、目指しているものは同じであると思うからである。また、それ故、その目的を達成する為にいろいろ学べることがあると思うからである。

密教は仏と一体となるために三密を駆使する。体と言葉と心（印契、真言、仏の姿にイメージ）である。この典型的なモノが加持であるという。加持によって、仏が我に入り、我が仏に入っている「入我我入」になるという。
加持では真言を唱え、胡麻を炊き、太鼓をならし、きらびやかな衣装をつけ、印を結ぶ。五感を総動員するという。
そして重要なのが曼陀羅である。密教にとって曼陀羅は絶対に欠かせない要素であるという。曼陀羅には他の仏教画と次のような形の違いがあるという。
○対称形　○円形　○閉鎖形

曼陀羅は幾何学的な模様で、円くて完全なもの（輪円具足）である。合気道の基本も○□△である。密教も合気道も○□△（曼陀羅には△が○□のようにはっきり表れないようだが、良く見ると△もある）を重視しているのが面白いし、当然だとも

思う。深層心理学者ユング博士は、これを人類の共通性であり、集合無意識といっている。つまり、人類が無意識で持っている生きる糧であるという。

次に曼陀羅の役割である。この役割には次のようなモノがあるという。

- 神聖な場（よりしろ）をつくる
- 祈りの対象になる
- 瞑想としてのツール
- 邪悪を取り除く

これを合気道と対比してみると、

- 合気道でも、稽古をする道場を「神聖な場（よりしろ）」にしなければならないし、「邪悪を取り除かなければならない」。その為に、道場の出入りには心からの祈り（礼）をすることになっている。
- 合気道での「祈りの対象」と「瞑想としてのツール」は、開祖と二代目吉祥丸道主や宇宙の万有万神であろう。だから本部道場には床の間があり、そこに開祖と二代目道主の写真が飾られ、開祖が揮毫された書「合気道」が掛けられているのである。大先生がご覧になっていると思い、そして宇宙の営みをイメージしながら稽古をするのである。

合気道もただドタバタ稽古をすればいいということではなく、よりしろをつくり、その場の邪悪を取り除き、宇宙の営みや開祖の姿形をイメージして稽古をしなければならないことになるだろう。

密教は加持祈祷や胡麻儀式など異空間のパーフォーマンスで生命力の活性化を図り、仏に近づこう、一体化しようとしているという。
合気道も非日常的な異空間で技の錬磨を通し、宇宙の営みを身につけ、宇宙との一体化を図ろうとしていることは、密教も合気道も異空間のパーフォーマンスをしていることになる。

さて、密教と仏教の大きな違いの一つに、仏教は悟るのに長大な時間が掛かるとされ、今生で悟ることは出来ないとされるのに対し、密教は現世で悟ることが出来る

のである。例えば、空海である。空海は生きている間に悟り、仏と一体化を成功させたのである。
因みに、この密教と仏教の大きな違いは、合気道と他の武道との間にもある。
大先生は、「今までの武道は、長い年期を入れないと自分になれなかったのですが、私はすぐにも了解し得る道を開いたのであります。それだけ今までの武道と合気道は違うのであります。（武産合気 P.39）」と言われているのである。

しかし密教の素晴らしさはこの先にある。他の仏教は悟るためにどうするかで修業しているのに対し、密教は悟ったらどうするかに進むのである。言うなれば、小乗と大乗ということになる。初めは自分の悟りの為に修業し、悟ったら、今度は世の為、人の為に悟ることである。これを利他行といい、密教の究極の悟りであるという。
弘法大師空海が、今もって敬われ、親しまれているのはこの究極の悟り、利他行の悟りを得、それを実行し、成功させたからであると考える。例えば、香川県にある満濃池（まんのういけ）の改修、甲府盆地を流れる釜無川（かまなしがわ）と御勅使川（みだいがわ）の合流部の改修工事等々。

さて、合気道である。合気道の修業の目標は、「宇宙との一体化」と「地上天国の建設」「宇宙楽園の建設」であると教えられているわけだが、この密教の小乗、大乗の教えで明確になる。
つまり、「宇宙との一体化」は小乗の己自身のための悟りであり、「地上天国の建設」「宇宙楽園の建設」は大乗の利他行の究極的な悟りということになるわけである。
合気道の利他行もこれまでは難しかったが、合気道では出来ると大先生は「嘗っては役ノ行者の如く印形をもって、処理し法を修したけれど、すべての罪障を浄めるのにつとめられてご苦労様だけど、吾人は進んで今日の世界の浄めを、和合の合気道によってご奉公させて頂くのであります。（武産合気 P.111）」と言われているのである。

合気道開祖の大先生は、先ずは己自身が宇宙と一体化するように悟り、そして世の為人の為に生成化育するように悟れと言われておられるのである。

参考文献　　ＮＨＫ教養講座　「こころの時代～宗教・人生～ シリーズ マンダラと生きる」

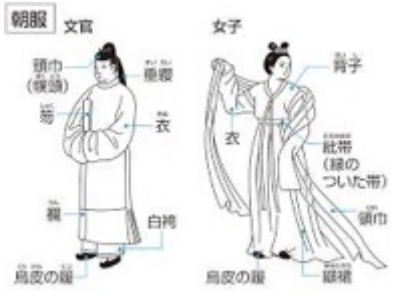
【第716回】 比礼振り（ひれぶり）

合気道の稽古を続けて行くと、これまで気にしていなかったことが気になるようになる。『武産合気』や『合気神髄』などで、これまで何度も目にしていた言葉が気になるのである。気になるという事は、この言葉には大事な意味があり、身につけなければならないと思うということである。

直近のその気になる言葉は「比礼振り」である。この言葉にはこれまで何十回、何百回と出会っていたはずだが、これまであまり気にも留めず、興味もなかったし、いい加減だった。例えば、もしかすると、「比礼振り」とは魚などのヒレを振るようにして、相手を吹っ飛ばす事ではないだろうか等と思ったりしたものである。

大先生は、「合気道は、体と精神と共に、技を生み出してゆく。その技の中に魂のひれぶりがあればよい」(武産合気P.101)等と言われているのである。「魂のひれぶり」がなければ技にならないことになるわけである。
「比礼振り」を会得したいと思うようになったのは、“魂を上に魄を土台にして進む”の理合いが分かり、技である程度現わすことが出来るようになってからである。そこでこれまでの研究した結果をまとめてみることにする。

まず、比礼振りの意味を調べると、
“ひれ”は比礼、領巾と書き、その意味はGOO辞書によると：



1. 上代、害虫・毒蛇などを追い払う呪力を持つと信じられた細長い薄布。
2. 古代の服飾具の一。女性が首から肩にかけ、左右に垂らして飾りとした布帛（ふはく）。
3. 鏡台の鏡をふくときに用いた布帛。

4. 儀式用の矛（ほこ）などにつける小さい旗。

この内、合気道に関係する“ひれ”は、１と２である。
“振り“は振り払うや振り返るなどの振りと考える。

次に、大先生が“比礼振り”をどのように言われているかである。
大先生は、
○「天之浮橋と同時にこの世が**魂のひれぶり**となる。合気道においては、念彼観音力である。勿論、肉体即ち魄がなければ魂が座らぬし、人のつとめができない。魂の緒、魂を表に出すことである。今迄は魄が表に現れていたが、内的神の働きが体を造化器官として、その上に禊を行うのです。これが三千世界一度に開く梅の花ということです。これを合気では**魂の比礼振り**と言い、また法華経の念彼観音力です。」

ここから分かることは、「魂のひれぶり」のためには“天之浮橋”に立たなければならないということ、その為には、ひれぶる魂が働くために魄の肉体がしっかりしなければならないということ、その上でしっかりした魄の土台の上・表に魂を出さなければならないということである。そしてこれが“三千世界一度に開く梅の花”であり、合気道では**“魂の比礼振り”**というということである。つまり、“三千世界一度に開く梅の花”＝“魂の比礼振り”なのである。

○「**魂の比礼振り**は、あらゆる技を生み出す中心である、その比礼振りは融通無碍で固定したものではない。ゆえに合気道の技は固定したものではなく、臨機応変、自由自在の技である。」

ここで言われていることは、技を生み出す上で最も大事な事は「魂の比礼振り」であるということである。そして更に、「魂の比礼振り」によって技は臨機応変、自由自在に出てくるということである。合気道の技は固定したものではなく、自由自在であるとはこの事を言われていると考える。

これで「比礼振り」「魂の比礼振り」が分かってきたわけだが、これを相対の稽古

でやってみると、この「比礼振り」の比礼が振れるのを実感できるようになるのである。私の感覚としては、己の身体を覆っている気が比礼のように振れている感じである。大先生は、気は身を覆っている衣のようだといわれているので、魂と合わせてみるとまんざら妄想ではないと思う。
しかし、このためには、天の浮橋に立つこと、魂を上に魄を土台にして進むことの他に体を一軸にして陰陽十字につかうこと、腹の玉を∞につかうこと、阿吽の呼吸づかいをすること等が必要である。やるべき事があるので、これが出来なければ「比礼振り」は出来ない事になる。
理合いが分かれば、後は稽古を続けてこれを錬磨し、身につけていけばいいと考える。

【第717回】 天の呼吸との交流なくして地動かず

長年稽古をしているせいか相対稽古の相手はよく倒れてくれるし極まってくれるようになってきた。これで技も身に着いてきたかと思ったのもつかの間、まだまだである事を実感した。しかし今度のまだまだであるという実感はこれまでのものとは異質であるし、重要であるから切実である。それはこれまでの強い弱いの問題ではなく、合気道の根本的なものに関わる問題なのである。これまでの問題は、合気道の技の形をしっかり身につけ、そして腕力、体力、気力をつけ、そして技の法則を身につけていけば解決できたようだ。

しかし、これだけでは不十分であることが分かったのである。
例えば、「正面打ち一教」である。これまではほとんどの相手をこの「正面打ち一教」で制する事ができたので、これで「正面打ち一教」を会得したかと思ったりもしたが、全然駄目だったことが分かったのである。受けの相手を力づくで打ち下ろしてきても、力一杯やれば相手は倒れてはくれるが、十分には納得していないのが分かる。

何故か、また、どうすればいいのかを悩んでいる時、大先生の次の教えに出会った。

「天の呼吸との交流なくして地動かず、ものを生み出すのも天地の呼吸によるものである。武も妙精を腹中に胎蔵してことたまの呼吸によって科学しながら生み出していくのであります。（略）天の呼吸により地も呼吸するのであります。（『武産合気』Ｐ．７６）」

この“天の呼吸との交流”によって、「正面打ち一教」は大いに変わり、これこそが真の合気道の真の一教であろうと思っているところである。何故ならば、大先生が言われているように息をつかい、技を掛けているからである。
また、この“天の呼吸との交流”によって地も呼吸するわけであるが、この天地の呼吸により、受けの相手は天地につぶされるような圧を受けたり、宙に浮かされたりと、人の魄の力では決して生まれない力を受けることになり、納得することになるのである。

しかし、“天の呼吸との交流”は容易ではない。やるべきことをしっかりやらなければならにからである。
まず、“天の呼吸との交流”は阿吽の呼吸でなければならないようだ。日常的な息づかいでも、また、イクムスビでも出来ない。阿吽の呼吸は不思議な力と働きをする呼吸である。例えば、阿吽のアーは息を吐き、同時に息を引く呼吸である。また、上と下と逆に気と力を流す呼吸である。また、私が考えるに、阿吽の呼吸は息ではなく気の呼吸である。
因みに、上記の大先生の教えの中で“ことたまの呼吸”とあるが、これは阿吽の呼吸という事だと思う。

阿吽の呼吸による“天の呼吸との交流”に戻る。アーで呼吸をすると、気が天に昇り天と結ぶ、天に結ぶとほぼ同時に体重が地に落ち、足が地と結び、天と地との繋がりを感じる。アーの呼吸で、腹のところで天に向かう気と地に下りる気が分かれるのである。これをよく表わした写真があるので紹介する。本部で教えておられた有川定輝師範の姿である。相手が浮き上がらせ、そして押し潰している姿がわかる。また、腹から上は天の呼吸に、腹から下は地の呼吸に結んでいるのも分かる。



天と地との交流が出来れば、後は自由に動けるようになる。正面打ち一教や入身投げでも、ここから入身に入れるのである。天地の交流をしないで動けば、ぶつかったり、弾いたりしてしまうので腕力でやるほかなくなるわけである。これが、上記の大先生のお教えであろうと解釈し稽古で実践している。

【第718回】 魂の学びの合気道へ

魂の学びの合気道へ入って行こうとしているわけだが、それではどのような“稽古をすればいいのかということになる。非常に難しいはずである。恐らくこれまでの稽古とは異質の稽古、いや場合によっては真逆の事をやらなくてはならないはずである。

しかし心配無用であるようだ。何故ならば、それも大先生は教えられておられるからである。
大先生は、「物の技は力少なし、武の魂魄阿吽をもって自己の妙、明らかなる健やかなる力をつくることこそ合気の道である。（合気神髄 P.160）」と教えられておられるのである。
ここにある“合気の道”こそが、魂の学びの真の合気道であると考える。
そこでこの教えを解釈してみる。“物の技は力少なし”とは、これまでの腕力や体力に頼る魄（物質的）の技では大きな力は出せないし、限界があるということであり、真の合気道ではないということであろう。その後の文は、力は妙なる力、明らかな健やかな力でなければならいし、この力をつくるのが真の合気道であり、その

ためには“武の魂魄阿吽”でやらなければならないということである。“武”とは、矛を止めることであり、また、宗教ではなく武道上での（魂魄）阿吽であるということだろう。“魂魄阿吽”とは、阿吽の呼吸で、土台となる魄の表に魂を出し、そして阿吽の呼吸で技と体をつかうことであると考える。

魄を土台にしてその上に魂を出し、その魂で技と体をつかう、技と体と息づかいについては、これまでに何度か書いてきたので詳細しないが、阿吽の呼吸がどのような呼吸で、どのような働きがあるかを研究しなければならないだろう。まだ良くは分からないが、これまで分かったことをまとめることにする。

- 阿吽のアーで声と息と気が出るが、腹と胸では息と気を引いている（吸っている）。ンーで腹に息と気を収めるが、腹から気が発散していく。つまり、阿吽の呼吸は、出しているが引いているし、収めるが発散すると表裏一体であり対照的働きをする呼吸ということになるだろう。
- 阿吽の呼吸でやると、己の腹や胸、また相手との接点（例えば、手首、手刀）等の任意の箇所で己の気（力、息）を前と後ろ、上と下に対称的（真逆）に流すことが出来る。これによって、天と地を同時にしっかりと結ぶことができる事になる。
- 阿吽の呼吸は、気を体に満たし、体を気で張り強靱にする。
- 阿吽の呼吸は天の呼吸と結ぶ事ができる。
- 阿吽の呼吸でやると、触れた箇所に気と力が集中でき、大きな力が出る。
- 阿吽の呼吸により気結びが出来る。イクムスビではイーで相手と接して結ぶことになるが、阿吽の呼吸の場合は、相手と接する前に、気で結ぶのである。

阿吽の呼吸にはまだまだ摩訶不思議な働きがあるはずだが、後は稽古をしながら見つけ、身につけていけばいいだろう。勿論、魂魄阿吽で技と体をつかい、魂の学びの真の合気道の稽古に於いてである。

【第719回】 顕幽神界と意識・無意識

合気道では、大宇宙を構成するのは、神界・幽界・顕界（現界）であり、これを三

千世界というと教わっている。開祖がご健在で我々をご指導されていた頃は、よくこの神界・幽界・現界（顕界）の言葉をつかわれておられたし、大先生の聖典である『武産合気』『合気神髄』にもこの言葉が頻繁に出てくる。これまではよく分からないのでこれを無視していたが、そろそろ年貢の納め時と考え、この神界・幽界・顕界（現界）を研究することにした。
研究の基になるのは、大先生のお話や聖典の教えであるが、これをユングの深層心理の考えに対比しながら検討しようとするものである。
非常に難しいことであり、正しいかどうかも分からない。しかし誰かが何時かは挑戦しなければならないだろう。

顕界（現界ともいう）は、われわれの日常の目に見える世界であるから問題ないだろう。
この顕界はユングの深層心理では「意識」の世界ということになるようだ。
この顕界での問題は、顕界は物質文明の力の競争社会であるので、いろいろな問題のカスが溜まっていくことである。それらのカスのために世が乱れているのである。
合気道では、この顕界でのカスを取り去ることを稽古の主な目的としている。これを禊と言う。合気道は禊であると言われる所以である。

幽界とは、目に見えない世界、また仏の世界と言われる。また、幽界は禊の場であると大先生は言われている。つまり、合気道は禊ぎであるから、幽界で稽古をしなければならないということになるわけである。
ユングの深層心理では、この幽界が無意識の世界だと考える。通常は意識されていない心の領域である。　夢・瞑想・精神分析などによって顕在化（意識化）されるのである。
合気道で、幽界で稽古をする際は、日常の顕界（現界）の意識を消し去り、そして己が見たこと、聞いたこと、体験したことを呼び起こし、顕在化することだと考える。幽界は物の霊（体の幽）で成っていると云うのである。
幽界をユングの深層心理では“個人的無意識”の世界と云い、次の神界の“普遍的無意識（集合的無意識）”と区別している。
合気道は、先述のように禊であるから、まず幽界で稽古をしなければならない。し

かしよほど集中しないと、顕界の意識が離れず、顕界の物質文明の魄の稽古になってしまう事になる。その為には、それに集中する事の他に、しっかりした稽古の目標を持つことが重要であろう。例えば、宇宙との一体化等である。

幽界の稽古をそれほど難しくはないようだが、神界というのが難題である。
合気道では、神界とは、神の世界であり、魂の世界と言われる。雲をつかむようなものであるが、一つ一つ解明してみたいと思う。

まず、大先生は顕幽神三界を出入りしていたと言われていることである。ということは、人は神界にも出入りできるという事である。それではどうすれば出入りできるかと言うと、禊ぎを通してと、次のように言われているのである。「なんにもない世界、天もなく地もない世界、この世界で合気道をつかっていかなければならないのです。これは禊ぎを通して導いていくのです。つまり顕幽神三界を、この植芝は出入りしているのです。禊ぎ技は禊ぎそのものです。私の合気道は、八百万神がことごとく協力して和合していく道なのです。」（合気神髄　P.５０）
ここで神界に入るために注意しなければならない事は、禊ぎの目的は“今日の世界の浄め”でなければならない事である。この大乗的な目的で禊そげば神界に入れ、そしてまた“八百万神がことごとく協力して和合して”くれるというのである
過っては“世界の浄め”のための修行は大変だったが、合気道で容易にできると次の様にも言われているのである。
「嘗っては役ノ行者の如く印形をもって、処理し法を修したけれど、すべての罪障を浄めるのにつとめられてご苦労様だけど、吾人は進んで今日の世界の浄めを、和合の合気道によってご奉公させて頂くのであります。」（武産合気 P.111）。つまり“世界の浄め”ために、印を組んで修業するよりも合気道で禊ぐ方が容易であるということである。

しかし、神界に入るにしても、神界がどこにあるのかということになる。その場が分からなければ出入りはできない。
だが、神界のある場は身近な腹中にあったのである。神界にも出入りされていた大先生は、「顕幽神三界も、また我々の稽古の腹中に胎蔵しております。
自分の心の立て直しができて、和合の精神ができたならば、みな顕幽神三界に和

合、ことごとく八百万の神、こぞってきたって協力するはずになっております。」と言われているのである。

神界が腹中にあることが分かったわけであるが、過去―現在―未来も、またタカアマハラもすべて自己の体内にあると大先生は言われているのである。

さて、この神界をユングの深層心理では、元型（普遍的無意識、集合的無意識）と言っていると考える。ユングはこの神界に相当すると思う深層意識の元型を“人間の無意識の深層に存在する、個人の経験を越えた先天的な構造領域”としている。
合気道では、「人の身の内には天地の真理が宿されている。人というと万古不易の真理が宿らぬ者はなく、それは人の生命に秘められているのである。本性のなかに真理が宿っている。」（合気真髄 P84）と言っている。
また、トーマス・マンは「人間の魂の深部は、同時に太古でもあり、神話の故郷であり、生の根源的規範と生の原形が基礎をおいているところの、さまざまな時代の、あの泉の深部である。」例えば、太陽を神として把握しようとする様式が人間の心の内部には存在しているといわれる。

大先生は多くの神様と交流されていたようだが、厳しい禊ぎによって、普遍的無意識の世界である神界に自在に出入りされ、超人的な御働きをされたのだと考えている。

合気道の顕幽神界とユングの意識の世界

顕幽神界	合気道	意識の世界	ユング
顕界（現界）	この世の現われた世界	意識	
幽界	目に見えない世界、物の霊の世界。仏の世界 ＊ミソギの場 ＊悟ることにより上の段に昇る	無意識 ＊個人的無意識	通常は意識されていない心の領域・過程。夢・瞑想・精神分析などによって顕在化（意識化）される。
神界	神の世界	元型 ＊普遍的無意識 （集合的無意識）	人間の無意識の深層に存在する、個人の経験を越えた先天的な構造領域

【第720回】 合気道の時間

合気道では時間に関して、後で紹介するような不思議な話を聞いているので、時間に関してはずっと興味を持ち続けてきた。
最近、『時間は存在しない』（カルロ・ロヴェッリ著が出版され、世界中で評判になっているようだが、私も新聞広告で見て、興味を持ち、購入して読んだ。
結論から云わしてもらえば、時間に関してはまだまだ分からない事だらけだということである。勿論、これまで分からなかった事や気がつかなかった事など新たな発見はあったし、これまでの常識と考えられていることを否定したりしている。例えば、「今はない」であり「時間は存在しない」である。

ロヴェッリ博士は時間についていろいろな理論を展開するが、その内、合気道に関係のありそうなものをピックアップして、合気道と関連づけて考えてみたいと思う。

- 「何も変わらなければ、時間は流れない。時間は変化を計測したものであって、何も変化しなければ、時間は存在しない」
  合気道では、相対稽古で二人が動き始めるまでは時間は止まっていることであり、時間の変化は相対する速度ということになるだろう。
- 「この世界は物ではなく、出来事の集まりなのである」
  合気道では、物の体だけでは時間は生まれず、体と技の動きによって時間が生まれるということだろう。
- 「この世界の変化が包括的な順序に従って生じているわけではないという事実だ」
  合気道の開祖や開祖の師匠であった、武田惣角先生などは、過去が見えたり、未来も見えていたようで、過去、現在、未来の順序にだけ従ってはおられなかった。

また、アインシュタイン博士が時間について次の様に言っているという。

- 「運動している物体は時間の流れが遅くなる」

合気道では、速い技をつかって動いていれば、時間が止まっているかと思うような感覚を持つ。例えば、若くて元気な頃の真夏の暑い日に気を許さずに、動きも止めず、技を掛け、受け身を取り合っていたが、もう２，３分は過ぎただろうと時計をちらっとみるのだが一分も過ぎていなかったのである。この時計は一分ごとに針が進むものだったので、一分も動いていなかったことになる。逆に、のんびり稽古をしていれば、時間が進むのが早いし、稽古時間の終わるのも早いはずである。

- 「強い重力を受ける程、時間の流れは遅くなる」「重力も時間を遅らせる原因」
  合気道では、重い相手と稽古をしたり、重い力で抑えられ続ければ時間の流れは急に遅くなり、早く時間よ過ぎてくれ、早く流れてくれと思うものである。

次に“時間”の定義を辞書で調べてみると次の様になるようである。
“時間”は、出来事や変化を認識するための基礎的な概念である。それぞれの分野で異なった定義がなされる。（Wikipedia）
また、「時間」という言葉は、一般的には、「時の流れのある一瞬の時刻」、あるいは、「ある時刻とある時刻の間の長さ」の意味で使われているが、次のような時間があるという：

- 心と体に流れる時間（体内時計）
- 宗教や哲学における時間観の変化
- ニュートンのどこでも均一に進む「絶対時間」
- アインシュタインの伸び縮みする「相対時間」
- 宇宙と時間の関わり

これらから時間にはいろいろあるし、時間の定義もそれぞれの分野によって異なっているということであるから、それでは合気道分野の時間はどうなるかということになる。
合気道の時間は速度であると定義づけたいと思う。
合気道の開祖である植芝盛平大先生は、合気道修業の上で勝速日（かつはやひ）を体感感得しなければならないと言われているが、大先生はこの勝速日を「時間を超越した速さ」と定義されているのである。つまり、“時間は速さ（速度）であるとい

うことになるわけである。
実際、合気道の技の稽古に於いては“時間”という言葉はない。使うとしたら、稽古時間が何時から何時までとか、一時間の稽古時間などである。

合気道の時間を超越した速さの勝速日についてである。この論文の初めに書いた“不思議な話”である。
一つ目は、大先生は過って鉄砲の弾が見え、向かってくる弾を避けられたということである。それも一度ではなく、何度か行われたというから、偶然ではない。更に興味があるのは、ある猟師と一緒になり、その猟師の撃つ弾を避ける事ができるかと聞かれると、一寸の間をおいて、その猟師の弾は避ける事ができないと答えられたというのである。ということは、撃つ人の技量や人間性によって鉄砲の弾は避けられたり避けられないということ、そして勝速日が生じたり生じなかったりするということであろう。
二つ目は、過って本部道場の内弟子や先輩たちは外でよく喧嘩をして腕を磨いていたようだ。そしてその当人から直接、または又聞きで、我々後進にその模様を話してくれたものだ。そしてその喧嘩の話しで不思議に思い、また興味を持ったのが、喧嘩の際、相手の動きがスローモーションのようにゆっくりに見えたということであった。これは喧嘩をした複数の先輩方が言っていたので、事実であり信じていいだろう。
これも勝速日になった目でみると、相手の動きの速さは遅く見えるという事だろう。また、速さ（速度）は、上記の時間の定義から、自分と相手との相対的な関係で決まるという事にもなるだろう。

また、合気道の勝速日は、時間もない空間もない、宇宙そのままがあるだけを云い、時間も空間も無くなってしまうのである。
合気道における時間には過去―現在―未来があるが、これは「宇宙生命の変化の道筋で、すべて自己の体内にある」と教えられている。
また、空間には顕幽神三界があり、己の体内に胎蔵しているという。
これらの時間も空間も無くし、宇宙と一体化することが合気道の修業の目標であるが、これが出来れば勝速日が生まれるということだろう。
そうなれば、鉄砲の弾が見えるし、避けることが出来、相手の動きもスローモー

ションで見えるということになるのだろう。

この勝速日が生まれる目標に、時間を超越した速さの動きや技はつかえるようになるのは容易ではないはずであるが、一歩一歩それに近づいていかなければならないだろうから、次の様な事から始めている。

- 技を掛ける際は、まずは天の浮橋に立つようにしている。稽古相手や宇宙とを結ぶことによって時間・速度の感覚が日常のものとは異質になる
- 技は阿吽の呼吸で掛ける。これで時間（合気道の速さ）の感覚が変わり、相手の動きはスローモーションに見えるし、己の動きは電光石火となるようである。

大先生はこれを、「我々は正勝、吾勝、勝速日の精神をもって、天の運化を腹中に胎蔵して宇宙と同化、そして宇宙の内外の魂を育成して、かつ五体のひびきをもってすべて清浄に融通無碍の緒結びをして、宇宙世界の一元の本と、人の一元の本を知り、同根の意義を究めて、宇宙の中心と正勝、吾勝、勝速日を誤またず、武産の武の阿吽の呼吸の理念力で魂の技を生み出す道を歩まなくてはならない。」と言われているのだと思う。

これまでの合気道における時間をまとめてみたわけであるが、まだまだ勝速日や電光石火には程遠い。これを土台にして更なる研究をし、合気道の究極の時間である勝速日に近づいて行きたいと思っている。

【第721回】 まずは天の浮橋に立たなければならない理由

天の浮橋についてはいろいろ書いてきたが、大先生の教えを書いたり、頭で考えたことを書くなど具体性がなく、頭でっかちのモノだったと思う。
今回は己の肌で感じ、技で感じ、相手の反応など少し具体的に書きたいと思っている。勿論、不十分でまだまだ完全でないことは分かっているが、これまでの事をまとめて書いてみたいと思う。

まず、天の浮橋に立つのが難しい理由を考えてみると、天の浮橋に立たなくとも合気道の稽古は出来るしやっているということである。若い稽古人達は力一杯、気と体でぶつかり合い、投げたり受けたりしている。天の浮橋に立つなど考えもしないだろうし、また、似合わないと言えよう。
それではこのような若者達の稽古は天の浮橋に立たなくてもいいのかということになる。答えは、やはり天の浮橋に立たなくてはならないはずである。

若者のような元気で威勢のいいのもいずれ天の浮橋に立って技を遣うようにしなければならない。いずれというのは、魄の稽古にある程度めどがついたらということである。まずは、魄の稽古で土台となる体をつくらなければならない。そして魄の土台が出来たならば、その魄の土台の上・表に魂を置き魂で己の身体と相手を導くようにするのである。これを魂の学びの稽古という。

この魂の学びの稽古、魄が土台になって魂が上・表になる稽古をするためには、天の浮橋に立たなければならないのである。水火十字の心と体、天にも地にも、そして相手にも偏せず、天とも地とも相手とも結び相和する姿である。
天の浮橋に立った姿になると、

1. 体がずっしりと重くなる。心の偏たりも無くなり、心体が安定充実する。しかし、心も体も自在に活動できるようになる。
   天の浮橋に立つと、目で見える世界の顕界から、目に見えない世界の幽界に入れるようである。換言すれば、魂（心や念や精神）の稽古をするためには、天の浮橋に立たたなければならないということになろう。
2. その手は相手の手や体と引っ付いてしまい相手を自在に導くことができるようになる。これで剣をつかえば、相手の剣を引っ付けてしまうことにもなる。
   尚、天の浮橋に立った姿にはいろいろあるだろう。私の場合は前の手は腹の前、後ろの手は前の手と直角にし、後ろの足下に落すであるが、養神館では左右の手を腹の前に置いている。この構えは、大先生のこの教えを受けられた塩田館長が導き出された天の浮橋に立った姿だと考える。また、大先生は祈りの姿も天の浮橋に立った姿であるといわれているのである。
3. この天の浮橋に立った姿から、阿吽の呼吸で体（腰腹、足、手）が天と地と結

び、そしてこの天地の働きで技をつかうことになるのである。力で相手を倒そう極めようとしなくとも、相手自ら浮き上がり、動き、倒れていくようになるのである。つまり、天の浮橋に立つと、これまでの中古の覇道的魄の稽古に陥らないようになるというわけなのである。呼吸法、とりわけ諸手取呼吸法はこの天の浮橋に立ってからでないと腕力に頼らざる得なくなるはずである。また、正面打ち一教も然りである。正面打ち一教の難しい理由がこれでもわかる。

以上、「まずは天の浮橋に立たなければならない理由」のこれまでのものをまとめてみた。今後、その理由はまだまだ増えることが予想される。

【第722回】 六根で魂が花咲く

魂の研究、魂の挑戦に入っている。何とか少しでも前進したいものであるが、魂を捉えるのは容易ではない。魂とはどういうものなのか、魂を会得するためにはどうすればいいのかなどまだまだ暗中模索している。今回もその挑戦である。藁をも掴むという気持ちである。

これまで同様、合気道にとって大事な事及びその解決法は大先生が教えられていると信じているので、大先生のお教えから学ぶ。
先ず、大先生はその為にも、真の合気の道が成立しなければならないと、「霊は肉体を育てあげねばなりません。体はまた精神に従って、すべて精神によって動き、精神にまかせてゆかねばなりません。精神を守るだけの肉体となってはじめて道が成立するのです。」（武産合気 P47）と言われている。
これはこれまでまとめた、魄の体が土台になり、その上・表に精神の魂を出し、この魂の精神で技と体をつかうということである。また、この魄の土台となる体は、魂の精神を十分に働かせ、守るものに鍛えなければならないということである。これは片手取り、諸手取、坐技などでの呼吸法で分かり易いと書いてきた。

これが出来るようになると、真の合気の道に入ることになる。物質科学の世界から精神科学の世界、顕界から幽界の修行に入るわけである。

そこで大先生は、「この世界に接する六根の働きを常に浄め磨いておかねばなりません。ここに魂の花は開き、魂の実はむすぶのです。そして顕幽神三界の花を開き実を結び・・」（武産合気 P.47）」と言われるのである。
先ずは、顕界の修行の時から、六根の働きがよくなるように浄め磨かなければならないし、またその後の幽界、神界に於いても引き続き、つまり常に浄め磨いていかなければならないということである。
そうすれば心が磨かれ、六根の働きが自在になり、そして魂の道に繋がっていくと、「心を磨いて、本当に六根の働きをば融通の変えやすいように、つまり魂の道を明らかにしておいたらよい」言われているのである。
更に、「そうすると六根は光となって、表にあらわれてくる。六根が光を放ってくるというと、やることがみな魂の比礼振りということになってくる。」（合気神髄 P.45）と言われているのである。

六根が光となって、表にあらわれ、そして六根が光を放ってくるようにすれば、魂の比礼振りになるということなのである。魂の比礼振りとは魂の花が咲くということだろう。魂の花が咲く、魂が現れて、働くためには六根を常に浄め磨いていかなければならないということだろう。

【第723回】 高御産巣日神と神産巣日神の摩擦作用

魄から魂の次元の稽古に入ろうとすると、これまで以上に大先生の教えに従う稽古をしなければならないことを痛感する。
これまで陰陽十字、イクムスビの息づかいなどで強力な力を出し、そして使って相手を倒し押さえてきたが、力のある相手に頑張られるとまだまだ力不足を感じる。この力を土台にして新たな力を身につけなければならないということである。

大先生は武産合気で、「合気道は宇宙のいとなみが自己のうちにあるのを観得するのが真の合気道なのであります。タカアマハラとは全大宇宙のことであります。宇宙の動きは、高御産巣日神、神産巣日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の行為により日月星辰の現われがここにまた存し、宇宙全部の生命は整って

来る。そしてすべての緩急が現われているのです。」（「武産合気」P.48）と教えられている。
最近気づいたことは、大先生が言われている教えを１００％信じること、その教えの一語一語を大事にすることが絶対に必要であるという事である。

この場合、最初は、「合気道は宇宙のいとなみが自己のうちにあるのを観得するのが真の合気道なのであります」であるが、ここには二つの重要なポイントがある。一つは、大先生が言われている合気道は“真の合気道”であり、“真の合気道”を修練しなければならないということである。二つ目は、“真の合気道は「宇宙のいとなみが自己のうちにあるのを観得する」ことであるということである。

“真の合気道”とは魂の学びの合気道であり、力や体力に頼る魄の合気道と異次元にある合気道ということになる。勿論、魄の合気道が悪いというのではないどころか、非常に重要なのである。何故なら、この魄の合気道によって、魂の合気道、つまり“真の合気道”の魄の土台を造らなければならないからである。その土台がしっかりした稽古を力一杯しなければ、“真の合気道”には移れないと考えている。

次に、「タカアマハラとは全大宇宙のことであります。宇宙の動きは、高御産巣日神、神産巣日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の行為により日月星辰の現われがここにまた存し、宇宙全部の生命は整って来る。」である。
実は、この教えによって、今は多少強い力でしっかり掴ませても、相手の力を抜き、魄力に頼らないで相手を導き倒すことが出来るようになったのである。この教えは非常に具体的で解り易く、そして効果が即現れる教えなのである。
この教えを解釈すると、「タカアマハラとは全大宇宙のことであります」はそのように教えられているので、言葉の上では何の問題もないはずである。しかし、何故、ここに「タカアマハラとは全大宇宙のことであります」とわざわざ言われたかということが重要なのであると思う。大先生は意味のないことは言われないはずだから、その意味を考えるべきだろう。私の考えでは、真の合気道とは宇宙規模であるのだという教えなのだと思う。そして技も体も宇宙規模で、しかも宇宙の動きでつかわなければならないということなのだと思う。それを、「高御産巣日神、神産巣日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の行為」であると言われて

いるのである。
これを技でつかうと、気を地の足の下に左まわりに舞い下ろし、重心を移動しながら他方の手と体を右まわりに舞い昇らせ、更に重心を他方に移動しながら、左まわりに舞い降おしと繰り返す。この左まわりに舞い下りる螺旋と右まわりに舞い昇る螺旋が作用して技を生むということである。これを摩擦連行作用ともいう。そして「すべての緩急が現われているのです。」と技の緩急が産まれるといわれるのである。
この左に舞い降りるを実感したいなら、地に着いた足底を気で左に回せば体はどんどん地に降り、体は安定する。もしこれを右に回せば体は浮くはずである。また、手を右に螺旋で回せば、手と体と気は舞い上がっていくはずである。
尚、諸手取呼吸法や正面打ち一教はこの高御産巣日神、神産巣日神の摩擦作用の行為をつかわせて貰わないと上手くいかないはずである。

それでは何故、この摩擦行為によって摩訶不思議な力が出るのかということになる。それを大先生はここで、「この摩擦作用の行為により日月星辰の現われがここにまた存し、宇宙全部の生命は整って来る。」と言われているのである。
これは、高御産巣日神、神産巣日神の摩擦作用行為によって宇宙の太陽や月や星が造られ、そしてそれらすべてに生命が吹き込まれ整ってくるということだろう。つまり、この摩擦作用の行為によって、宇宙の万有万物がつくられ、バランスが取れ、そして調整・整備されるということであり、そしてこれが宇宙の意志ということであると思う。
従って、高御産巣日神、神産巣日神の摩擦作用によって技と体をつかうことは、宇宙の意志に則っていることであり、宇宙がサポートしてくれるので、超人的な力が出ることになるのだろうと考えている。

【第724回】 地上楽園建設の生成化育とは

合気道に入門して４，５年の間、大先生にはいろいろと教えを受けていた事が最近になってようやく分かってきた。
当時は元気いっぱいで、相対稽古での相手を何とか倒そう、極めようと思って稽古

をしていた。そういう稽古をしていると、突然大先生が道場にお見えになり技を示して下さったり、道話をされたりした事がよくあった。
しかし、大先生の技はよく分からないし、その技のつかい方や要点などを話されるでもなかったし、技に関するご説明も禅問答のようなもので、「合気の技は力は要らない。箸一本持つ力で十分だ」等と言われていたのである。その上、力を抜いた稽古をしているのを見つけられると、“触って倒れるような稽古はするな。しっかり掴ませ、打たせなさい”などと、烈火の如く激怒され、お説教されたものである。

道話もほとんど分からなかった。時間は数分の時もあったし、２０，３０分の時もあった。言葉一つひとつは大体わかるが、全体の意味が分からないのである。しかし、不思議と当時の大先生の道話は耳のどこかに残っているようで、時としてそれを思い出す。
大先生は、合気道は宇宙との一体化であるとある時は言われ、またある時は合気道は地上楽園建設の生成化育であるとも言われていた。
当時は、相手を何とか倒そうとばかり考えて稽古をしていたので、合気道はどんな相手も倒すように強くなればいいのだろうと考えていた。従って、宇宙との一体化とか地上楽園建設の生成化育が合気道であるなど分からなかったし、分かろうともしなかったのである。
しかし、一つだけ覚えているのは、合気道の稽古の目標が二つもあるということが腑に落ちなかったことである。何でも目標というモノは一つのはずだからである。
しかし、これも未熟の由縁であることが後になって分かることになるのである。

合気道にも小乗の合気道と大乗の合気道がある。小乗、大乗は仏教の言葉である。小乗とは己の為の修行の目標であり、大乗は万民、万有万物の為の修行だと思う。
合気道の小乗の修行の目標は己が極限に到達することであり、それが宇宙との一体化ということになるだろう。そして大乗の修行の目標が、“地上楽園建設”であると言われていたわけである。
従って、大先生は、大乗と小乗の目標を言われていたわけで、合気道に二つの修行目標があることになるわけである。
合気道だけでなく、すべてのモノから学ばなければならないとはこのような事であろう。

さて、合気道は、地上楽園建設の生成化育である。この言葉は何度もお聞きしたので十分耳に残っているのだが、その意味するところが、これまで明瞭ではなかった。そして、この意味は思ったほど難しいものではなかったのである。大先生は、“地上楽園建設の生成化育”とちょっと難解な言葉をつかわれていたわけだが、もっと分かり易い言葉でも我々を導いて下さっていたのである。
『武産合気』に「月へのロケットとか、だんだん進んだ知識を啓発して、与えられた使命の上に、人類の幸福をもたらそうと一生懸命やっている。（P.62）とある。これこそが“地上楽園建設“ということである。つまり、

- 「月へのロケットとか、だんだん進んだ知識を啓発して」とは、進んだ科学知識（及び経済・文学・芸術知識等）をより高い認識・理解に導くこと。
- 「与えられた使命の上に」とは、各人は各々使命を持っているから、それを使命として・・・ということ。
- 「人類の幸福をもたらそうと一生懸命やっている」とは、使命を持っている人類は、その各々が人類に幸福をもたらそうと、その使命を果たそうと一生懸命に生きているということであろう。

尚、生成化育とは、生かし育てる事である。
つまり、“地上楽園建設の生成化育”とは、与えられた使命として、人類の幸福をもたらそうと己自身が一生懸命やることであり、また、他人が人類の幸福をもたらそうと一生懸命やる支援をすることということになろう。それを邪魔したり、破壊するのを避けるのが武の役割と大先生は教えておられるのである。
因みに、人類だけが“地上楽園建設の生成化育”をしているわけではない。大先生は、糞ころがしでさえ汚物を片付け万有万物に幸福をもたらそうとしていると言われているのである。

【第725回】 天の気、天地の呼吸、地の呼吸・潮の満干と正面打ち一教＜その１＞

合気道の極意技と思っている正面打ち一教に挑戦し続けているが、この技の難しい

理由が増々わかってきたと同時に、大先生の難解の教えのひとつがわかってきた。この教えには多くの合気道家が四苦八苦しているはずである。その教えは、「息を出す折には丸く息をはき、ひく折には四角になる。そして宇宙の妙精を身中にまるくめぐらし六根を浄め働かすのです。丸く吐くことは丁度水の形をし、四角は火の形を示すのであります。丸は天の呼吸を示し、四角は地の呼吸を示す。つまり天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す。これが人のつとめであり、その上吾人には八百万の神々が悉く道に守護してくれることになっている。天の呼吸との交流なくして地動かず、ものを生み出すのも天地の呼吸によるものである。（中略）天の呼吸は日月の息であり、天の息と地の息と合わして武技を生むのです。地の呼吸は潮の満干で、満干は天地の呼吸の交流によって息をするのであります。（『武産合気』Ｐ．７６）この教えの中に、武技を生み出すための教え、つまり法則が懇切丁寧に述べられているのである。これまでは難しくて分からないし、分かることがないのではないかとも思っていたが、注意深く読んでみると、大先生は丁寧に分かり易く教えておられることが分かる。この教えの要点を挙げてみる。＊は私の解釈である。

- 「息を出す折には丸く息をはき、ひく折には四角になる」：、
  ＊吐く息は丸く、引く息（吸う息）は四角であるということと、息を吐く際は丸く、息を引く際は四角でなければならないということである。
- 「そして宇宙の妙精を身中にまるくめぐらし六根を浄め働かすのです」：
  ＊この息を丸く吐き、四角に吸うことによって宇宙の気（妙精）が身中をめぐり、六根を浄め、そして働かすということである。
- 「丸く吐くことは丁度水の形をし、四角は火の形を示すのであります。丸は天の呼吸を示し、四角は地の呼吸を示す」：
  ＊丸く吐く天の呼吸は水であり、四角い地の呼吸は火であるということである。
- 「天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す」：
  ＊天の気によって、天の呼吸と地の呼吸が生じ、そしてこの天の呼吸と地の呼吸組み合わせで技が生み出されるのである。
- 「これが人のつとめであり、その上吾人には八百万の神々が悉く道に守護してくれることになっている」：

＊この理を、技をつかう人は厳守しなければならない。その勤めを果たしていけば、八百万の神々が守って下さるし、支援して下さるのである。

- 「天の呼吸との交流なくして地動かず、ものを生み出すのも天地の呼吸によるものである」：

  ＊まずは丸く吐く息での天の呼吸から始めなければならない。そうすると引く息の地の呼吸が働くのである。この天の呼吸と地の呼吸で技（もの）が生み出されるという事である。

- 「天の呼吸は日月の息であり、天の息と地の息と合わして武技を生むのです」：

  ＊天の呼吸は地の呼吸に対する呼吸だったが、天の呼吸はまた、お日様とお月様の息であるのである。この日月の息（と思って）に己の息を合わせて丸く息を吐いて地に下ろせば、漠然と天の呼吸を吐いて下ろすよりやり易い。　後半の部分は、この上の項で説明してあるから略す。

- 「地の呼吸は潮の満干で、満干は天地の呼吸の交流によって息をするのであります」：

  ＊地の呼吸は潮の満干、つまり潮満の玉（赤玉）と潮干の玉（白玉）からなっているという事である。つまり、潮満の玉（赤玉）と潮干の玉（白玉）は息を引きながら働かせなければならないということである。しかし、これは容易ではない。息を引きながら腹中の玉を気で満たしたり干したりしなければならないからである。

以上、“天の気、天地の呼吸、地の呼吸・潮の満干”について研究してみた。残った箇所、正面打ち一教でこの教えをどのようにつかうことになるのかは、分量の関係から次回にする。

【第726回】 天の気、天地の呼吸、地の呼吸・潮の満干と正面打ち一教＜その２＞

前回の＜その１＞に続き、今回は大先生の「天の気、天地の呼吸、地の呼吸・潮の満干」の教えを、極意技である正面打ち一教でどのようにつかうことになるのかを研究してみたいと思う。＊は私の捕捉・解釈である。

- まず、天の浮橋に立たなければならない、そして
- 天の気と結び、天の呼吸で息を天から地に落とし、
  ＊天の気と己を結び、天の呼吸で丸く息を吐きながら地に落す
- 足下から気を左に回転させ落す。
  ＊この天の呼吸がないと地の呼吸が生まれず、体も動かない。つまり、“天の呼吸との交流なくして地動かず”“天の呼吸により地も呼吸する”ということである。
- 地の呼吸で体重を他方の足に移動しながら、体を右に回転させ手を伸ばし、
  ＊息を引きながら、足下に左回転で舞い降りる気と右に舞い上がる手と体の摩擦連行である。舞い上がる手は天の気に向かい、引き付けられて上がる。草木が天の気に向かって伸びていくのと同じはずである
- 相手の打ってくる手を、己の手を充分に伸ばし、相手の手と接する手先に気と力を入れ、相手の手と全体を手で抑える。剣であれば、相手を切り下ろした形になるわけである。
  ＊これは引き続き息を引く地の呼吸であるのだが、相手を抑えるために腹を締めるが、この際もまだ息は地の呼吸で引き続けていなければならない。この地の呼吸で息を引きながら腹を締めることが潮の満干の潮満の玉（赤玉）であると感得する。
- 今度は気で満ちた胸を開きながら体重を他方の足と手に移動し
  ＊引き続き息を引きながら、更に胸に気を入れながら手を横に拡げる。わけだが、これが潮の干満の潮干の玉（白玉）であると感じる。
- 天の息を吐きながら体と足と手を収める
  ＊後は息を丸く吐いて体と技を収めるが、これは天の呼吸である

従って、正面打ち一教（恐らくすべての合気道の技）の呼吸は、
天の呼吸⇒地の呼吸⇒潮満の玉（赤玉）⇒塩干の玉（白玉）⇒天の呼吸
となるはずである。

これが「天の気、天地の呼吸、地の呼吸・潮の満干」をつかった好例であると思うが、この理合い・法則ですべての技（形）をやればいいし、やらなければならないと考える。例えば諸手取呼吸法などは、この理合いでやらなければ、力で抑えられ

てしまうことになる。
また、剣もこの天地の呼吸でやらなければ、合気の剣にはならないと思う。これを大先生は、「大宇宙のご全徳を一つの剣にても天地の呼吸に同化する。息を出す折には丸く息をはき、ひく折には四角になる。」（武産合気 P.76）と教えられているのである。

まだまだ十分には出来ないが、理合いが分かれば後は稽古をして、反省、改善していけばいいと思っている。

【第727回】 魂は科学されて出てくるもの　＜その１＞

有川定輝先生の教えに従って、呼吸法を重視して稽古をしている。先生は呼吸法が出来る程度にしか技はつかえないといわれていたので、呼吸法のレベルアップをすれば、一教でも四方投げでも技がレベルアップすると考えているからである。そして最近になって、この教えは正しいとはっきりと自覚するようになった。

合気道で、一般的に最も典型的な魄の稽古は諸手取呼吸法であろう。この稽古は腕や腰腹の体に力がつく稽古法であるが、受けの相手も力がついてくると互角になり、相手が倒れるどころか、逆に返されてしまったりすることになる。
自分の場合もこのような状態での稽古が相当長く続いた。何とか相手を倒せるようになろうと、鍛錬棒を振ったり、筋トレをしたりしたものだ。しかし、稽古相手や稽古仲間も力をつける鍛錬稽古をしているので、力と力のぶつかり合いの稽古となり、そこから抜け出すのは容易ではなかった。

こんな魄力に頼る稽古から抜け出させて下さったのも有川定輝先生だったのである。ある時、片手取り呼吸法で相手に体当たりして、相手を跳ね飛ばして悦にいっているところに先生がこられて、「そんな稽古をしていると力はつかないぞ」と言われたのである。私は過って先生がやられていたような技と体づかいをしていたので、そんな風に言われるのが不可解だった。
そしてこの件を数日考えた。するといろいろな事が見えてきた。一つは、有川先生

ご自身がその時はすでに、以前の荒っぽい、中古の覇道的な合気道から、理合いのどっしりとした合気道に変わられておられた事である。そこで先生に、どうして先生は変わられたのですかとお聞きすると、「病気だよ」と一言云われたのである。この言葉がどのような意味だったのかよく分からなかったが、無理をすると病気になるぞ、または、病気をしたから魄力に頼らないようにしたのだという事ではないかと思った。

そして私自身も魄の力に頼らない稽古をしなければならないと思ったのである。そのため先ずやったことは、有川先生の示される技や動作を凝視し、真似をすることであった。そして後で分かってくることになるが、先生は我々稽古人に、魄に頼らないための大事な事を毎時間教えようとされていたということである。稽古の後、先生は私に必ず「今日はどうだった」と聞かれたものである。数年間はこの意味が分からず、今日は暑かったですねとか、稽古人が多かったですねとか、今日の相手は力が強くて思うように技が掛かりませんでした等、先生の質問の趣旨に関係のない答えをしていたわけだが、先生はにやにやしながら、「そうか」とか「そうだな」とか言われておられた。

先生が亡くなられる１，２年前になってようやく先生の「今日はどうだった」の意味が分かった。先生は毎時間、テーマをもって教えられておられたのである。私が初めてそれに気がついたのは、肘を支点とする技づかい、体づかいが本日の先生の稽古テーマであるということ、そしてこれが「今日はどうった」に対する答えだということであった。
その後も先生の稽古はテーマを持って教えておられたが、そのテーマが分かることもあったが、ほとんどは分からず仕舞いだった。分からないのだから、教えて下さればいいのにとも思ったが、これが有川先生の教えであったことが、今、よく分かる。もし、先生がその答えを言っておられたら、我々稽古人は自分で見て、考え、そして身に付けることをしなくなるということだったと思う。先生の愛の教えであった。私などすぐに答えを言っちゃうが、これは相手のためにならず、言うなれば自己満足のためということになるだろう。

途中の話が長くなったが、有川先生のお蔭で魄の稽古から脱却しなければ、上達も

ないし、果ては病気になってしまうだろうと思うようになったわけである。だが、魄の稽古からの脱出は容易ではない。相対での稽古相手の中には、力一杯で攻撃してきたり、受けを力んで頑張ったりする人もいるので、よほど注意しないと自分もそれに負けじと、力をつかったり、力んでしまったりすることになるからである。そうなれば元の木阿弥である。己の心との戦いである。

次に助けになったのは、大先生の教えである。『武産合気』『合気神髄』の教えである。この中には、魄の稽古から魂の稽古への教えが満載されているのである。しかし、魄の稽古をしている間は、この聖典を理解すること、その教えを会得することはできないはずである。
魄の稽古の次元から脱出するために、この教えにはいろいろあるわけだが、特に役立ったと思われるのは、合気道の技は陰陽十字、〇に十、円の動きの巡り合わせ、イクムスビの息づかい、△〇□、気の体当たりと体の体当たり等々であったと思う。

これで魄の力に頼らずに相手を制し、導くことが多少できるようになってきた。例えば、これまでの頑張られた相手が、諸手取呼吸法でも倒れてくれるようになったのである。
しかし、その稽古相手も何度か倒れると、学習して倒れないようになるし、力のある相手が力一杯掛かってくると操作が難しいこともあった。

そこで次の稽古に入って行ったのである。
それは心と念で技と体をつかうという事である。勿論、これも大先生の教えの中にあるものである。
大先生は聖典のなかで”心“に関して、「心は丸く体三面に進んでいかなければならない」、「自己の身をそこなわぬようにして相手を制せねばならぬ、すなわち心で導けば肉体を傷つけずして相手を制することができる。」、
また、“念”に関して、「念で技が無限に発兆するのです」、「この念で正しい稽古を積まなくてはならない。」などと教えられておられるのである。

この“心”と“念”を更に加えて技と体をつかえば、魄力に頼るのがより少なくなるの

で、稽古相手が多少力を入れて掴んで来てもそれを制することは容易になった。
しかしながら、これで十分ではないことが分かってくるのである。理由は、この次元はまだ人間個人の領域の力なのである。
例えば、心や念も人間個人のモノである。何故ならば、“心”とは、己の脳機能によって活動するものであり、“念”とは、その心の中で一定の対象に精神を集中させるものであるからである。

次の次元に進まなければならないということである。
それが“魂”ということになるが、長くなりすぎるので次回とする。

【第728回】 魂は科学されて出てくるもの　＜その２＞

前回は、諸手手取呼吸法で魄の力から脱出するために、有川定輝先生の教えに従ったこと、大先生の教えに従ったこと、最後に、“心“と”念“で技と体をつかうようにしたと書いた。そして“心“と”念“は、まだ人間個人の領域のものなので力弱しであり、更なる偉大な次元に進まなければならない、そしてそれが”魂“であると書いた。

まず何故、魂なのかである。大先生は、「合気は魄を排するのではなく土台として、魂の世界にふりかえるのである。魄の世界を魂の世界にふりかえるのである。魄が下になり、魂が上、表になる」と言われているからである。魄の力を土台にして、その上に魂を出し、その魂で技を生み出さなければならないということである。それまで培ってきた魄の力を魂が制御、誘導するわけであるから、魂の方が魄より強力という事になるわけである。

次に、魂とはどうようなものなのかということである。これを大先生は分かり易く「**気**は**霊**に属し、流・柔・剛は体に属するというわけである。」「形より離れたる自在の気なる魂、魂によって魄を動かす　神p131」
つまり、「**魂**」とは**霊**であり気であるということである。

ではどうすれば魂は出てくるのかというと、大先生は「自己の魂が、身心によって科学されて出てくるものである。（武産合気 P.81）」と言われているのである。身心を天地の息と営みに則り、法則に従ってつかえば魂が出てくると言われているのである。
また、大先生は、「魂は自分自身で創るのであります」とも言われているが、この事だと思う。
確かにこの教えに従って技をつかうと、これまでと質量ともに違った力が出て来るのである。この魂は心や念から出てくるものとは違い、出すのではなく出てくるものである。受けの相手には抵抗心や対抗心を起こさせない、それでいて強力な力をもっていると感じさせるような摩訶不思議なものである。諸手取呼吸法はこの身心を科学されて出てくる魂でやらなければならないだろう。

しかし残念ながら、この魂が最終的なものではない。何故ならば、この魂は自己の魂であるからである。この自己の魂よりも偉大な、魂、自己以外の魂、例えば、宇宙の魂があるはずだからである。自己の魂がある程度会得できてくれば、次に宇宙の魂の次元に入らなければならないと考えている。

【第729回】 心、念と魂

前回の「魂は科学されて出てくるもの＜その２＞」で、魄の技づかいから、息や念で技をつかい、そして更に魂で技をつかうようにしなければならないと書いた。
魄の力での稽古から脱出するためには、先ずは魄の力に変えて、心や念で技を掛ければいい。心や念、又は心と念で技を掛ければ、己の体も相手もより素直に従うものである。また、己の体は心のままに動いてくれるし、相手も反抗心を起こしにくくなるのである。従って、怪我もなくなる。これを大先生は、「自己の身をそこなわぬようにして相手を制せねばならぬ、すなわち心で導けば肉体を傷つけずして相手を制することができる」と言われているのである。相対の形稽古で相手を怪我させてしまうのは魄の力に頼っているからで、相手に怪我をさせないためには、心で技と体をつかわなければならないということである。

心や念で技がつかえるようになったならば、魂が働くようになると前回で書いた。つまり、「魂は身心によって科学されて出てくる」のである。
しかし、魂を出すのは容易ではない。少なくとも、心や念で技がつかえるようになっていなければならないが、これもまた難しい。この為にもやるべきことがあるからである。例えば、イクムスビの息づかいや陰陽十字などの宇宙の法則を身に付けていなければならないのである。
これらを身に付けることは、魄の力に頼った稽古を続けていては難しいと考える。それまでと違った、異質の稽古、大袈裟に言えば真逆の稽古をしなければならないのである。さもないと、魄の稽古から抜け出せないだけでなく、体を壊したり、心を病んだり、そして合気道からの早期引退となるはずである。

ここまでの稽古の段階は、次の様に区分できるだろう。
魄の力に頼った稽古　⇒　心と念が主導権を持つ稽古　⇒　魂が出る稽古
魂が出てくるようになれば、後はその魂で技になるわけだから、先ずは魂が出るようにしなければならないと考える。

ここで心・念と魂の働きの違いを確認してみたいと思う。
心とは、脳機能によって活動するもの、**念とは**、心の中で一定の対象に精神を集中させることであるから、やはり脳機能によって活動するものということになる。つまり、心と念は人為的働きである。
一方魂は、霊であり気であるからエネルギーがあるが、人工的なものではなく、宇宙（自然）の働きである。また、魂は宇宙の営みであるが、魂は己自身でつくらなければならないのである。
また、魂は出てくるものであって出すものではないのである。これも心や念と違うところである。大先生は、「魂は、身心によって科学されて出てくるものである」と言われているのである。

魂が出てくるためには、身心を科学でつかえばいいと言われるのであるが、身心とは、体と心であるから、体と心を科学でつかえばいいわけである。
それでは、ここの科学とは何を意味しているのか。大先生の言われる科学は、宇宙の法則と考える。つまり、身心を宇宙の法則や営みに則ってつかえば魂が出てくる

と言うことである。宇宙の法則・営みとは、陰陽十字であり、天の気、天の呼吸と地の呼吸等である。そして天地や宇宙と身心を繋ぐ阿吽の呼吸も科学されなければならないのである。

魂が出てくるようになると、宇宙の営みに乗ったことになる。合気道ではこれを宇宙との一体化というはずである。己の魂が出て、これが技を産むと、相手は自然で違和感を感じないし、これまでの魄の力とは異質で強力なエネルギーを受けることになり、納得して気持ちよく倒れることになるわけである。これは相手との一体化ということになるだろう。過って大先生の受けを取られた内弟子や先輩方はどなたも、どんなに投げられ抑えられても“非常に気持ちがよかった“と言われていたのは、魂でやられたからということになろう。
しかし、前の章にも書いたように、我々クラスのこの魂はまだ自己の魂であるから、大先生のように、宇宙の魂が出るように更なる錬磨が必要なのである。

過って大先生が居られたころには、武道界やスポーツ界だけではなく、芸能人、文化人、軍人、宗教家などなど多くの人が教えを乞いに来られていたが、大先生は技が上手で強かったばかりではなく、動作や立ち振る舞いが、非の打ちどころなく美しく、それにも魅了されたものだったからと考える。それは、我々の魄、心や念の次元の動作や立ち振る舞いを通り越した、魂の立ち振る舞い、つまり、「身心によって科学されて出てきた魂」を土台にした「宇宙の魂」でのものだったからだと考える。

【第730回】 武技は日月の息と地の息と合わして生む

合気道は技を練って精進していくが、合気道は武道であるからこの技は武技ということになる。中古の覇道的な合気道や魄に頼った合気道では、形を身につけ、力をつけ、魄力で敵を制するのが武技であったといえよう。所謂、己の力による、人間的な技と云えよう。
勿論、このような武技も身に付けるべきだ。体が出来るし、魄力がつく。しかし、重要な事はこの段階で終わりではないということである。この段階を土台にして先

に進まなければならないということである。

進む先は真の合気道である。大先生はこれを武産合気と言われていると考える。そしてまた、この合気道を魂の学びの合気道というのだと思う。魄を土台にし、魂を表に出す武技の合気道である。己だけの力だけではなく、宇宙の力をお借りするのである。
このためにいろいろ試行錯誤しながら修業を続けているわけだが、今回は「天の息と地の息と合わして武技を生む」を研究してみたいと思う。

大先生は、「天の呼吸は日月の息であり、天の息と地の息と合わして武技を生むのです。地の呼吸は潮の満干で、満干は天地の呼吸の交流によって息をするのであります。天の呼吸により地も呼吸するのであります。（『武産合気』Ｐ．７６）」と教えられているので、天の息と地の息と合わして武技を生むようにしたいと思っているわけだが、先ずこの大先生の教えを解釈しなければならないだろう。

- 「天の呼吸は日月の息であり」とは、お日様とお月様の息が天の息であるということ。ここで大事な事は、ここには言われていないが、天の呼吸は吐く息であるということである。つまり、お日様とお月様の息の両方が吐く息であるということである。お日様の息は簡単に吐けて地に落とせるが、お月様の息が一寸難しい。
  お日様の息を吐いて地に落すし、更に息を吐き続けると（お月様の息）、地に落ちた息が跳ね返って上に昇ってくる。これは恰もお月様の息、又はお月様の引力のように感じられるものである。
  お日様とお月様の息の両方は吐く息であり、天の息であるが、お日様の息は地に降り、お月様の息は更に地に降りるとともに、天に昇っていく息と感じられる。
  尚、この吐く息で一方（お日様）の息が地に降り、他方（お月様）の息が地に降り、そして天に昇る息づかいは普段の健康人の歩き方でやっていることであり、本来それほど難しいことではないはずである。息を吐きながら足を踵から地に着き、そしてそのまま息を吐きながら爪先を地に着けて歩いているはずである。高齢者などが上手く歩けないのは、お日様の息だけで歩き、爪先をつか

わず、お月様の息をつかわないで歩いているからだと見ている。

- 「天の息と地の息と合わして武技を生むのです」とは、前項の息を吐く天の息と息を引く地の息のコンビネーションで武技を生まなければならないということで、天の息だけでも地の息だけでも武は生まれないという事である。地の息については次に説明する。
- 「地の呼吸は潮の満干で、満干は天地の呼吸の交流によって息をするのであります」とは、地の呼吸は潮の満干、別名、潮満の玉（赤玉）と潮干の玉（白玉）であること、そしてこの満干は天地の呼吸の交流によって生まれるということである。尚、“地の呼吸は潮の満干”とあるように、まずは満ちて、そして干することになる。

  具体的に云うと、天の息のお日様の息が地に降り、そしてお月様の息が上がる、それに合わせて息を引くと（吸う）、腹中に息と気が満ちる。これが潮の満ちる潮満の玉（赤玉）である。更に息を引き続けると胸中に息と気が満ちる。この息は胸に引いてはいるが、同時に胸から腕、手先・足先に発散していると感じられる。潮満の赤玉に対し、これが潮干の玉（白玉）と感じる。
- 「天の呼吸により地も呼吸するのであります」とは、先ず天の呼吸、つまり、吐く息で息と体と気を地に落すお日様の呼吸と更に地に落ち、そして上に昇ってくるお月様の呼吸の天の呼吸から始めないと、引く息の地の呼吸はできず、武技は生まれないということである。

  先ずは縦の息であり、吐く息であり、水の息である天の呼吸から始めよということなのである。

これらは形稽古でつかってみれば実証できるはずであるし、この教えに違反したり、無視していれば武技は生まれないのである。

【第731回】 魄の稽古からの脱出のために

８０歳の一人前の大人に近づいてくると、後輩や後進のことが気になってくる。８０歳までは半人前の鼻たれ小僧であり、多少の事は鼻たれ小僧に免じて貰っていたが、８０歳になったら大人になろうと誓っているのである。勿論、大人とはどういうものなのかは十分に分かっていないから、これからつくっていかなければなら

ない。

８０歳の大人になったなら、それまでと違った稽古をしたいと思うが、その一つが後輩や後進のためにもなる稽古をしようということである。
これまでは自分のために稽古をすればいいと思ってやってきたわけで、他人のことなどあまり気にかけてこなかった。
これまで半世紀以上稽古をしてきて得た技や知識を伝え、残していくことである。

そこで一番気になっていることから始めたいと思う。それは、長年稽古をし、高段者になった合気道の稽古人のほとんどが、突然、合気道の稽古をやめてしまうことである。まだ、元気で日常生活が出来るし、合気道を続ける元気もあると思われる古い稽古人が、死んでもいないのに道場から消えていくのは寂しいかぎりである。
しかし、この合気道早期引退には原因があるように思える。その原因を明確にし、その原因の問題を解決出来れば早期引退は無くならないまでも大幅に減少し、高齢で高段の稽古人が道場に残り、若い後輩や後進に刺激を与え、そして導いてくれるようになると希望しているところである。そしてこれが後進に残す一番大切なことであると考えている。

まず、何故、高段者で実力がある人が早期引退していくかということである。
それは一言で云えば、魄の稽古から脱することができなかったことであると考える。
合気道の基本の形を覚え、そして大体の相手を投げることができるようになってはいるが、体の大きい相手や体力がある相手を投げたり抑えることができないことが分かり、そして自分の力の限界がわかり、これ以上稽古をやっても駄目だろうと思うのだろう。特に年を取ってくると体力も腕力も無くなってくるので、年配になると早期引退が多くなることになる。

これは合気道の宿命である。つまり、誰もが通る道筋なのである。
これは避けがたい現実であるから仕方がないが、問題はこれを解決する方法を先輩たちが教えてくれなかったことである。こういう問題にぶち当たるから、そうしたらこうすればいいし、こうしなければならないと教えてくれなかったのである。

それでは早期引退はどうしようもないではないかというとそうではない。何故ならば、大先生がその問題と解決法を教えられているのである。それがどのような教えであったかは、私の論文で紹介しているので、詳細は省くが、私の考えをここに簡単にまとめてみることにする。

先ず、皆がやって来た魄の稽古は重要である。これを確信することである。体力や腕力の魄の力はあればあるほどいい。魄の力を卑下すること等ないということである。大先生も「わしは力持ちだった」と自慢されていたものだし、内弟子をスカウトするにも力のある者、体力のある者を選んでおられていたものである。

次に、ある時期からこれまでの魄力に頼る魄の稽古から、魄に頼らない稽古に変えなければならないのである。これは容易ではない。言ってみれば、これまでと異質な稽古、真逆な稽古をすることになるのである。これまでの勢いや腕力をつかわずに、その代りになる別なモノをつかって技をかけるようにするのである。それは、先ずは息であり、宇宙の営みの力（法則）である。

イクムスビの息、イーで吐き、クーで吸い、ムーで吐いて技をつかうのである。更にこのイクムスビの息づかいをするためには、陰陽十字という宇宙の法則に則って技と体をつかわなければならない。
また、このイクムスビの息づかいと陰陽十字をつかうためには、手先と腰腹をしっかり結び、腰腹で手をつかうようにしなければならないのである。
そして、手先と腰腹をしっかり結び、腰腹で手をつかうようにできるためには、肩が貫けていなければならないのである。
容易な事ではないが、これをすればそれまでの魄の力に頼った稽古から抜け出すことが出来き、またそのためには必須であると考える。

何故これが分かったかと言うと、大先生と有川定輝先生のお蔭である。大先生の技づかいのイメージからと大先生の『武産合気』『合気神髄』にもある教えである。有川先生からは魄の稽古からの脱出を稽古時間と稽古の時間外で教えて頂いた。先生は一切ご説明をされなかったから、無言の教えということになるが、今にして思

えば素晴らしい教えであった。残念ながら先生がご健在な内はそれが分からなかった。有川先生の教えが無かったならば、恐らく私も早期引退していたはずなので、先生には心から感謝している次第なのである。

晩年の有川先生の技は魄に頼らないもので、相手をくっつけてしまうモノであったが、技は強烈であり、いつでも相手を殲滅できるぞという迫力があった。道場や講習会などで見ていて、何時も緊張していたが、剛柔、優しさと怖さを兼ね備え、無駄な動きもなく、美しく、力強いものであった。この先生のイメージで、この先生のイメージに近づくべく稽古をしているのである。
イメージは己の技の目標になるはずである。目標がなくて稽古をしても決して上手くならないはずである。いい先生や先輩の技や動きや態勢のイメージを見つけ、それに近づくように稽古をしていけばいいだろう。

ここまでは息と宇宙の法則をつかう稽古であるが、まだ半分魄の稽古である。
勿論、ここでの魄の稽古も大切である。体や力が更に出来、更に魄力がつくからである。間違いなく以前よりも力がついているはずである。
そしてこの魄力が土台になり、その上に魂がくることにするわけである。
ここから魂の学びの稽古、真の合気道の修業に入るわけである。本当の合気道の修業が始まるわけである。ここに来れば合気道の本当の面白さ、素晴らしさが分かり、最早、合気道を止められなくなるはずである。
因みに、大先生がお話になった道話、お書きになった『武産合気』『合気神髄』はこの段階にならないとチンプンカンプンのはずである。換言すると、『武産合気』『合気神髄』が分かるようになれば、魂の学びの稽古の段階、そして見えない世界の幽界に入って稽古をしていることになるわけである。

一人でも多く、魄の稽古から脱出して、早期引退をせずに、最後まで合気道の稽古の修行を続けて欲しいと願っている次第である。

【第732回】 月の呼吸、潮の満干の呼吸

前々回の『第７３０回　武技は日月の息と地の息と合わせて生む』で書いたように、天の息と地の息と合わして武技を生むようにしたいと思って精進している。
この息づかいで技と体をつかうのは容易ではないが、少し分かったことがあるので、忘却の彼方に行ってしまう前に書いて置くことにする。

先ず分かった事は、大先生が言われる「天の呼吸は日月の息であり、天の息と地の息と合わして武技を生むのです。地の呼吸は潮の満干で、満干は天地の呼吸の交流によって息をするのであります。天の呼吸により地も呼吸するのであります。（『武産合気』Ｐ．７６）」でやらなければ技が生まれないということである。
従って、この教えをよくよく理解し、技で試し、身に付けなければならないということである。

もう一つ分かった事は、大先生の素晴らしさ、偉大さの再認識である。武技を生み出す息を、天地の呼吸、つまり天の呼吸の日月の息、地の呼吸の潮の満干との交流でつかわなければならないと言われているわけであるが、この条理を発見され、その条理を我々後進に残されたことである。
そしてこのように天地や宇宙との交流に合気する合気道をつくられたことである。
我々凡人にできる事ではない。

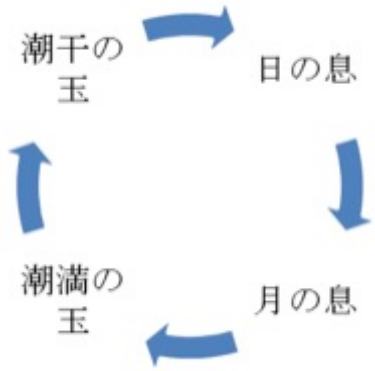
我々凡人は、この大先生の教えの息づかいで技をつかわなければならないわけだが、この教えを理解するのさえ難しいようである。大先生が見つけて下さったものを、見つけ、身につけることは、大先生のこの条理・法則を見つけられたご苦労に比べれば万分の一ほどであろう。それを怠るのは大先生にも申し訳ないから、何とか身に付けるようにしなければならない。

さて、天地の呼吸の教えでこれまで分かったことを書いてみる。
先ず、天の呼吸の日月の息である。
天の呼吸は吐く息であるから、日の息も月の息も吐くことになる。日の息は天から地に吐きながら下ろすから問題はないが、問題は引き続き吐く息の月の息である。
これは難しいが重要なのである。勿論、日の息も重要である。

月の息は、日の息で地に下ろした息を、他方の足の踵から爪先に移すと腹が締まるので、腹が締まったら、息を引き続き吐きながら腹の対照にある腰を緩めると息が入って腹に息と気が満ち、気と力が自然と上がってくる。これが月の息であると感得する。

そこでこの腹から上がってくる息と気に合わせて息を引く（吸う）と、腹が玉のように膨れる。恰も潮が満ちる感じである。これが潮満の玉であると感じる。
この潮満の玉から引く息を更に上げ、胸で息を引き続けると、今度は胸が玉のように膨れる。そして息は引いているのに、胸や手先や体から気と力が発散される。恰も潮が引いていく感じである。潮干の玉である。

もう一つ気がついたことは、右図のように、日の息と月の息、月の息と潮満の玉、潮満の玉と潮干の玉、潮干の玉と日の息が一連で結び、そして陰陽十字で働かないと技が生まれないという事である。



これを大先生は、「息陰陽水火の結びである」、そして「合気道は、地の呼吸と天の呼吸を頂いてこのイキによって、つまり陰陽をこしらえ、陰陽と陰陽とを組んで・・・技を生み出してゆく。」と言われているはずである。

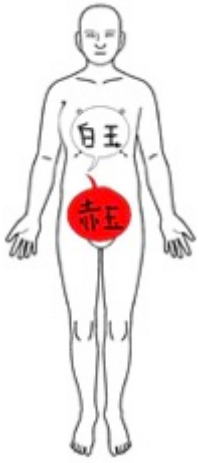
尚、合気道の精進のためには、イメージの力も要るようだ。日の息、月の息、潮満の玉、潮干の玉などのイメージが持てなければ、技に?げることは出来ないからである。
難しいからと言って天地の呼吸を避けて通ることはできない。失敗をし、反省をし、改善しながら身に付けていくほかないない。技をつかいながら、これが日の息か、月の息か、潮満の玉か、潮干の玉か等と感じる事が出来るように稽古を続けることである。
これを感じる事ができるようになれば、合気道の素晴らしさ、奥深さが再認識できるはずである。

【第733回】 赤玉、白玉

前回の「第７３２回月の呼吸、潮の満干の呼吸」に引き続き、今回はこの中の潮満の玉、潮干の玉について研究することにする。

技は天の息と地の息に合わせて生み出さなければならない。天の息は吐く息で、日の息と月の息であり、地の息は引く息で、潮の満干である。
今回の研究対象はこの潮の満干である。潮満の玉、潮干の玉であり、また、赤玉、白玉ともいう。この赤玉、白玉は天の息と違い、玉なのである。つまり、潮が満る玉と潮が干る玉ということである。

そこで地の息を、月の息で吐き切って、足下から上がってくる気と息に合わせて、引く息で腹中を膨らませると腹中は気と息で満ちてくる。これが潮満の玉の赤玉である。
更に息を引き続けると胸に気と息が満ちて球になる。これが潮干の玉の白玉である。
赤玉と白玉を図解してみると次の様な感じになる。



赤玉、白玉がこうであるという証はない。自分が天の呼吸と地の呼吸をつかって技をつかうと、図のように玉を感じるのである。

だが、技として赤玉と白玉に働いてもらうのは容易ではない。やるべきことをやらないと働いてくれないのである。
それではやるべきこととは何かというと、日月の息としっかり合気することであ

る。つまり、天地の呼吸も赤玉、白玉も日月の息により、そしてその合気によって働くということであるから、まずは日の息、そして月の息をしっかりしなさいということである。
これを大先生は、「天地の呼吸は、赤玉も白玉も日月の合気によって、生命を現わすのです。」と言われているのである。



確かに、息を吐いての月の息をしっかりしないと、赤玉は生まれてこないし、白玉も出て来ない。また、白玉が出て来ないと天の呼吸に結びつかないので、いい技も生まれない事になる。これを大先生は、「日月の呼吸と潮の干満の交流で、生命を造るのです。」と言われていると思う。ここでの生命を技とすればいい。

この赤玉と白玉で剣や杖を振ると気持ちがいい。合気の剣、合気の杖を振っているという感じになる。天の呼吸と地の呼吸の息で振っているわけである。お陰で、大先生の剣や杖はこの赤玉、白玉で振られていたことが分かってくる。大先生に
１ｍｍ近づけたことになるだろう。

【第734回】 正勝、吾勝、勝速日について

相対稽古で技を練り合う稽古をしている際、例えば、力まないよう、魄の力に頼らないよう、陰陽十字につかおう等と思いながら技と体をつかっているのだが、時として、相手の気持ちが変わったり、己の気まぐれでそれが忘却の彼方に吹っ飛んでしまい、己の目指したものに反したりしてしまい避けていた技づかい、体づかいになりがちである。
また、稽古仲間や後進の相手と技の稽古をしている際、その後進の相手に、例えば、足は右左陰陽につかわなければならないから、この右足の次は左足が動かなけ

ればならないと言ってやると、上手く出来ることがわかるので、その時はそうやるのだが、段々、以前の自己流になってしまうものである。
このような時にいつも頭に浮かぶ言葉が「正勝、吾勝、勝速日」の「吾勝」である。
つまり、吾に勝てなかったということであり、言うなれば、己の心に負けたということであると考える。

「吾勝」を大先生は、“吾勝はたゆまぬこと”“吾に勝つこと”等と云われているが、これでは分かり難いので、「吾勝」を己の心に勝つこととしている。
例えば、戦おうとする心、手を抜こうとする心、魄に陥ろうとする心に勝つことである。
何故、“吾”が心かというと、自分がそう感じるからであるが、大先生は“心は正勝・吾勝に精進できます。”（神 P.68）とも言われているのである。

それでは「正勝」とはどういうことかということになる。大先生は、「正勝」は“屈せぬこと”“　正（まさ）しく勝つこと”等と云われているわけだが、これは「正勝」を会得した結果論であるので、我々には分かり難い。「正勝」を身に付けるためにはどうすればいいのかが分かれば、「正勝」がより分かり易くなるはずである。
「正勝」の“正“は。宇宙の法則であり、宇宙の営みであると考える。これは真理であるし、神と言ってもいいものである。この”正”に負けないよう、つまり、宇宙の法則・営みに則ることが「正勝」と考える。この真理は広大無辺で終わりがないわけだから、この追及にも終わりがない。それ故、「正勝」は“屈せぬこと”であり、正（まさ）しく勝つこと”ことになるわけである。

さて、最後の「勝速日」である。大先生は、「勝速日」は「勝利栄光。電光石火や電撃よりなお速いんです。」「一瞬の機のうちに速やかに勝ち」等と言われている。
しかし、これもこれではよく分からない。その分からない理由の一つに、“正勝”、“吾勝”の“勝”が単語の後にあるのに対し、“勝速日”は“勝”が頭にあることである。前二者とは何かが本質的に違うということである。
“勝速日”の“勝”は、“正（まさ）しく勝つ“や”吾に勝つ“の”勝”とは違う意味を持って

おり、そして“勝速日”そのものの意味も違うと考える。

“勝速日”の“勝”は、“まさる”とか“すぐれている”“すばらしい”という意味になると思う。例えば、勝景、名勝等の勝である。
尚、“勝速日”の“速”は、大先生が言われるところの“時間を超越した速さ”“電光石火や電撃よりなお速い”ということである。
そして、“勝速日”の“日”は、“霊であり命である”といわれるから、“霊”とし、体に対するものとしたい。
これらから、“勝速日”は文字的に、“すぐれている時間を超越した速さの霊“とすればいいと思う。

もう一つの分かり難さがある。それは、正勝、吾勝、勝速日を並列に並べていることであるが、先ほどの“勝”の位置が違うことからも分かるように、正勝、吾勝、勝速日は並列的な意味ではないということである。
結論から云えば、“正勝、吾勝”を身につけることによって、“勝速日”という結果になるということである。Ａ＋Ｂ＝Ｃである。これを大先生は、「時間を超越した速さを、正勝、吾勝、勝速日という」と時間を超越した速さである「勝速日」に「正勝、吾勝」を加えられて言われていることからも分かる。

最後に、何故、正勝、吾勝、勝速日が大事なのかということになる。それは、合気道の修業の目標は、宇宙との一体化にあるわけだが、その為には正勝、吾勝、勝速日が必須であると、次の様に教えておられるからである。
「正勝、吾勝、勝速日とは、宇宙の永遠の生命と同化することにある」（合気神髄P.34）。
また、大先生は、「戦わずしてすでに勝つところにこそ、合気道の要諦とするところの正勝、吾勝、勝速日の大いなる価値があるのです」（合気神髄P.159）と言われ、正勝、吾勝、勝速日は合気道の要諦であると教えておられるからである。

【第735回】 魂の技　心と魂

合気道は魂の学びであるといわれる。それでは魂をどのように学んでいけばいいのかということになる。これを教えて下さる先生や先輩は、最早おられないようなので、自分で見つけていく他ない。
自分で見つけるとは、合気の道に則って、これまで身に付けたモノを基に試行錯誤しながら、それを探究し、会得していくということだろう。

まず、合気道は技を錬磨することに精進することが一つの鉄則であり、理合いであるから、魂も技を通して会得できると考える。
また、魂に関してはこれまでの稽古でも顔を頻繁に出しているので、それを土台にして進めていけばいいと考えている。例えば、これまで“魂魄”を“心と体”としていたことから、魂は心、魄は体としてきた。
そして技を体（魄）で掛けるのだが、その後、段々と体で技を掛けるのには限界を感じるようになるわけである。相手との体と己の体がぶつかり、相手が倒れなくなったり、争いとなってしまうのである。
そこで体ではなく、心で技をつかうようになる。これを大先生は「すなわち心で導けば肉体を傷つけずして相手を制することができる。」と言われているのである。

しかしながら、心で技をつかえば大分上手くいくようになるのだが、この心の技にも限界があり、完ぺきではないのが分かってくるのである。
心で技をつかっても、その技はまだ人間の領域にある、人工的な技だからである。
何故ならば、心は脳機能によって活動するからである。脳は好き嫌い、恐怖や安心、友情や敵対心などを心に働きかれるわけだから、緊張したり、用心したりすれば、心は安定しないし、宇宙の法則に合したものにならないのである。

そこで心の技の次の技が必要になるわけである。そして体の技、心の技で、またこれらを基にして出現してくるのが魂の技である。
魂の技を生み出すために、まず、心と魂の違い、そして関係を見なければならないだろう。
まず最初に「魂」を辞書で調べてみる。
尚、「魂」は“たましい”と読んだ方が分かり易いと思うので“たましい”とする。“こころ“と”たましい“となり、”しん“と”こん“ではない。

“たましい”とは、「人の肉体に宿り、生命を保ち、心の働きをつかさどると考えられるもの。肉体から離れても存在し、死後も不滅で祖霊を経て神霊になるとされている。霊魂。また、自然界の万物にやどり、霊的な働きをすると考えられているものを含めていう場合もある」（『大辞林』）とある。
ここで大事な事は、「たましいは、心の働きをつかさどる」という事である。
肉体を動かし、技を生むのは心とたましいがあり、心を動かすのはたましいであるということである。

魂（たましい）が心に働きかけるということはよく分かる。例えば、自分の心で思ったことをもう一つの何モノかが、それはいいとか駄目だとか、こうやった方がいい等と言っていることである。これをこれまで“真の心”といい、そしてこの“真の心”が魂であろうと言ってきた。心よりもたましいの力の方が強力であるということでもある。それは、技を掛けるにも、頭（心）で考えてやっては中々効かないが、相手を意識せず、相手を倒そう極めようなどを忘れ、理合いで体と息をつかえばいい技になるが、これがたましいの力だろう。
歌舞伎の女形の名優中村歌右衛門は、「頭で計算している芸は駄目。ふっと出るのがいい」と言っている。
これがまさしく、心にたましいが働きかけることであり、そしてこれは心を無にするということだろう。
たましいが心に働くと、心は無になり、心は閉ざされ、たましいが入り、たましいで動くことになるということである。

上記から、心と魂（たましい）の関係は、心は脳の働きであり、意識であること。魂は脳とは関係ない無意識といえるだろう。つまり、心と魂の関係は、意識と無意識の関係という事でもある。

今回は魂（たましい）と心について書いたが、今回のテーマ「魂の技」は紙面の関係上、次回とすることにする。

【第736回】 魂の技を生む

前回に続き、「魂の技」がテーマであるが、重点は魂の技を生み出すにはどうすればいいのかを研究してみることである。

最近、これが魂の技ではないかと思える技が一寸出るようになったような気がする。片手取り呼吸法で、相手を自由自在に制し、導き、そして相手が自ら気持ちよく倒れるような技づかいである。
これが出来るようになったのは、大先生の次の教えであった。
「魂が魄の上になり、魄が土台になって魂で導く」である。しっかりした手を相手に掴ませ、その接点を土台にしてそこは動かさずに、魂（たましい）で己の体と相手を動かし、導くのである。
はじめは「魂」ではなく「心」でやっていたが、魂（たましい）でやるようにしている。
魂（たましい）で技をつかうためには、宇宙の条理に則って、体と心をつかわなければならない。体と心が宇宙の営みに合すれば魂の技が生まれるのである。これを大先生は、「自己の魂が、身心によって科学されて出てくるものである。（武産合気 P.81）」と言われているのである。因みに“科学されて”とは、宇宙の法則に則るということだろう。

魂の技になったようではあるが、まだまだ十分な力ではなく、強大な腕力の相手を制する自信はない。まだ、魂の力が弱いということだろう。魂の力が弱いという事は、この魂の次元が低いということである。
上記の大先生の教えの中に“自己の魂”とあるように、魂にはいろいろある。大先生がつかわれている魂には、どのようなものがあるかを『武産合気』『合気神髄』から抜き出してみると、
＊己の魂、自己の魂、自分の魂
＊五体の魂
＊円の魂
＊大和の魂
＊全大地球の魂（イザナミの大神）
＊宇宙の魂、宇宙組織の魂、宇宙の内外の魂
等がある。これから、魂には己の魂から宇宙の魂まで、低次元の魂から高次元の魂

があることがわかる。自己の魂から、宇宙の魂へ進展していかなければならないということである。大先生は、「魂は自分自身で創るのであります」と言われるのはこのことを指しておられると思う。

大先生は、どうすれば技を生み出すことができるかを教えておられる。そして魂の技を生み出すにはどうするかも教えておられる。３０前後の教えがあるようだが、その内自分が挑戦している幾つかを記す。

- 「円を五体の魂におさめると、**技を生み出す**仕組みの要素を生じます。」
- 「天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて**技を生み出す**。」
- 「天の呼吸は日月の息であり、天の息と地の息と合わして**武技を生む**のです」
- 「技は五体のひびきと宇宙のひびきと気結び、緒結びし、千変万化するのであるけれど、我々は五体のひびきから光と熱と力を生じさせるような稽古をし、宇宙のひびきの中の空に**技を生み出し**ていかなくてはいけない。」
- 「合気道は、地の呼吸と天の呼吸を頂いてこのイキによって、つまり陰陽をこしらえ、陰陽と陰陽とを組んで・・・**技を生み出し**てゆく。
- 「武を修する者は、万有万神の真象を武に還元さすことが必要である。たとえば谷川の渓流を見て、千変万化の体の変化を悟るとか、また世界の動向、書物をみて無量、無限の技を生み出すことを考えるとかしなければいけない」
- 「宇宙世界の一元の本と、人の一元の本を知り、同根の意義を究めて、宇宙の中心と正勝、吾勝、勝速日を誤またず、武産の武の阿吽の呼吸の理念力で**魂の技**を生み出す」
- 「武産の武の阿吽の呼吸の理念力で**魂の技を生み出す**道を歩まなくてはならない。」等

尚、この大先生の教えの技は“魂の技”であり、“武の技”の”武技“であるはずである。

技、魂の技は頭で考え、計算してつくり出すものではなく、自然に出てくるもので、生み出るものなのである。体や心の技までででは技は生み出ない、魂（たましい）が心に働きかけ、たましいで技をつかうようにならなければならない。

この教えに従って、技の錬磨を続けて行けば、魂の技がつかえるようになるし、魂

の次元が宇宙に達すれば摩訶不思議な力が出るのではないかと希望している処である。

【第737回】 使命は万有万物にある

合気道を半世紀以上稽古してきて、「合気道は人に勝つためではなく、争いに勝ためでもなく、戦わずして勝つためでもない。自己の使命に与えられたる宇宙の使命に打ち勝つことである。」ということが分かってきた。
また、合気道は「よく自分を知るということが自分に課せられた天の使命であります」、そして「その人その人の天授の使命を完うさせていくのが、合気道である」と教えている。つまり、合気道は自分自身の使命を知る事であり追求することであると同時に、他人がその使命を全うできるように、支援したり、邪魔になる汚れけがれを浄め祓いてあげるということなのである。

合気道では、全大宇宙の無限の発展完成がなされるため、宇宙楽園が建設されるために、「魄をもったことは天からの使命を持たされたことなのです。
魄を育てあげるだけの能力を持たされているのです。」とあるように、形があるものすべてに天から使命を持たされているのである。
使命にはいろいろあるわけである。大先生の『合気神髄』の中には、ちょっと拾い上げただけでも、「各自の使命、天授の使命、合気の使命、自己の使命、宇宙の使命、気の使命、自分自身の使命」のような”使命”が見られる。

使命には個々の使命と万有万物共通の使命があるようだ。
＜個々の使命＞

- 人間個人の使命：個人に課せられた使命。例えば、以前紹介したように、画家の東山魁夷画伯や民藝運動家の柳宗悦らが自ら、この仕事は天から与えられた使命であると言っている。勿論、合気道をつくられた植芝盛平先生も、合気道をつくり、普及させるのは天から与えられた使命、天命であると言われておられる。
- 万有万物の使命：草木禽獣魚虫類が各々使命を持っている。良く見てみると、

確かに草でも木でも動物でも虫でも、何かに向かって懸命に頑張って生きているように見える。例えば、フンコロガシは、糞を転がして地上を綺麗にしているように、虫たちや小動物たちは地上の汚物を綺麗に片づけている。

- 形成されたモノの使命：自然に形成したモノも人工的につくられたモノにも使命はある。自然に形成されたモノを上記の例で挙げれば、天授の使命、合気の使命、宇宙の使命、気の使命である。全大宇宙の無限の発展完成のために、各々使命があるということであり、役割があるということである。
  人工的につくられたモノとしては、社会、国家、業界、職業、お店、会社、お茶・お能等の芸能界、武道界、合気道などがある。合気道に使命があるように、これらのそれぞれにも個々の使命があることになる。

＜万有万物共通の使命＞

- 人間の共通の使命は「自分を知る事」である。草木禽獣魚虫類にそれを確認したわけではないが、見ていると彼らはみんな「自分を知っている」ように思える。また、人工的につくられたモノである社会、国家、業界、職業、お店、会社、お茶・お能等の芸能界、武道界、合気道なども「自分を知る事」が大事であるだろう。自分を知らなければ、誤った方向に向かったり、悪い道に進んだり、全大宇宙の無限の発展完成を妨げたり、破壊することになる。
  ということは、「自分を知る事」は万有万物共通の使命と云っていいだろう。
- 子孫を残し、より繁栄させることである。人間は無論の事、生きているモノすべては、子孫を残そうと生きている。小鳥の囀り合うのも、草花が美しく咲くのも、鮭が命懸けで産まれた地に戻ってくるのも、この子孫を残す万有万物共通の使命である。

因みに、万有万物には、今、はやっている新型コロナウィルスも入る。彼らも子孫を残すべく懸命なのである。人間の体に取りつき、人に気づかれ難く増殖していくが、余り増殖して人間が消滅しないように適当に感染し増殖しているという。また、ある薬で一斉に絶滅しないように、新型コロナウィルスはすべてが同じではなく、何かが多少違うというのである。ある薬で大半が消滅しても、幾つかが生き残るわけである。子孫を残そうとする使命からである。

この事から考えれば、人もそれぞれ違っていいし、違わなければならないと思う。特に、現代人は快適な生活をしているので、何か壊滅的な大災害が起こったり、また、氷河期が到来すれば人類は絶滅することになると思う。そこで思うのは、例えば、真冬でも外で寝ているホームレスの人たちである。我々ひ弱な者は、駄目でも、もしかすると彼らが生き残ってくれるのではないかと思っている。少なくとも最後まで生き残るのは恐らく彼らだと思う。
人類の子孫を残す使命のために、もっとホームレスの方に敬意を持ってもいいだろう。

【第738回】 近代スピリチュアリズムと合気道の霊魂

「高齢者のための合気道　第７３８回　『浅野和三郎の霊魂観』」で、お医者さんである矢作直樹氏先生の『人は死なない』を面白く読ませてもらい、また、大変参考になったと書いた。そしてどこがどのように面白く、参考になったのかを書く約束をしたが、同じ第７３８回ではあるが、予告した通りにここに書くことにした。書く内容が「合気道の思想と技」になると思うので、「高齢者」ではなく、「思想」の項にしたわけである。まことに紛らわしいと思うがご容赦願いたい。

さて、この本を読んでみようと思ったきっかけであるが、この本のタイトル『人は死なない』を医者である科学者が書いたことである。そして読んでいくうちに、このタイトルにある『人は死なない』という意味が分かってくる。まず、これが面白かった事であり、動機である。後は、合気道の思想と技に関係づけ、比較してみると参考になり、それも面白い。
それでは『人は死なない』と合気道の関係や比較を書いてみたいと思う。そのために、矢作直樹先生の『人は死なない』のその箇所を要約・抜粋・引用し（この箇所の全文は、「高齢者のための合気道　第７３８回　『浅野和三郎の霊魂観』」にあります）、そこに合気道との類似や違いなどを書くことにする。『人は死なない』合気道

1. 霊体は、霊・心・体ともいい、これは心身（体と脳機能によって活動する心）とそれを司る霊の統一表現です。
2. 生死に関わらず肉体から離れても存続する存在を仮に「真体」と呼びます（真

体は、肉体とまったく同じサイズ、スタイル、個性を持っているが電磁波のように肉眼では見えないとされる）。

そして、肉体をまとっている（生きている）真体を「魂」、肉体を脱ぎ去った（他界した）真体を「霊」と呼びます。

3. 人間はコンピュータを内蔵した着ぐるみを着たようなものであり、電源を持った魂がコード」と呼ばれ、（日本では古来「玉の緒」と呼ばれている）その着ぐるみと繋がり、スイッチを入れた状態になっている。
4. 魂はコードを介して電気を流し、着ぐるみおよびコンピュータを操作したりメンテナンスをしていることになる。
5. 記憶は肉体の脳だけでなく魂にもカーボンコピーのようにまったく同じように共有される。
6. 魂自体は他の魂や霊と交感することができ、互いの姿が見え、声が聞こえ、自由に空間を移動することができるが、着ぐるみ（肉体）をまとうとそれらの能力は封じられる。また、着ぐるみは、それだけでは動かない。電源を入れて動かすのは魂である。

1. 合気道では、「人間は霊ばかりでは駄目で、肉体がなければ働けません。肉体と霊が両々相まって働く時、真実の働きが出るのであります。肉体は生成化育のものを生み出す地場で、霊は肉体を育てあげねばなりません。体はまた精神（心）に従って、すべて精神によって動き、精神にまかせてゆかねばなりません。精神を守るだけの肉体となってはじめて道が成立するのです。（（武産合気 P47）」と、霊体心を云っている。
2. 合気道は肉体を気が覆っている。これを開祖は、「気は自分の衣服であると感得する。自然に空気に自分の身が接触して、天地自然の衣服を与えられている理を感じられる。（武産合気　P．96）」と言われている。

また、気は魂であると、「形より離れたる自在の気なる魂、魂によって魄を動かすと言われる。（「合気神髄p131」）つまり、魂は肉体の衣服である。因みに、気は幽の体、魂は幽の幽ということだろう。

また、ものの霊を魄という、霊とは即ち「魂」のことというように、霊は魄でもあり魂でもあるようである。また、一霊四魂三元八力のように霊が魂を統括する働きもある。

つまり、合気道では、一霊四魂、宇宙の霊、一番のもとの親様大元霊、造り主の分け御霊（魂）とか物の霊（魄）等大小さまざまな霊と霊の働きがある。

3. この「着ぐるみ」が、合気道における「気（魂）の衣服」ということになろう。

   この電源を持った魂のコード」を「玉の緒」とも呼んでいるが、合気道でも「玉の緒」、「魂の緒」、「霊の緒」と読んでいる。魂を表に出すことである。自己の魂の緒の動きは悉く宇宙にひびきつらぬく。故に玉の緒が働かくなった時、宇宙との結びが切れ死ということになる。
4. 魂は魄（肉体）の表になり、心に働きかけ、体をつかい、技をつかったり、修正したりする。「電気を流し」とは、魂の霊れぶりと云うことであろう。
5. 合気道にはこのコピーに当たる直接的教えはないが、次のような教えにあるように思う。「魄の世界を魂の世界にふりかえるのである。魄が下になり、魂が上、表になる。」「形より離れたる自在の気なる魂、魂によって魄を動かす」
6. 合気道があるレベルまで達すると、そのような能力が授かる。大先生などはその代表である。人間だけではなく、動植物や神様とも対話が出来たし、鉄砲の弾も見えたし、瞬間移動もされたと聞く。

   魄の稽古をしている内は、それは出来ない。魂の修行にはいるのである。魂の修行こそが合気道の真の学びなのである。魂の学びが大事なのである。

合気道でも、心体、身体、魂魄、霊魂、玉の緒、顕幽神界などなど難解な言葉がつかわれている。合気道の場合は、頭で分かっただけでは本当に理解したことにはならない。本当に分かったという事は、技で示せる事である。これが学問や宗教の世界とは異なるところである。それ故、難しいのである。

参考文献　『人は死なない』（矢作直樹著　バジリコ社）

【第739回】 三つの鍛練で真理の力

合気道は技を錬磨して精進していくが、技がどれだけレベルアップしたかは、その技からどのような力がどれだけ出るかということではないかとも考える。
“どのような力”というのは力の質であり、“どれだけの力“とは強弱、大小など量的な

力である。
技から出る力で相手を倒したり抑えたりするわけだが、その力を自分自身は勿論、相手もこれはいいとか悪いとか感じる。そして自分も相手もいいと感じるような力をつかいたいと思うものである。例えば、十分に威力があるが、無理なく倒されたり極められるが違和感がなく、反抗心が無くなるような快適な力である。
そのような力を大先生は「真理の力」とも言われているようである。そして、その「真理の力」は、次の三つの鍛練を実行することによって得られると言われている。

1. **己の心を宇宙万有の活動と調和させる鍛錬**
   宇宙万有の活動とは、大宇宙から万有万物の活動ということである。大宇宙や天地の生成化育、日月星辰の活動、雨風、台風、海川山、動植物、鳥虫等などのすべての活動である。
   これらの活動に、己の心を調和させる稽古をすることである。
   心は脳をつかうので、まずはそれらの宇宙万有の一つ二つの活動を心に描き、そしてそれと調和一体化することを意識して稽古することである。初めはイメージで、そして相対稽古での技を、宇宙万有の活動と調和するよう心で掛けていくのである。
   心は自由で無辺であるから広大な宇宙の活動でも、日月の息でも、鳥虫の活動とも調和することはできるはずである。
2. **己の肉体そのものを宇宙万有の活動と調和させる鍛錬**
   次は自分の肉体を上述の宇宙万有の活動と同じように動けるように鍛えるのである。最も基本的な宇宙万有の活動は陰陽十字であるから、自分の肉体は陰陽十字に動けるように鍛えなければならない。更に、宇宙万有の活動には、一霊四魂三元八力の三元の活動があるので、肉体を剛柔流に鍛えなければならない。さもないと宇宙万有の活動と調和できないということである。
   勿論、上述の万有万物、例えば、海、小川、動植物などの動きや活動を学んでいくことも大事である。
3. **心と肉体とを一つに結ぶ気を、宇宙万有の活動と調和させる鍛錬**
   心で思ったことやイメージしたことを肉体は中々正確にはやってくれないものである。それは稽古で技をつかってみればわかるはずである。心と肉体がしっ

かりつながっていないのである。心と肉体をがっちり繋がるようにするのが“気“であるが、この”気”が初めは難しくて上手くつかえないはずである。それ故、“気”を横に於いて置いて、“息“で心と肉体を繋げばいい。息で体と技をつかうということである。イクムスビ、そして阿吽の呼吸で心と肉体を一つに結び、宇宙万有の活動と調和させるわけである。

この息でやっていると、息と関係なく、心と肉体は結んだまま、宇宙万有の活動と調和したような動きと技になってくるのである。息が“気“に変わっているのである。ということは、心と肉体とを気で一つに結んだことになり、気が宇宙万有の活動と調和させたことになるだろう。

そしてこの三つの稽古を続けていると、これまでとは違う力が出てくることは確かである。相手をくっつけてしまい導く、軽いが重い、自由自在の嫌味の無い力である。これが魄の力とは違う「真理の力」であろうと思う。

参考文献　『合気神髄「心と肉体と気の三つを宇宙万有活動と調和」』

【第740回】 顕幽神界・過現未と繋がるのはひびき

「第１４５回　ひびきと波動」で、「自然界は波動に支配されている」（Newton 2009/01）と書いたように、自然界、つまり宇宙はひびきで響き渡っているということである。波動とは、合気道でいうひびきであり、自然界は宇宙である。合気道では、大は宇宙組織のタマのひびき、宇宙組織のひびきから、小は自分のひびき、己の心のひびき、五体のひびきなどの他、動物や植物や鉱物の万有万物のひびきが響き渡っていると教えている。

先述のひびきは、今あるモノ、つまり顕界のモノのひびきであるが、目に見えない幽界のモノのひびきもあるはずである。例えば、今やこの世にいない人や動植物などのひびきである。恐らくこの世の顕界に響かせていたひびきを幽界でも響かせ続けているはずである。

何故そのように思うかと云うと、何人かの方々は、死者や死んだ動植物と対話をするというし、イタコさんたちは死者と対話ができるというからである。

対話ができるということは、死者たちのひびき（波動）を受信できるということである。一般の人たちはその波動の受信範囲にないので、感知できないという事だと思う。万有万物のひびき（波動）は違っているし、その受信範囲も各々限られているということである。
もし、人のひびき（波動）の受信範囲が拡大すれば、鳥や動物の声の他、花や木の気持ちも分かるし、対話が出来るはずである。中には動植物の心が読める人もいるが、それはひびきの受信範囲が通常より広いということだろう。

合気道では、宇宙には顕界と幽界のひびきの他に神界のひびきがあるという。お先生は、「ひびきと神体と声は実在する」（武産合気 P98）と云われている。大先生は神との交信・交流をされていたわけだが、ひびきによる交信・交流だったはずである。勿論、ひびきによって、声だけでなく、姿もご覧になっていたはずである。

顕界幽界神界の目に見える世界も見えない世界も、遠く離れているわけではなく一つであると云われる。神様、仏さまが見ているといわれるのはこの為だと気づかされる。あるのだが見えない、聞こえないのはそのひびきを捉える事ができないからであり、そのひびきを捉える事ができれば、それを感得できるし、交流も出来るのだろう。
また、大先生は過去も未来も今現在にあると、過去現在未来は一つであるとも言われていたが、ひびきで考えればみんな一つになる。

ひびき（波長）には感得できるものと出来ないモノがある。それは人により、生き物により、モノにより違う。しかし、人も万有万物が共通して一番感得しやするひびきは“愛”のひびきだろう。“愛”は常に、何処でも、誰にでも響き渡り、そして喜びと幸せを与えるためであろう。

合気道の修業の目標は、宇宙との一体化である。そのために、これまでは宇宙の法則に合した体づかいをし、宇宙の営みに則った技を身につけて宇宙に近づこうとしてきたが、これからは更に、己の心体のひびきを宇宙のひびきに結ぶ修業には入ることになるだろう。
尚、宇宙のひびきとは魂である。合気道は魂の学びであるから、宇宙のひびきの学

びが合気道になるわけである。
宇宙のひびきと同調できれば、宇宙の心・気持ちがわかることになり、これまで見えなかった事が見えるようになるだろうと期待している次第である。

今回の結論は、顕幽界と過去現在未来と繋がるのはひびきであろうということである。

【第741回】 天の気に結ぶ

「第７３０回　武技は日月の息と地の息と合わして生む」でも書いたように、技は天の息と地の息を合わせて生み出さなければならない。天の息とは日月の吐く息であり、地の息は潮の満干の引く息である。腕力や体力の魄の力に頼らない力をつかうためにはこの息づかいで体と技をつかわなければならないのである。
天から息を吐きながら地に落し、そして今度は息を息引きながら相手を導くのである。それまでにない威力と相手を同調させる不思議な力が出てくる。

しかし、ある程度この天地の呼吸で技をつかっていると、まだ不完全で何かが欠けていることに気がつくのである。それは天の呼吸を始める“前“が無いことであり、”前“が欠けているということである。只、天から息を吐いて地に息や力（体重）や気を下ろしているので、何か空回りしているようなのである。

そこで天の息で息を吐く“前”に、己を天に結びつけるのである。天と一体になったところで、息を吐きながら天の息をするのである。天と一体となって天の呼吸をしているという雄大な感覚を持つようになるのである。これに比べると、その前の天の呼吸はこせこせした人間の動きであったように思える。

天の息で、息を吐く“前”に、己を天に結びつけることは正しいし、必須である事が分かった。何故ならば、大先生は、「**天の気**によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す」と云われていたのである。己を天に結びつけるのは、己と天との気結びということになり、天の気と結ぶ事によって、天の呼吸、そして地の呼吸が

できるようになるということなのである。

それで天と己を気結びするにはどうすればいいかということになる。ただ思っただけでも、力んでも己の気は天と結ばない。
私がやった方法は簡単である。一度、腹をちょっと締めて緩めればいい。腹を締めて緩めると気が外に向かって発散するから、上に向かう気を頭から天に出すのである。己の気が天と結び、そして己の頭が天と一体化すると感得するのである。そして頭は軽くなり、自由となる。これを大先生のご友人だった白光会の五井昌久先生は、「天とは人間の奥深い内部であり、神我（天の私、真の私、自由自在な心、慈愛、大調和）とは内奥の無我の光そのもの」（武産合気　P.12）と云われたのだと思う。

天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出さなければならないが、天の気は天と己を結び、そして天と一体化させてくれる働きがあるようである。
天の気の錬磨をしなければならないだろう。

【第742回】 タカアマハラになる

合気道の修業の目標は宇宙との一体化である。そのためにこれまで、宇宙の営みを形にした技を身につけ磨いてきた。宇宙の法則に合した技を身につけることによって宇宙を取り入れ、宇宙化してきたわけである。
また宇宙と一体化すべく、天地の気と天地の息に合わせて技をつかってきた。天地の気と息に合わせて、息や体がつかえれば、宇宙に近づけることになると思うからである。

更に、今度はタカアマハラになることによって、宇宙と一体化を図ろうと思う。
タカアマハラとは、全大宇宙のことであるから、タカアマハラになることは大宇宙になるということである。が、そんなことが可能なのかということになろう。しかし大先生は、「タカアマハラも自分にあるのであります。天や地をさがしてもタカアマハラはありません。それが自己のうちにあることを悟ることであります。（武産

合気P.47)」と云われているのである。ただ、タカアマハラが自己のうちにあることを悟らなければならないのである。

タカアマハラは「造化器官で、すべてのものを生み出す家なのです」とある。万有を生み現わすということは、技も生みだすということにもなるわけである。つまり、タカアマハラになれば、技を生み出すことができるし、技を生み出すためにはタカアマハラにならなければならないという事である。

タカアマハラは六言霊と云われる。つまり、六つの“ことだま”（＝ひびき）であり、次のような働きと力があるという。 タ対照力カ掛け貫く力ア神霊顕彰、而して宇宙也マ全く張りつめたる玉ハ神霊活気臨々、至大照々ラ循環運行これを相対で相手に技を掛ける際にどのように作用するか見てみる。
タで相手と結び、そこに相手との対照力が働く。
カで対照にある相手に気を貫く。所謂気の体当たりである。
アで“神霊顕障宇宙全くはりつめる”と気をはりつめる。
マで“全く張りつめて玉となる”とあるように、己が張りつめた玉になる。
ハで気が活気臨々、至大照々と活動する。
ラで気が運行循環、循環運動する。相手を投げたり抑えたりする。
タカアマハラの言霊のタからラまでを技につかって行けばいい。要は、技にも人にも、このタカアマハラの六言霊がなければならないということである。この六言霊の言霊はひびきであり、これを魂のひれぶりと考える。

そしてまた、タカアマハラを一言霊ずつつかうのではなく、一つにまとめてつかうのである。つかり、ラにタカアマハの六声がふくまれると生きた動きになり、螺旋となり、めぐりめぐり際限なくひろがり、技を生み出すことができるようになるというのである。それを、大先生は、「タカアマハラのラの一声が六声をすべてふくめて生命の動きとなり、らせん状態となり、めぐりめぐり際限なくひろがり、整頓し、その中に器官が出来たのです。すべてのものを生み出す営みの現れが出来たのです。」(武産合気P.64)と言われておられるのである。ラにタカアマハラを含め、そのラで技と体をつかうのである。

【第743回】 気を感じ、つかう

これまで“気”を長年に亘って研究してきた。しかし、その結果は惨憺たるものであるといえる。気の定義とか気とはこんなものであるといわれる説明は、大先生の教えを引用すればいいのだが、実際にはよく分からないのである。
そこで気の研究法を変えなければ、”気“は分からないということが分かってきた。”気“はこのようなものであるとか、定義するなど頭で分かるのではなく、体で分かる、つまり、体で感じ、体でつかうように出来るようにするのである。何はともあれ、取りあえずこれでやる事にする。
お蔭様で、ほんの少しではあるが“気”について分かってきたことがある。

まず、技をつかう際に心と体を結んでつかわなければならないが、先ずはこの異質の心と体は息で結ぶ事ができるし、そうしなければならないと書いてきた。これを基に、今度は息の代わりに心と体を気で結んで技にするのである。そして慣れてくると、それまでつかっていた息が“気“に変わっている事がわかるはずである。息には限界や制限があるが、気は自由で限界がないようだ。気は長く吐いたり吸ったりすることに限界がないし、剛柔流自由自在につかえる。

息が気に代わってくると、今度は気が息を微妙に変化させることになるのである。つまり、気で息をつかうということである。これを大先生は、「気の妙用は、呼吸を微妙に変化さす生親（いくおや）である。気の妙用によって、身心を統一して、合気道を行じると、呼吸の微妙な変化は、これによって得られ、業が自由自在にでる」と云われているのだと思う。
気で息が自由につかえるようになると、技も変わってくる。自由自在の技になるのである。

次に、己の体に気を満たすことによって気を感じることである。まず、息を吐いて腹を締め、そして腹を緩めると体中に気が入って、体が気で満たされる。何故これで気が出てくるのかと云うと、吐く息の水と引く息の火の働きである。大先生が言われる「火と水の交流によって、気というものができる。人が呼吸しているのも、火と水の交流による。」である。

更にこの気は天と地と結ぶ。天に昇った気と天の気が結ぶのを感じるのである。この己の気と天の気を結び、天の呼吸（日の息と月の息）で地に落し、そして地の呼吸に合わせて技を生み出すのである。これを大先生は、「天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す」と云われているということが分かるのである。

“気”はまだまだ研究しなければならない事があることは分かっているが、取り敢えずできる事から始めるしかない。これが新たな“気”の研究のスタートである。ただ、このようにこれまでの理論ではなく、実感を重視し、それに理論づけした研究法を取っていく事にする。これからどんなことが分かってくるのか楽しみな所である。

【第744回】 四つの宝の中の潮の干満

天の気に合わせて天の呼吸、そして地の呼吸により技をつかうべく修練しているが、これによって技がそれ以前より大分効くようになってきた。
しかしながらまだまだ技は不完全である。
そこで再度大先生の教えを調べてみると、「日月の気と天の呼吸と地の呼吸、潮の干満とこの四つの宝を理解せねばだめなのです。」という教えが目についた。これまでは、「天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す。」という教えに則って技をつかっていたのだが、この教えと多少違っているのである。

その違いは、先ずこれまでの“天の気”に対して、“日月の気“とあることである。”天の気”には日の気と月の気があり、この日の気と月の気の両方の気によって、天の呼吸と地の呼吸をつかわなければならないということなのである。天の気と天の呼吸・地の呼吸を合わせて技と体をつかってはいたが、日の気と月の気を意識して分けてつかわなければならないことになる。
天の呼吸は吐く息で、日の呼吸と月の呼吸があり、地の呼吸は引く息で、潮の満干があるように、天の気も日と月の一対であるということだと考える。

これから日の気と月の気を研究してみたいと思う。

次に、地の呼吸は潮の干満（潮満・潮干、赤玉・白玉）であるのに、更に、別に“潮の干満”が加えられたことである。地の呼吸を“潮の干満”と強調されているのである。
これには重要な意味があることが分かってきたのである。つまり、上手くいかない原因がここにあるのではないかということである。

これまで出来るだけ呼吸法を稽古するようにしている。片手取り呼吸法、諸手取呼吸法、坐技呼吸法等である。大分長い間稽古しているので、「天の気によって天の呼吸と地の呼吸を合わせて技を生み出す。」でやれるようになり、これで大体の相手を制する事ができるまでになった。
しかし、相手も力をつけてきたり、こちらのこの気のつかい方や息のつかい方などのやり方に慣れてくると、しっかりと掴んだり攻撃してくるので、時として力んでしまったり、腕力に頼ることになる。そしてまだまだだなと反省すると同時に、何が欠けているのか考えることになる。

相手が力一杯しっかりと掴んできた場合でも相手の力を抜き、相手を浮き上がらせたり、無重力状態にするのが、この地の呼吸の“潮の干満”なのであることが分かった。手首を掴ませた場合、掴ませた手首の先に息（気）と力を出し、手首から上（肩方向）に息（気）を思いっ切り引くのである。すると手先の方が干となり、そして反対側が息（気）と力で満ち、干満が感得されるのである。
この手の“潮の干満”がなかったり十分でなく、ただ地の息でやっていれば、相手の力に押さえられて動かなくなるか、腕力に頼ることになるわけである。
また、この“潮の干満”は上肢だけではなく、下肢でもつかわなければならない。特に、足首を支点とした下への息（気）と力を出し（干）、足首から上（腰方向）に息（気）を引く（満）の“潮の干満”である。因みに、潮の満干ではなく“干満”とあることも大事な事であると思う。

この“潮の干満”を加えて、日月の気と天の呼吸と地の呼吸と四つの宝を合わせて技をつかえばいい技が生まれるはずである。何故ならば、次の様に大先生が保証され

ているからである。「日月の気と天の呼吸と地の呼吸、潮の干満とこの四つの宝を理解せねばだめなのです。もう一つ、澄み切った玉が必要です。この五つのものが世界を浄め、和合させていると思っている。植芝ばかりではない。これに賛成する人は、同志として光明を天から与えられ、それを観得される筈です。」（合気神髄P.14）
今回は五つ目の“澄み切った玉”は省いているが、“潮の干満”を加えた四つの玉だけでも光明を天から与えられるのには変わりないはずである。

【第745回】 魂を表に出す阿吽の呼吸

「合気道の思想と技『第７０６回　魂を表に出すのは阿吽の呼吸』」で魂を魄の上に出すのは阿吽の呼吸であると書き、そして阿吽の呼吸をつかっての稽古を試行錯誤しながらやってきた。その結果、更に分かってきたことがあるので書いて置くことにする。

まず、最初に、魂を表に出すためには阿吽の呼吸が必須である事を確信したことである。阿吽の呼吸なくして魂を表に出し、魄を魂で導くことは出来ないということである。
次に阿吽の呼吸の特徴がわかってきたことである。
阿吽の呼吸は、

- 体や手や足を上下、前後等陰陽に働かせる。例えば、阿吽の呼吸によって、手は手先（前）と肩や胸（後）に双方向に伸びる
- 手と足の各関節（手首、肘、肩、胸）（足首、膝、腰、腹）の各関節同士を離し、伸ばし、そして今度はしっかりと結ぶ。
- 気と力を、手先から腕、上腕、胸に集め、手先から胸を一本化し、足先から、もも、太腿、腰、腹に集め、足先から腹を一本化する。
- 胸に集まった気と力と腹に集まった気と力を結び、頑強な体をつくる。
- 胸と腹に集まった気を胸から肩、上腕、腕、手先に流す。この手先に流れるのは魄の力ではなく、気と魂の力である。この手が相手に触れれば、相手と結び一体化し、魂（心、念）で相手を導くことが出来るようになる。そして魄の体

が土台となり、魂が上になると感得できるのである。阿吽の呼吸をつかわなければ、魄の力でやることになるのである。

阿吽の呼吸は、このように摩訶不思議な呼吸・息づかいである。アーと腹と胸で息と気（声）を出しながら、気と息を引く（吸う）のである。吸って吐くの陰陽を同時にする息づかいなのである。仁王様の阿形のアーと息と声を出しながら、お腹を気と息で満たしてお腹を膨らましているのを見ればわかるだろう。

更に、阿吽の呼吸は只息をしても阿吽の呼吸にならない。阿吽の呼吸になるためには、天地・宇宙との結びつきが必要なのである。天の気と結び、天の気を天の呼吸で地に下ろし、その気と結んでつかうのである。宇宙規模の呼吸ということになろう。

これまではイクムスビの呼吸をつかってきたわけだが、これが阿吽の呼吸になるわけである。阿吽の呼吸がつかえるようになるためには、先ずはイクムスビの息づかいを知らなければならないと考える。そしてイクムスビの息づかいをつかっていると、自然と阿吽の呼吸をつかえるようになるようである。
それでは、イクムスビと阿吽の呼吸の大きな違いは何かというと、イクムスビは魄の息づかいであり、阿吽の呼吸は魂の息づかいであると思う。手をつかうにも、イクムスビはイーで息を吐いて手を出し、クーで息を吸って手で相手を導き、ムーで息を吐いて技を収める。
阿吽の呼吸は、ンーで天の気と結び、アーで手足や体を気・魂（心、念）で満たし、満たした気・魂を手先足先に流す。そしてこれで魂が魄の土台の上にのり、この魂で土台の魄や相手を導くのである。相手は通常の魄の力を感じなくなるようだ。

魂を出すため、魂を知るためには阿吽の呼吸が要であるようだ。

【第746回】 己の行は皆のためのもの

過って合気道に入門した頃から疑問に思っていたことが最近やっと氷解した。それ

は大先生が合気道の技を学校の先生のように教えて下さらなかったことである。技はこのようにするとか、体はこのようにつかう等との教えやご説明が無かった事である。我々門人の稽古での技づかいや体づかいをいいとか悪いも云われなかった。只、頻繁に叱られた記憶が残っている。大先生がお叱りになると、道場中が緊張し、誰も顔を上げる事が出来なかったものである。

私のために叱られて、道場中が緊張したこともあった。正面打ちで打ち合うとすでに赤く腫れている尺骨が痛いので、相手の手を打たないで滑らすようにやったのを大先生がご覧になり、そして大先生のぎょろっとされた目と合ってしまったのである。そしてその途端に大先生は道場にすかさずお入りになり、そして烈火の如く「そんな稽古をしてはいかん」と叱られたのである。それも、張本人の私に対してではなく、その道場におられた先生に怒られたのである。当然、その先生は何故大先生が叱られているのか知らないわけだが、戸惑いながらも大変恐縮されて謝れておられた。今になって思えば、これが最高の教えであったことがわかるのである。

何故かというと、まず、相手に対してしっかりと打ち込んだり、掴まなければならないということである。これをしなければ稽古にならないからである。相手が真剣に打ったり掴んだりの攻撃をしてくるから、真剣に返そうとすることになるのである。これは合気道の稽古の基本であり、その基本を乱したことに叱られたわけである。

二つ目は、道場で上に立つものは、下のモノが不味いことをやっていれば正す責任があるということである。何か道場で不都合があれば、その上に立つ者の責任なのである。何故ならば、不都合なことをするものは、それが不都合であり、不味いという事を知らないでやってしまっているわけだから、知っているべき上のモノが注意をしなければならないという教えなのである。

この教えから、道場で後輩が不味いことをすれば、天上の大先生に叱られないように注意をするようにしている。

勿論、大先生からお教えを受けたことは確かである。突然、我々が稽古をしている道場にお入りになり、「そんなに力を入れなくてもいい」とか、「天の浮橋に立たなければならない」とか言われて短い演武をされたり、神様のお話や宇宙天地のお話はよくされた。どんなお話をされたかは、『合気神髄』『武産合気』にある通りである。それを読めば分かるように、手足をどう動かす、技はどう使う等、具体

的、実践的な教えはなかったと思っている。

さて、大先生は何故、学校の先生のように、門人たちに技を具体的、実践的に教えて下さらなかったのかということであるが、その答えは次の文章にあると思う。
「人々は皆、私の家族であると感じる。己の行はこの家族に教えるのではなく、皆に行うものである。」（合気神髄P.46）この文章にある“人々”を“門人”に変えてみると分かり易い。つまり、「門人は皆、私の家族であると感じる。己の行はこの門人に教えるのではなく、門人に行うものである。」となるから、大先生は門人に教えるために修行しているのではなく、また、修業して教えるのではなく、修業することが門人の教えになるようにしているということである。
簡単に言わせて貰えば、己の修行を黙々とすること、己の最高の技を見せる事、己の日々変わる姿を見せる事が、門人たちに対する最高の教えであるという事だと考えるし、確かに今の私にとって最高の教えになっていると思う。

今の合気道の先生方は、門人や生徒に合気道を事細かく教えなければならないだろうし、教えるテクニックも大事だろう。しかし、根底には大先生の教え“門人の教えになるように修業しなければならない”と思っている。
また、我々のような古株たちも、後輩たちに対して直接教えるだけではなく、行する姿や変わっていく姿、ここまで出来るという可能性などを見せること等で教えになるようにしなければならないと思っている。

【第747回】 魂の比礼振り

これまで“魂”について研究してきているがまだまだよく分からない。しかし、合気道は魂の学びであるわけだから、何としても”魂“を会得し、技に取り入れなければならないと思っている。
お蔭様で、最近、ちょっと進展があったようなので、それを記してみたいと思う。

その切っ掛けは、やはり大先生の教えである。次のような文章を見て気がついたわけである。

一つは、「左はすべて、無量無限の気を生み出すことが出来る。右は受ける気結びの作用であるから、すべての気を握ることができる。すなわち、**魂の比礼振りが起これば**、左手ですべての活殺を握り、右手で止めさすことができるのである。これが神技（かむわざ）である。」です。
次に、「魂の比礼振りは、あらゆる技を生み出す中心である、その比礼振りは融通無碍で固定したものではない。」である。
この二つの事から、“魂の比礼振りは起こるもの”であり、技を生み出すのはこの魂の比礼振りであるということである。

まず、“魂の比礼振りは起こるもの”とあるわけだから、それが起こるようにしなければならない。そのためには、前から書いているように、「自己の魂が、身心によって科学されて出てくる」ようにする、つまり心身を科学的に、つまり法則に則ってつかうことである。そしてまた、これまで沢山書いてきた要因を身につけ、つかわなければならない。

呼吸法（片手取り、諸手取、坐技）をやっていると、上手くいった時の感覚がこの魂の比礼振りである。そして分かった事は、“魂“で初めから技を掛けるのではなく、しっかりした体と力の魄を土台にした上に魂を載せ、相手を導かなければならないということである。これまで魄の力ではなく魂で技を掛けようとしたが、相手が強かったり体力があればひっくり返されてしまう。初めは魄の力で態勢を整え、相手と接し、導き、そこからその魄を土台にして魂で導くのである。尚、ここでの”魂“は”気“と考えていいだろう。大先生は、「自在の気なる魂によって魄を動かす」といわれており、魂は気であり、魄を動かすといわれるのである。

魂の比礼振りが起こるとどのようになるかというと、例えば、片手取り呼吸投げで、こちらの手を掴んでいる相手が、右左上下に自由自在に動くのである。これは魄の力ではなく、魄を土台にして、その土台の魄の力をつかわずに下に置き、その上に魂を置いて魂で相手を動かすのである。相手が力を入れようと頑張ってくれば、自ら浮き上がったり不安定になり、こちらの自由になるのである。
その際、相手が掴んでいる手は魄と魂を行き来する“振り”が生じ、相手の動きもそれに応じるが、それが比礼振りに感じられる。

後は、大先生が注意されているように、魄に堕せぬように魂の霊れぶりを大事にしてやれば相手は満足して倒れてくれる。

大先生は、「魂は自分自身で創るのであります」とも云われているわけだから、魂の比礼振りが起こるように稽古をしていけば“魂”が更に分かるものと思っている。

【第748回】 三元八力の技

剣の素振り、それも剣をつかわない素振りをしていて三元八力とはこういう事かと気がついた。剣をつかわなかった為に分かったようだ。
剣の素振りは形の上では非常に単純なので、只振っていては面白くないし、長続きしない。しかしこれまで飽きることもなく、その上もっとやらなければならないと思うのが不可解であったが、その理由が現われたようである。
それは剣も三元八力で振らなければならないという事である。

三元とは、気、流、柔、剛であり、八力とは動、静、解、疑、強、弱、合、分（開祖の言霊）である。
つまり、剣を振るにも三元の気、流、柔、剛と八力の動、静、解、疑、強、弱、合、分で振らなければならないという事である。剛剣、軟剣、流剣（流れるような剣）・気剣を自由につかえるようにすることである。

そして更に、剛剣、軟剣、流剣（流れるような剣）・気剣に八力を加えて振るのである。素早い動きと静かな動きの動・静の剣、伸ばす剣と縮める剣の解・疑の剣、強く打つ剣と弱く打つ剣の強・弱の剣、絞る剣と緩める剣の合・分の剣であると、考える。

大先生は、「自分で八大力の修行をして、陰陽を適度に現わし、魂の霊れぶりによって練磨し、この世を浄めるのです。」と言われているのである。
この三元と八力を自由自在に組み合わせてつかえるようにしなければならないことになるわけだから、剣の素振りでもそれを身に付けるのは容易ではない事になる。

只振るだけではもったいないわけである。

剣で三元八力の修行をしたならば、杖などの得物でもできるようにすればいい。そして又、徒手による相対稽古の技づかいを三元八力でやるのである。相手によって、三元八力のつかう構成を変えたり、調整するのである。相手により、場合々々でいろいろな稽古ができるのである。何時も同じような技のつかい方では上達はあまり期待できないし、面白くもないだろう。
大先生は三元八力を理解できなければ、本当の力、つまり真の合気道の技は出て来ないと次の様に教えておられるのである。
「一霊四魂三元八力や呼吸、合気の理解なくして合気道を稽古しても合気道の本当の力は出てこないだろう。」

【第749回】 日に新しく進んで向上する

合気道を半世紀以上続けることになるが、合気道を修業して何が素晴らしいのかが改めてわかってきた。
合気道の素晴らしさは、技と自分がどんどん変わっていくことである。昨日まで出来なかった技が出来るようになるとか、より上手くいくようになることである。
従って、今、出来なくとも諦める必要もなく、明日か来年には出来るだろうと期待できるわけである。

人にとって一番幸せなことは自分が変わって行くこと、進化していくことであると考える。しかし、これは中々難しい。その理由は、その幸せを誰も教えていない事、そしてどうすれば自分が進化していくことが出来るようになるかが中々分からないことだと思う。
しかし、これを教えてくれるのは合気道だと信じている。合気道を修業することで、己が日々進化し向上していくことを自覚できるようになり、生きる意味と有難さが理解できる機会が与えられるのである。

合気道では、日に新しく進んで向上していかなければならないと教えられている。

晩年の大先生は、「昔は鳥船の行事とか、あるいは振魂の行事、いままでの鳥船や振魂の行ではいけないのです。日に新しく日に新しく進んで向上していかなければなりません。それを一日一日新しく、突き進んで研究を、施しているのが合気道です。（合気神髄　Ｐ．１０１）」と云われておられた。当時の私には、技が上手になり強くなるように、毎日稽古をしなければならないということだろうと思っただけだった。

今、段々分かってきたのだが、「日に新しく進んで向上していく」には、更に深い意味があるということである。
それは、まず、上記の大先生の教えに、「昔は鳥船の行事とか、あるいは振魂の行事、いままでの鳥船や振魂の行ではいけないのです。」があるが、昔の鳥船や振魂は素晴らしいが、その形のまま行ってはいけないといわれているのである。その形のままの行では、日に新しく日に新しく進んで向上していく事が出来ないということである。
日に新しく日に新しく進んで向上していくためには、鳥船や振魂の行も、日に新しく進んで向上するようにしなければならないのである。そのためには、形だけを追うのではなく、目に見えないモノ、合気道の技で云えば、宇宙の理合い、法則、条理を見つけ、身につけていく事だと考える。
鳥船や振魂の行も合気道の技も同じだが、形だけ、目に見えるモノだけを追っていると、必ず行きづまり、先に進めず、日に新しく進んで向上できなくなるはずである。これが魄の稽古である。

合気道も鳥船や振魂の行も魂の学びにならなければ、日に新しく進んで向上することは出来ないということであろう。

【第750回】 宇宙生成化育の大道を歩むために

真の武道である合気道の目標は、宇宙との一体化であり、宇宙完成のへの宇宙生成化育にお役に立つことである。
合気道が真の武道であると大先生は、「真の武道は相手を殲滅するだけではなく、

その相対するところの精神を、相手自ら喜んで無くさしめるようにしなければならぬ和合のためにするのが真の武道、すなわち合気道である。（合気神髄 P.173）」と云われている。
更に「真の武道には相手もない、敵もない。真の武道とは宇宙そのものと一つになることだ。宇宙の中心に帰一することだ。合気道では強くなろう、相手を倒してやろうと錬磨するのではなく、世界人類の平和のため、少しでもお役に立とうと、自己を宇宙の中心に帰一すること、帰一しようとする心が必要なのである。合気道とは、各人に与えられた天命を完成させてあげる羅針盤であり、和合の道であり、愛の道なのである。（合気神髄p.115）」と云われておられる。

それではこの宇宙生成化育の大道をどのように歩んでいけばいいのか、そしてそのために何が肝心なのかということになる。
これまでは合気道の技の錬磨をしていけば目的に達成したり、近づくことが出来ると考えていたが、どうもそれだけでは難しいようである。
大先生は『合気神髄』に、「宇宙の生成化育への大道を歩もうとする者は、己の心身統一をはかり、宇宙の魂を磨いて顕幽神三界を守り、天地和合の大道である合気道を律し、宇宙の真理の律法を明らかにしなければいけない。真実の「和」を達するには宇宙の真理に反しないことが肝要である。（合気神髄p.113）」と教えておられるのである。
つまり、合気道の技を錬磨することは引き続き必要であり主流であるが、技を磨くと同時に、次のことを身につけていく事が必要であると云われているわけである。

1. **己の心身統一をはかる事：**心の思うように体が動き、体の声を心が聞くように、心身が一体化して働くようにすることと考える。
2. **宇宙の魂を磨いて顕幽神三界を守る事：**自己の魂を磨き上げて、宇宙の魂と結び生きた技を出し、見える世界と見えない世界で武を現わし、汚れやカスを取り除いていく事だと考える。この「宇宙の魂を磨く」を大先生は、「自己の魂線を磨き上げて、宇宙の魂線とむすばねば、すべて生きた技は出て来ません。」と云われておられる。
3. **天地和合の大道である合気道を律する事：**天とも地とも和合できる道である合気道を、ある基準の基（宇宙の法則）でマスターすること。

4. **宇宙の真理の律法を明らかにする事：**宇宙の条理・法則を見つけ、技と体に取り入れていくこと。
5. **宇宙の真理に反しない事：**真実の「和」（天地との和、宇宙との和＝時間空間を超越した和）に達するためには、宇宙の真理（条理・法則）に反しないようにしなければならないという事である。これは道場での稽古の時だけではなく、更に、武道を超越し、如何なる時間、場所、機会においてもそれに反しないようにしなければならないという事になる。

つまり、これまでの道場での稽古から、日常生活に於いてを含む全生活が修業ということになるわけである。

合気道の目標は、技の稽古だけでは十分ではなく、日常生活も修業の場となり道となる。これが合気道の道より大きな大道を歩むという事になるわけである。

【第751回】 光と熱と力

以前から不思議に思っていたことが、年を取ってきたお蔭で少しわかってきたようだ。光である。
入門当時から、大先生がお見えになると目と心が大先生に引き付けられ、大先生が道場で一寸演武をされても、気持ちよく身も心も奪われていたことを覚えている。当時は、何故、大先生に目が行ってしまうのかがよく分からなかったが、それは光であったと言えるようだ。大先生は誰もが感知する強烈な光を放たれていたのだ。光だけでも相当なエネルギーがあるが、これに熱と力が加わるととてつもないエネルギーになる。特に、大先生が激怒されたときがそれであったと実感する。

年を取って来て光は見えてくるようである。木々や草花の光、赤ん坊や幼児の光等々である。また、光が消えていったり、消えてしまったのも見えるようになる。人の場合は、光を失うと暗くなる。今の社会は、暗い人間が増えていくように見えるが、世の中を明るくするためにも光のある人間を育てたいものである。合気道の世界でも、長年稽古をしている高段者たちの多くがどんどん暗くなり、光を無くしていくのは寂しい。光を出す合気道家になり、そして光のある社会を建設するお手

伝いをしなければならないと思う。

まず、「光」とは何かを研究しなければならない。大先生は、「光」の定義はされていないようなので、一般的な意味で捉えればいいと考える。例えば、キリストや仏さまの絵や像にはよく光の輪がついているが、この光であり、先述の乳幼児や木々草木の光である。
しかし合気道の光は、一般的な光と違って、光に熱と力が伴わなければならないと云われている。例えば、「△は気にして力を生じ、また、体の三角体は破れざる丈夫（ますらお）の姿勢を具備さすべく、この鍛錬により**光と熱と力**を生ず」、「この（△○□）鍛練により**光と熱と力**を生ず。これ、みな修練者の引力により来る。引力は修練者の天地自然の絶対愛の感得、愛善熱の信行により来るものなるべし」。

次にどうすれば光、そして光と熱と力を生ずることができるようになるかである。大先生は、「祈りは光であり、熱であり諸神諸仏と共に、天地の営みの道に沿ってゆかなければならない」、「祈る折には、自我はなく、あらゆる執着を去って光となる」、「魂と血流が浄まると、肉体が立派な生きたすき通った光の肉体となる」、「愛より熱も出れば光も生ず」「五体と宇宙のひびきの同化。これにより光と熱と力が生まれる」「心を磨いて、本当に六根の働きをば融通の変えやすいように、つまりいう魂の道を明らかにしておいたらよい。そうすると六根は光となって、表にあらわれてくる。」等と教えておられる。
つまり、光を出すためには、祈る事、心と血を浄める事、愛、五体と宇宙のひびきの同化、心を磨く事などが必要ということになる。
このような修業を続けて行けば、光と熱と力を生じるようになるはずである。

合気道も光ある妙技をつくっていかなければならない。大先生は、「合気道は自己を知り、大宇宙の真象に学び、そして一元の本を忘れないで、理法を溶解し、法を知り、光ある妙技をつくることである」と言われておられる。
つまり、光ある妙技を創るためには、自己を知る事、大宇宙の真象に学ぶ事、一元の本を忘れない事、宇宙の条理と法則を知る事である。

光ある合気道をつくり、光に満ちた社会をつくり、地上天国建設の生成化育をお手伝いしていきたいものである。

【第752回】 △○□と⊙⊕

合気道を長年修業させてもらっているが、ますますやることがあることを痛感する、というより合気道をまだほとんど分かっていない事に気がつく。合気道は技を練って、宇宙の営み・法則を身につけ宇宙と一体化する武の道であることぐらいまではわかったつもりだが、まだまだ修行して身につけることがあるということである。

例えば、「合気道は、大自然の絶対愛を基として、体を△に象り（かたどり）、○を中心に、気により△□の変化と気結び、生産びを身体に現わし、生み出しつつ気魂力を養成し、皆空の心と体を造り出す精妙なる道である。」の合気道の教えである。この教えの中には、合気道は△○□で技を生み出し、そして気魂力を養成しなければならないとある。つまり、合気道は気魂力の養成であり、その為には△○□で体と技をつかわなければならないというわけである。これまで△○□の教えがある事は分かっていたが、とても手に負えそうになかったので避けていたのだ。

そこで△○□について挑戦してみた。

まず、前出しの文章の中の「体を△に象り（かたどり）、○を中心に、気により△□の変化と気結び、生産びを身体に現わす」を注意してみると次のような事がみえてくる。

△は体が取る態勢である。合気道で云われる、「心をまるく体三面にひらく」の三面体である。

次に○である。「○を中心に、気により△□の変化と気結び、生産びを身体に現わす」とあるように、○は気であり、○の気が中心の基になって△と□の気と結ぶということであると思う。○が中心になるのは、息を引くことによって体に気が満ちて○くなり、△と□と気と体で結びつくからである。

合気道の形（例えば、正面打ち一教、呼吸法）は、この△○□で体と技をつかわなければならないのである。

具体的に、△○□をどのようにつかうかを正面打ち一教でやってみると次の様になるようだ。

- まず、相手に対して半身で体三面にひらく、三面体を象る（かたどる）
- 前足を進め、半身から腹を十字に返し両手が上がると、腹と両手で△が出来る。
- 前足の下や足先の縦方向に体重が懸かると、地から気が流れてくる（縦の気）。この気に合わせて息を引くと気は横に広がり、体は気で満ちる。体が気で満ちて体は○くなるのである。吐く息の縦と引く息の横の十字から気に満ちた○がつくられるのである。この○が相手を気結び、生結びする働きをするわけである。
- 後は収めになるが体と気が盤石の□になる。

合気道の技は△○□の体と気で生んでいかなければならないことを実感できるようになると、これまでの問題が氷解する。それは、との違いである。『合気神髄』『武産合気』に出てくるものである。
まず、である。は中心を持つ、中心から等間隔の軌跡である。二次元的、平面的な○である。手首や肘や肩を支点とする○である。

これに対してのは、三次元的、立体的な円、というより球である。縦横十字から生まれる○である。

従って、○は、の○であり、また、の○であるということになる。合気道の技は、円の動きの巡り合わせであるの○である。

【第753回】 魄でない力を生むために

合気道の基本的な修業は技を練っていくことである。初めは体力や腕力をつかい技と体を練っていく。魄力でやるということである。しかし、この魄力では技が上手く掛からないようになってくることが段々分かってくるはずである。稽古の相手に

力があったり、頑張ったりすれば技は掛からなくなったり争いになるわけである。つまり、己も相手も魄力に頼っている同次元にあるために当然そうなるわけである。合気道を創られた大先生は、それがよく分かっておられ、次の様に諭されておられる。
「物の技は力少なし、武の魂魄阿吽をもって自己の妙、明らかなる健やかなる力をつくることこそ合気の道である」（合気神髄 P.160）。
魄力に頼った技は力が弱いから、魂魄を合わせ、阿吽の呼吸で力をつくって技をつかっていかなければならないといわれているのである。

この武の力は魄（体、魄力等）を土台にし、その上に魂が来る力であり、また、阿吽の呼吸によってつくられる力という事になる。諸手取呼吸法などはこの力でないと上手くいかないはずである。
また、この力は魂の力ということになる。この魂は己がつくるものでも己がだすモノではなく、つくられるモノであり、出てくるモノなのである。これを大先生は、「（武産合気とは、）自己の魂が、身心によって科学されて出てくるものである」と云われている。

魂が生まれ、魂が出てくるようになるには、やらなければならないことがある。これは以前から書いてきた。例えば、天の浮橋に立たなければならない。天地の呼吸に合わせ息をすること。陰陽十字　等々。
また、「身心によって科学されて出てくる」とあるように、体と心は宇宙の法則・条理・理合いに則ってつかわなければならない。これを科学するといわれていると思う。

魂はまだよく分からないが、魂は気と重なり合う部分があるといわれるから、ここでは魂を気と換えて説明することにする。当然、今のところ魂を気として技をつかっている。
相対で相手に技をつかう場合、力を出す、気を出すのではなく、力と気が自然と出るようにしなければならないと思ってやっている。出てくる力こそ魂であると思うからである。
そして分かった事は、やるべきことをやればそれができるということであり、やる

べきことをやらなければ魄の力に頼ってしまうことになるということである。

例えば、諸手取呼吸法である。掴ませた手を上げようとしてもよほどの力が無ければ上がるものではない。何しろ、相手は二本の手でこちらの一本の手を掴んでいるのである。それで今度は腰腹で己の手を上げることになる。腰腹の方が相手の二本の手の力より強いから可能なのである。しかし、相手も腰腹でこちらの一本の手を掴んで来れば、腰腹と腰腹の五分々々となってしまう。
そうなると相手の腰腹の力より強い力をつかわなければならないことになる。それは自分の外の力である。天地の力、宇宙の力である。具体的に云うと、①持たせた手と同じ側の足の足底に息を吐きながら地に体重を落とす。②地から抗力が返ってくるので、その縦の力を今度はふくらはぎ、太もも、体幹と息を引き乍ら横に拡げる。掴ませた手も横に拡げる。体が円になる。
また、掴ませた手は、息を入れながら胸を開き、胸鎖関節と肩鎖関節を伸ばすと、縦の息が横に広がり体が円になるに従って、肩峰下関節と肩甲上腕関節が上がり、手全体が上がってくる。
この力は自分が出している力ではなく、出てくる力である。
③後は更に息を引き乍ら、手と足と腰腹を陰陽十字につかっていけば、相手はついてくるし、自ら倒れてくれる。ここの力も出てくるものである。

先述のように、この出てくる力が魂ではないかと感じている。この力でやるとこれまでの腰腹でやるより大きな力と説得力があるのである。

【第754回】 合気道はやはり武道

これまで大先生のお話や教えから、合気道はこれまでの武道とは違うということが分かった。これまでの武道は相手・敵を極めたり、倒して勝つことが目標であったわけだが、合気道の稽古の目標は宇宙との一体化であるとか、合気の技は敵を倒すため殲滅するためにつかうのではない等である。
大先生からはこのお話をよくお聞きしたし、『武産合気』『合気神髄』に書かれている。『武産合気』『合気神髄』を読むと誰もが思うと思うが、これは武道書とい

うよりも哲学書であり宗教書であるということである。武道に関しては、実践のための具体的な事がほとんど書かれていないのである。

しかし、合気道はやはり武道であると言える箇所が『合気神髄』にある。これまで何度か見ていたはずだが、意識できていなかったのである。
その箇所は「天地の教えを稽古を通して描きだす」の章（P.173　初版）である。ここには、①「相手が引こうとしたときには、まず相手をして引く心を起こさしめ、引かすべくしむける。技の鍛練ができてくると、相手より先に相手の不足を満足さすべくこちらから相手の隙（すき）、すなわち不満の場所を見出して技をかける。この相手の隙を見出すのが武道である」とある。
隙を見出してその隙に技をかけるとあるように、通常の武道のやり方である。やはり合気道は武道なのである。

②「真の武道は相手を殲滅するだけでなく、その相対するところの精神を、相手自ら喜んで無くなさしめるようにしなければならぬ和合のためにするのが真の武道、すなわち合気道である」とある。
ここには、真の武道の合気道は“相手を**殲滅する**だけでなく”とあるわけだが、この意味するところは、合気道は相手を殲滅もできなければならないということである。これは典型的な武道の要素であり、やはり合気道は武道でもあるということになる。大先生は、合気道は“真の武道”であるといわれ、相手を殲滅する“武道”と区別されているが、真の武道はやはり武道なのである。

③「無数の槍にとりかこまれ、押し進んできたときといえども、それを一人とみなしてなす。古人のごとく後に柱や樹木を小楯にすることとは異なる。進んで相手の心を小楯に、その真正面に立って突いてくる槍の真中心に、入身転換の法によって無事に、その囲みを破って安全地帯にでる。・・・この道理をよくくんで、体に描き出して稽古するのが肝要で、大勢のときは一人と思い、一人のときは大勢と思い、常に一をもって万にあたるつもりで、隙を与えないようにするように心がけて稽古することも、また肝要なり」とある。
これはまさしく昔からの武道の心構えであろう。多数の槍や剣に取り囲まれたり、攻められても対応できるような稽古を常日頃からしていかなければならないという

ことである。相対稽古で一人の相手と稽古する時も、多数の敵を相手にしていると思いながら技をつかっていかなければならないのである。
合気道は真の武道であるが、武道であるということを再認識すべきであると思う。

【第755回】 □の火の地の呼吸で

呼吸法を自主稽古で出来るだけやるようにしている。本腰を入れてやるようになってから２０年ぐらいやっていることになろう。長年稽古をしているので、大体の稽古相手には上手く掛かるようになってきた。
しかし、最近、時として上手くいかない事があるようになった。何度も稽古をしている相手に、諸手取呼吸法で思いっきり頑張られたりすると力んでしまったりして上手く出来ないことがあるのである。相手も上達していて、手足や体のつかい方や息づかいを読まれたり、身につけられ、同格になってきたのである。同格で技をつかっても、力は拮抗するから争いになり、いい技が生まれない事になるわけである。

このような拮抗の均衡を破らなければ先に進むことができない。そのためには技の“質”を変えなければならない。どのように変えるかというと、これまでの自分の力から自分以外の力をお借りした技づかいをすることである。
これまでは陰陽十字の体づかい・技づかいやイクムスビの息づかいなどの法則を己の心体に取れ入れ、そしてその己の心体を駆使して技を生み出していたわけだが、今度は自分以外の力をつかわしてもらうのである。自分以外の力とは天地の力であり、宇宙の力である。

今回は、苦労している諸手取呼吸法のために、天地の呼吸、特に地の呼吸のお力をお借りすることにしたのである。何故ならば、この地の呼吸は大きな力を産み出してくれ、己だけの力より遥かに大きな力だからである。
地の呼吸は、引く息であり、火であり、□（四角）であると大先生は教えておられる。諸手取呼吸法で、息を思いっ切り体中に引き込むと、地から強力な力・エネルギー（気）が体中に流れ込み、そして手も足も体も気で満ちる。□になった感覚に

なる。この地の呼吸で技と体をつかうと、これまでは己の力だけでででやっていたこと、そしてそれによって同じ人間である相手とぶつかっていた事がわかるのである。

地の呼吸をつかうためには、天の呼吸が必要であるが、天の呼吸からはじめなければならない。天の呼吸と地の呼吸の交流があってはじめて技が生まれるのである。これを大先生は、「天の呼吸との交流なくして地動かず、ものを生み出すのも天地の呼吸によるものである」と云われているのである。“もの”を技に代えればいい。

また、大先生は、天地の呼吸を、「息を出す折には丸く息をはき、ひく折には四角になる。・・・・丸くはくことは丁度水の形をし、四角は火の形を示すのであります。丸は天の呼吸を示し、四角は地の呼吸を示す」と教えておられるのである。

この大先生の教えに従わなければいい技は生まれない。その典型的な例は「二教裏」である。初心者のほとんどが息を吐きながらこの二教裏を極めようとしているが極まらないのは、天の呼吸の吐く息で極めようとしているからである。地の呼吸の引く息、火の息でなければ極まらないのである。また、天の呼吸の吐く息が水で○という感覚も身につけなければならない。
勿論、諸手取呼吸法もこの地の呼吸を上手くつかわなければならない事になる。

【第756回】 天の呼吸から始める

合気道は手で相手に技を掛けて錬磨していくので手のつかい方は大事である。勿論、手を上手くつかうためには足も腰腹のつかい方も大事であるが、先ずは手に的を絞ることにする。主な手のつかい方は、相手に掴ませた場合と相手が打ってくる場合のものである。正面打ち一教や片手取り四方投げを想定すればいい。
そこで、この掴ませたり打たせたりする相手の手に対して技を掛けるこちらの手はどうすればいいのかである。初心者などは手を掴まれれば、その手を、例えば四方投げや呼吸法の形（かた）にしようと無意識で無秩序に動かす。初心者の内は、これで自然と合気道の形を覚え、体をつくっていくのでこれでいいし、必要な稽古の

過程であろう。
しかし、或る時、この手のつかい方では、相手の力にぶつかったり、押さえられたりして思うようにその手を動かせなくなるようになる。これは合気道というより人間の面白さだと思うが、己に力がついてくると、稽古の相手もその力に応じで対応してくるようになるのである。自分が形もよく分からず、強い力が出せない頃は、相手も強い力で掛かってこないが、形も覚え力がついてくると、相手もそれに負けじと力を入れてくるのである。これは私だけではなく、誰もが経験しているはずである。

技を掛ける大事な手も理合いでつかわなければならない。理とは宇宙の条理・法則である。初心者の無意識・無秩序につかう手ではなく、理合いの手になるように意識してつかわなければならないと考える。先ずは意識してつかい、そしてそれを無意識でつかえるようにしていくのである。

それでは、例えば、掴ませた手をどうつかうかということになる。そしてその理合いは何かということになるだろう。
四方投げや呼吸法で手を持たせたことにすると、持たせた手を、

1. 息を吐きながら、腰腹で手先の方向に気と力を流す。
   この息は天の呼吸で吐く息であり、縦の息である。また、相手と和してしまう○い水の息づかいである。そして手先に流す気と力は縦方向であり、これを気の体当たり、体の体当たりといい、これが技の最初に必須ということになる。
   因みに足の場合、足先や足底の方向が縦である。
   この天の呼吸がしっかり出来ないと次に進まないし、繋がらないので非常に重要なのである。
2. 天の呼吸で手先まで気と力が通ったなら、今度は地の呼吸で息を引き乍ら更に手（腕、上腕）と体幹（腰腹、胸）を気と力で満たし、そこから手を横につかい相手を導く。横というのは１においての手先の方向に対して十字の方向ということである。因みに、地の呼吸は引く息であり、横の息である。息を引けば（吸えば）手や体が横に拡がるのを実感するはずである。また、□で火の呼吸であり、大きな力やエネルギーを有する呼吸である。この□や火も実感でき

る。初心者は天の呼吸の吐く息の方が力を出せると思っているようで、息を吐いて力を込めているが、これが力みになり、大きな力が出ないのである。
この地の呼吸が十分に働くためには天の呼吸をしっかりしなければならないと、大先生は「天の呼吸により地も呼吸するのであります」（武産合気 P.76）と云われているのである。

大先生は、「天の呼吸との交流なくして地動かず、もの（技）を生み出すのも天地の呼吸によるものである」と云われているが、大きな力を産み出す地の呼吸のために、先ずは、天の呼吸から始めなければならないだろう。

【第757回】 天の叢雲くきさむはら竜王の“くき”

過って大先生から、「合気道は天の叢雲くきさむはら竜王の働きであります。天のむらくもとは、宇宙の気、オノコロ島の気、森羅万象の気を貫き息吹く気の働きであります。くきとは、大地の妙精の現れと、天の現れとを一つに貫く、即ち天と地の両刃の剣です。さむはらとは・・・」と幾度となく伺っていたので、今でもこの文章は耳に残っている。そして又、“天の叢雲くきさむはら竜王“を知りたいと思っていた。

最近、「合気道上達の秘訣」の『第７５６回 手を合気道の手としてつかう』や「合気道の体をつくる」の『第７５７回 関節が各々独立して働くように』で書いたように、手が少し上手くつかえるようになったが、それに合わせるように、この天の叢雲くきさむはら竜王の“くき”が分かったようなのである。
分かったという事は、体で実感し、技で表すことが出来るということである。これが合気道に於いての分かったということであり、一般的な頭で理解したものとは異なると考える。従って、合気道も大先生の教えも頭だけで理解しようとしても無理だと思う。頭で理解しようとすることは必要だが十分ではないということである。体と技での理解が必要ということである。従って、難解な大先生の教えを理解するためには、体と技のレベルを上げなければならないことになる。

さて、天の叢雲くきさむはら竜王の“くき”である。

“くき”とは茎と考える。何故ならば、そう実感できるからである。
茎は根の地と花の天への上と下に伸び、引き合っている。大先生は、「くきとは、大地の妙精の現れと、天の現れとを一つに貫く、即ち天と地の両刃の剣です」と云われているが、前出しの２つの論文で書いたように、手の平の角度を天の息を吐いて４５度、地の息を引いて９０度に返すことによって、手がしっかりした天と地の両刃の剣になる。

また、天の叢雲は、「天のむらくもとは、宇宙の気、オノコロ島の気、森羅万象の気を貫き息吹く気の働きであります」とあるように、気の働きであるから、この両刃の剣は気の剣という事になる。そしてこの気の剣が天の叢雲くきさむはら竜王の働きとなり、これがこれまでの魄の力に頼ったものとは異なる真の合気道である。これを「合気道は天の叢雲くきさむはら竜王の働きであります。」と大先生は言われているはずである。

この天の叢雲くきさむはら竜王の働きの合気道は、これまでと異次元の合気道であり、これこそが合気道であると実感し、合気道の修業に真からの喜びを感じるようになった次第である。

【第758回】 宇宙との一体化のために

合気道の稽古・修業の目標は宇宙との一体化である。修業によって己を宇宙と一体化するのである。そのために宇宙の営みを形にした技を身に付けるべく稽古しているのである。合気道の技は宇宙の条理・法則に則っているので、技を会得することによって宇宙の条理・法則が身に付き満たされ、そして己が宇宙となるということなのである。

宇宙の法則で基本になるのは陰陽十字であろう。この法則が出来なければ合気道の技にならないはずだからである。また、この陰陽十字の法則をつかって体をつかい技を掛けると、自分以外の力、そして宇宙を感じるようになるはずだ。自分の意志からではない力やエネルギー（気）が出てくるのである。

宇宙の法則は陰陽十字の他、天地の呼吸、潮の干満等々と無限にあるようだ。
先ずは、宇宙の法則を一つづつ見つけ、身に付けていく事がこれからの稽古であると考える。

相対稽古で宇宙との一体化のために技をつかうが、まだ宇宙の営み・条理とは程遠い体の動きや技づかいになってしまうことが多い。こんな営みを宇宙はやっているわけがないと思う事が頻繁にあるのである。その理由は、相手がいるために相手を意識してしまい、力を入れ過ぎたり、動きを乱したりするためだと考えるし、また、このままでは、宇宙との一体化は難しいと思うのだ。

相対稽古での動きや技づかいはどうしても宇宙の営みに反しがちになり、つまり不自然になるのだが、それなら自然の動きにあるものに合わせて、体と技をつかうようにすればいいのではないかと考えた。
まず、己の中の自然な動きは何かということである。それは歩行である。人は一人で歩く際、技を掛ける時のように体を意識してつかわないものである。無意識で体が動き、歩を進めている。この無意識の歩行に、技をつかう際の体の動きを入れてしまい、技をつかうのである。

そう思って歩行をすると、これまで気がつかなかったモノが見えてくるのである。
よく観察すれば、通常の歩行では法則に則った体のつかい方、息のつかい方をしているのがわかる。それは次の通りである。
一つ目は、足を進めると進めた足は地に着くが、その際、天からの息が腹を通って地に下り、そしてその息が腹に戻る。そして腹から息と力が足先の方とその反対の胸の方向に流れる。腹を中心に息と力が天と地に別れて流れるのである。慣れてくればこの息は気になるようである。この法則は片手取り呼吸法などで分かり易いだろう。尚、四股踏みではこの感覚がより分かり易い。
二つ目は、足を進めて踵から地につき、更に指の下の膨らんだ部位（指球とする）が地に着くと、足先や地の縦に流れる気と力が、息を引くと同時に横に流れ、足と体が横に広がることである。足そして体が縦と横の十字になるのである。
大きな力が地から湧き上がり、体は安定する。諸手取呼吸法はこれをつかわないと力負けしてしまう。

三つ目は、二つ目での指球で息を腹に入れた時、上記の二つ目で体が十字になり、そして指球を中心に体が十字に内側に返ることである。これで左右の足への重心移動がスムースにいくのである。この法則は片手取りの呼吸法や四方投げに取り入れやすいだろう。
四つ目は手である。肩から下に降りている手は、足が進む際、踵から指球までの息を腹から吐いている間、手は垂直のほぼ４５度で、肩を中心にして前に上がっていき、指球で息が腹に入る時、手の平はほぼ９０度になることである。正面打ち一教や呼吸法はこれをつかえばいい。
五つ目は腹である。腹は正中線に向き、前に進んでいることである。腹が進む方向に反して歩けば、怖いお兄さんの歩きになったり、酔っぱらいのよたり足になる。この腹の動きを上手くつかうと正面打ち一教は更に上手くいくようだ。

これは歩行を分解したものであるが、実際にはこれらすべてが同時に統合されて機能している。

上記の、どれも日常の歩行で、無意識で自然につかっている動きである。これを技の稽古でつかうのである。そのために、先ずは日常の歩行を一度意識してみなければならない。そして上記の五つ、いやそれ以上の法則が歩行にあることを見つけ、実感する事である。そして実感した歩行の法則に、己の相対稽古での技に組み込んでいくのである。
これによって、日常の歩行が宇宙の法則にあること、そしてそれを取り入れた技と体が宇宙と一体化していくことを実感できるものと考えている。

【第759回】 イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビで技を

大先生は、「合気道は松、竹、梅の三つの気によって、すべてができています。これは一口にいって生産霊、足産霊、玉留産霊と申し上げます。」と言われているから、合気道の技も生産霊（松）、足産霊（竹）、玉留産霊（梅）の気で出来ており、この三つの生産霊、足産霊、玉留産霊を技でつかえるようにしなければならないということだと思う。

また、生産霊（イクムスビ）、足産霊（タルムスビ）、玉留産霊（タマツメムスビ）は、流、柔、剛であり、そして△、○、□であると言われている。つまり、イクムスビは流、タルムスビは柔、タルムスビは剛ということになる。

合気道は技を練って精進していくが、只、むやみに繰り返して稽古すれば上達するものではないと考える。目標を持ち、そのためにやるべき事を一つずつやって積み重ねていかなければならないと考えている。
技は、合気道の形を繰り返しながら精錬していくが、よほど注意しないと、自分のやり易いようにやりがちであり、そして固まってしまい、先に進むことができなくなってしまうのである。

やらなければならない稽古に、このイクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビがあるだろう。すべての形（四方投げや呼吸法等）でできなければならないが、形によってやり難いモノ、やり易いモノがある。イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビの稽古とは、イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビでの気のつかい方、体のつかい方であるだろう。

タマツメムスビの稽古とは、剛の稽古である。諸手取呼吸法がその最適な稽古法である。相手にしっかり掴ませて、それを巌の体と気持ちで制するのである。相手の力に押しつぶされないよう、また、相手に待たせた手や打ってきた手から己の手が離れないようにするのである。魄の力と心の全身全霊でやらなければならない。このタマツメムスビの稽古は武道の基本であり、かっての武道家が重視していた稽古法であったはずである。

これと対照的なイクムスビの稽古は、柔の稽古である。相手が力を加えずにふわっと掴んだり、触れた手を、こちらの手で弾いたり離すことなく、引っ付けて相手を制し、導くのである。これはよほどの引力が出て来ないと難しい。合気道は引力の養成でもあると言われるように、これで引力の重要性がわかるものである。
イクムスビで技がつかえるようになると、相手も柔となり、剛の体と心がほぐれ、相手を息、そして気で導いていることを実感できる。従って、気や魂を身に付ける意味でも、このイクムスビの技づかいは重要だと思う。

このイクムスビとタマツメムスの間にあるのが、タルムスビである。通常の相手の掴みや打ちに対する技づかい、体づかいである。最もやり易いが、これだけに留まっていないで、タマツメムスとイクムスビに挑戦しなければならない。

尚、イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビで技をつかう際に、具体的にどのようなイメージになるのかが分かりづらいだろう。しかし、それも大先生は、次の様に具体的に教えておられる。
イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビの働きは、流、柔、剛であるが、
「気を起して流体素、あらゆる動物の本性である。柔とは、柔体素で、植物の本性又肉体のように柔らかいものである。剛とは、剛体素。大地や岩石のような固いもの、鉱物の本性である。」
つまり、イクムスビは流で、血液のように流れ、気を起こし、物を動かす働きをする。タルムスビは柔で、植物や肉体のように柔らかいものの働きをする。タマツメムスビは剛で、大地や岩石のような固いものの働きをする。という事になると思う。

イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビで流、柔、剛となって技をつかっていかなければならないということである。

【第760回】 神々が協力してくれる

大先生の教えで、以前から信じられないことがあったが、最近、それが信じられるようになった。改めて、大先生の教えは疑わずに信じなければならないと痛感した。
その疑っていた事は、修業をしていけば神様が協力して下さるという事である。これを大先生は、「私の合気道は、八百万の神がことごとく協力して和合していくみちなのです。（合気神髄　P.50）」と教えておられるのである。

毎朝、禊ぎをしている。２０、３０年になるが、本格的にやっているのはここ１０

年ほどである。はじめの内はサボる事が多かった。昨日は稽古をしっかりやったので今朝はいいだろうとか、今日は雨だから、眠いからいいだろう等と理由をつけてサボることが多かった。
最近は朝の禊をやらないと気持ちが悪いし、一日中何かが欠けているような気持になることが分かっているので、よほどの事がない限りやっている。

時には、あまりやりたくない事もあるが、一寸だけでもやるようにする。が、始めるといつもと同じようなものになる。昨日までの禊ぎに繋がり、その先に進もうとするのである。この先に進もうとすることは己の本能であるはずだが、どうもそれだけではなく、何かが先に進ませようとしているのである。
これまで分からなかった事や出来なかった事が分かるよう、出来るように導いてくれ、また、そのためのヒントを与えてくれるのである。

何かが、禊ぎで何かを与えてくれるのである。その何かは私の毎朝の禊ぎを手ぐすね引いて待っていてくれるように思えるのである。だから、朝の禊ぎはサボれないどころか、朝、目が覚めると、今朝は何を教えて貰えるのかが楽しみなのである。
この“何か“こそが、大先生が言われている神であり、しかも一つの神ではなく、八百万の神である。八百万の神様の中で必要な教えに最適な神様が協力して下さるという事であると考える。

神様が、私の禊ぎでご協力下さるようになったのは、最近のことだと思うが、ご協力頂くようになったのは、次のような要件が揃ってきたためではないかと思う。

1. 毎日、禊ぎを行ずる
2. 大先生の教えに素直に従う
3. 合気道の修業の目的を、大乗と小乗であやまたず持つ
4. 必ずその日の禊ぎにテーマ、課題、問題意識を持って臨む

毎朝、禊ぎを行じていくと、道場稽古も禊ぎの場となるし、家から道場への道々も禊ぎの場となる。合気道は禊ぎであるになる。禊ぎを行じている場と時では神々が協力してくれるから、どこでも何時でも、何か素晴らしい教えを受けることにもなる。

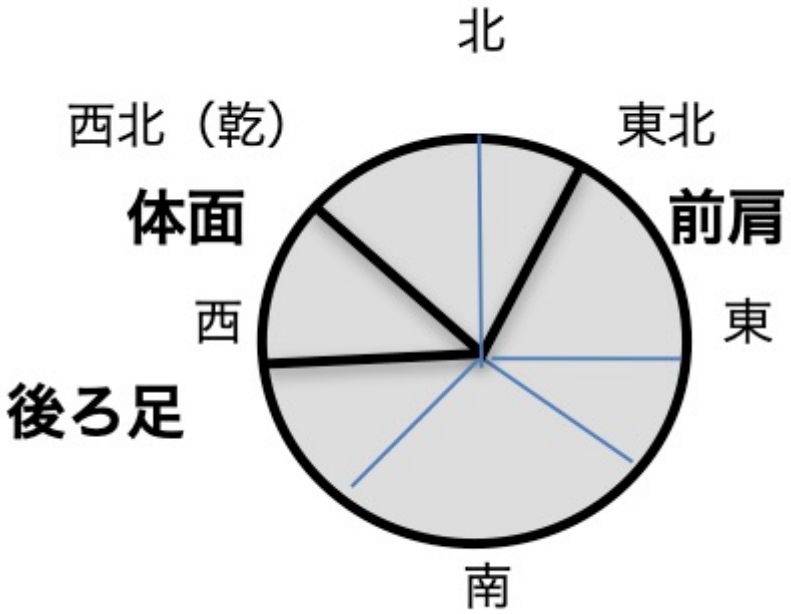
神々が協力してくれるように修業したいものである。

【第761回】 ⊛と⊠を技に

合気道における大先生の教えである○△□は大分わかってきたようで、後は稽古を続けて行けばいいと思っている。しかし、大先生は更に⊛と⊠という記号をつかわれておられるのである。これまでは○△□に精一杯だったし、また ⊛⊠など分かるはずがないと思って敬遠していたが、最近、この⊛⊠が分からなければ先へ進めないとわかり挑戦することにした。
そしてこの研究をしている内に、この重要さがわかり、やはりこの難関を避けて通ることは出来なかったと確信した次第である。

この⊛⊠が分かったのは正面打ち一教である。正面打ち一教にこの重要さと、その解答がある事がわかったのである。さらに正面打ち一教の難しさがここにも隠れていて、正面打ち一教の難しさとその摩訶不思議さを再認識させられたのである。また、これが正面打ち一教で分かったのは、“半身“の構えの重要性を再任した事にもよった。

合気道の構えは、「心を円く体三面に開く」である。体三面は、物と心の始まりある西北（乾(いぬい)に体面を、前肩を東北、後ろ足を西に位置する構えである。これが半身であろう。尚、前足は北、後肩は西南に位置する。

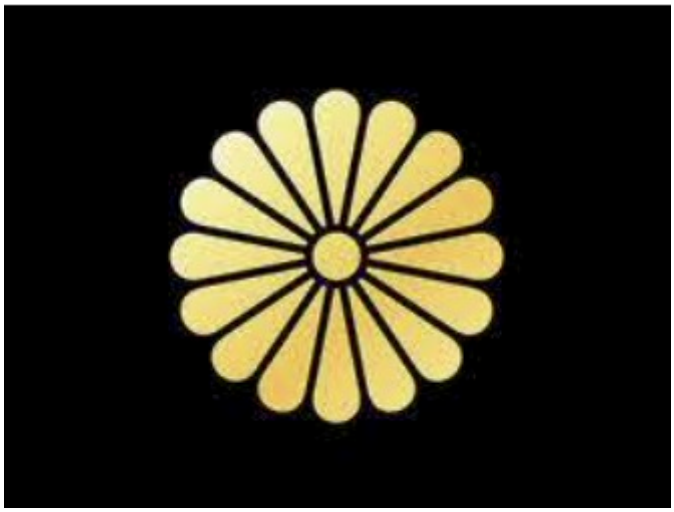


次に㊋㊌である。

㊋㊌の**米**はお腹の動きであると考える。お腹、つまり体面が（西→）西北→北→東北→東（→東南→南）と順々に返って行くのである。（　　）内は、やろうと思えば返すことも出来るし、気持ちをそこまで返していれば技は上手くいくはずである。

また、㊋と㊌の違いは、吐く息かの違いになる。大先生は、「はく息は㊋である。ひく息は㊌である。腹中に㊌を収め、自己の呼吸によって㊋を㊌の上に収める」と云われておられるのである。

尚、大先生は、「㊋と㊌をととのえ、気体と気体を正しく美しく絶えず治めて道に立たねばならぬ。その上に武産合気の技が行なわれる。そしてその息の中には宇宙の実態が入っている。畏れ多いが、日の丸の姿であり、菊のご紋章と、伺い得ることが出来る。」と云われている。つまり、㊋㊌は菊のご紋章であると云われておられるのである。



に比べて返す回数（花弁の数）が８から１６と倍になっているが、も菊の紋章のようにそれを幾らでも増やすことができるし、そうできるようにしなければならないという教えだと考える。
正面打ち一教はこのを意識してやると大分上手くいくようである。

【第762回】 技と性

技を練って合気道を精進しているが、容易ではない。はじめの内は、稽古を続けて行くうちに上達していくものと思い、随分と稽古をしたつもりだが、上達もある程度の所までで、そこからの上達は止まってしまった。そして大分悩んで、考えた結果、ようやく最近になって技を上達させるためにはやるべき事があり、それをやって行かなければならない事がわかった。
そこでやるべきこととは何かを考えると、それは合気道を創られた大先生の教えであることが分かった。大先生からお聞きした教えやその教えが書かれた『武産合気』『合気神髄』にある教えである。
そこで大先生からお聞きした教えを思い出し、そして『武産合気』『合気神髄』の教えを研究し、それを会得するように心がけているのである。
大先生は、技が上達するために多様な教えを残して下さっているのである。しかしながら、その教えを理解、会得するのは容易ではないのは周知の通りである。理解するためには、ある程度の技のレベルに達する事と稽古が目に見える次元から見えない次元へ入っていく必要があることであると思っている。

技が上達するための大先生の教えの一つに、「真空の気と空の気を、性と業とに結び合わせ、喰い入り乍ら技の上に科学を以て錬磨する」がある。この教えは、大先生の道話で直にお聞きしていたし、両書にも載っている。
この教えの意味は難しく、長年考え続けてきた。これまでは“気”というものが良く分からなかったのに加え、“性と技の”“性“が分からなかったからである。

今でも良くは分からないが、今のところ自分なりに次の様に解釈している。
気とは、幽の体であるから、神のような幽の幽と違い、目には見えないが体があり、働きがあるはずである。有川定輝先生が、気は宇宙生命力であると云われているように、気は生命力であり、エネルギーであると思う。

次は、“真空の気と空の気”である。真空の気とは、目に見えないモノからの気であり、空の気とは、目に見えるモノからの気だと考える。真空の気には宇宙や天からのエネルギー・力、空の気には大地の気、山や森林、そして人間などの森羅万象の気である。有川先生は、この“真空の気と空の気”を合わせて宇宙生命力と云われておられると考える。

そしてもう一つ、気を結びつける“性と技の”“性“である。
気を技に結びつけないといい技は生まれないということは容易に分かる。ここで最初に気に結びつける技とは、宇宙の法則であり、これから生まれる技が上手の技である。
問題は、“性”である。
まず、辞書で調べてみると、性とは、人が生まれながらに持っているもの。生まれつきの性質。持って生まれた性分、ならわし、ならい、習慣（大辞林）。人間に生まれながらに備わっている心（漢和辞典）とある。
分かったようで、はっきりしない。
そこでこの“性”を別な角度から見れば分かり易いかもしれないと思ったのである。
それは、“性”がつかう技は一人として同じではないし、技をつかう“性”も多種多様であるという事である。これまで多くの素晴らしい先生方に合気道を教わってきたが、どの先生の技づかいも体形も考え方も違っておられ、非常に個性的であった。

このことから“性”とは、生まれながらに備わった個性的、精神的及び肉体的な個人であるとした。従って、気が結ぶのは宇宙の法則に則った技と個性的な個人ということになる。
思い返してみると、大先生も有川先生も素晴らしい技づかいをされていた。美しさと武道的な強さが完璧に備わっていたわけであるが、それは法則に反しない技づかいによる無駄のない美しさと、個性的な迫力に依るものであったということになる。

故に、技が上達するためには、宇宙の法則を少しでも多く、また深く身につけることと、そして個性を磨く事になる。真善美である。これが合気道は、真善美の探究であるとも云われる所以であると思う。
合気道は個性的な人間をつくるということである。

【第763回】 気形の稽古

大先生は、「合気の稽古はその主なものは、気形の稽古と鍛錬法である。」と教えておられる。これを聞いた頃は、自分は勿論のこと、先輩方も分かっておられなかったようである。そして恐らく、武術的なゴツゴツしたものではなく踊りのように舞うように滑らかにすればいいのだろうと思った。しかし、或る時先輩が取りと受けで入身投げ等の形を踊りのようにやって、我々が感心して見ているところを大先生が来られ、「そんな触れたら倒れるような稽古をしてはならん」と烈火の如く叱られたのである。そこで気形の稽古とは踊りのようなものでないことが分かり、それ以来誰も踊りの稽古はしなくなった。

それから５０年以上が経ち、気形の稽古がようやく少しわかってきた。“気”という難題が解けて来たからである。気を感じ、気を産み、気をつかうことが分かってきたようだからである。例えば、片手取り呼吸法や諸手取呼吸法、それに坐技呼吸法は、気が働けば上手くいくことが分かったし、また、気は己を包んでいる衣服のように感じるようになってきたのである。また、この身を覆っている気で相手をくっつける事ができるようだし、諸手取りで持たれた手を気によって、相手の力を抜

き、相手と一体化し、相手を導くことが出来ることが分かってきたのである。

気形の稽古のために知らなければならない事は気形の“形”である。これが分からなければ、気が多少わかっても気形の稽古は出来ない。
合気道の場合の“形”には二つの意味があると思うし、この両方を駆使しなければならないはずである。：

1. 形はあらかじめ順序と方法を決めて練習すること。合気道での一般的な形稽古であり、そしてこの形は技の形である。また、これは講道館での柔道の形の定義でもある。
2. かたち、英語のShape、視覚や触覚でとらえられる外見的な姿。
   例：〇丸くはくことは丁度水の形をし、四角は火の形を示すのであります。
   ・五体のひびきの形に表れるのが「結び」である。
   ・体を△に象り（かたどり）、〇を中心に、気により△□の変化と気結び、生産びを身体に現わし
   ・△〇□が、また丸く円になることが合気道の実行である

形がこのように分かったとして、気形の稽古とはどのような稽古になるのか研究することにする。
気形の稽古と鍛錬法が合気の主な稽古であるとあるが、これは理想的な稽古法であり、その前の段階があり、この稽古法に至る稽古法があるはずである。
そして次のような稽古段階があると考える。
体形の稽古→息形の稽古→息・気形の稽古→気形の稽古である。
体形の稽古は入門してやる稽古である。体に形を覚えさせる基本的な稽古である。しかし、体で形をつくることには限界があることが分かってくるはずである。しかし、この体形の稽古の段階は相当長く続くし、この段階の稽古で終わってしまう稽古人も多いようである。
次は息で体と技をつかっての息形の稽古である。体でやるより大きな力が出るし、強弱・柔軟と自由に動ける。初めは、イクムスビのイと息を吐き、クーで息を引き、そしてムーで息を吐いて技と体をつかう稽古である
この息形の稽古に慣れてくると、息に気が入って、気が働いてくれることを感じるようになる。特に、息が切れたり、詰まっても気が働いてくれていて、形をつくっ

てくれるのである。つまり、息では形は不完全にしかできないということになるのである。
そして気形の稽古である。気によって体や技をつかい、形を完成していくのである。勿論、気が働くためには体が土台になり、息の支援を受けなければならないが、形を完成していく事ができるのは気ということになるはずである。

しかし、まだ問題がある。大先生は、「合気道は形はない。形はなく、すべて魂の学びである」と云われているのである。気形の稽古の先にも更なる稽古があるということである。

【第764回】 沢山の衣服に包まれている

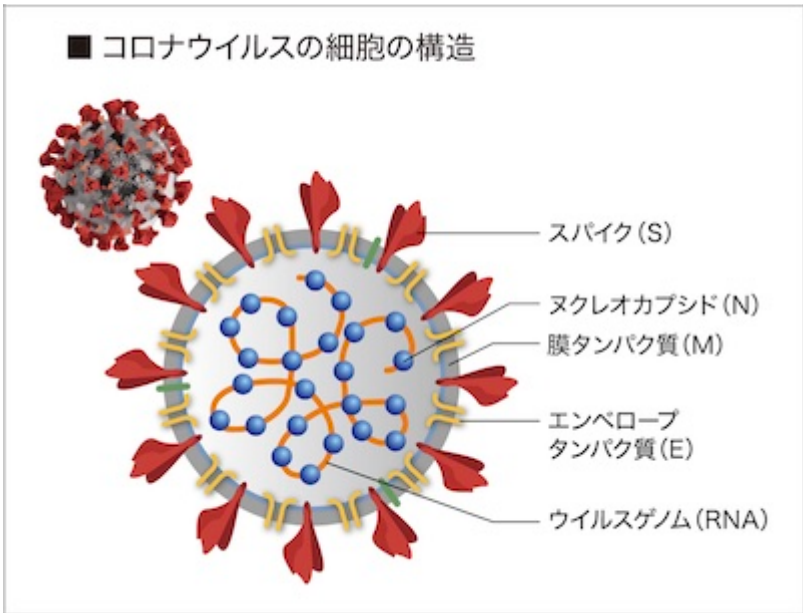
最近、大先生が言われた「気は自分の衣服であると感得する」が多少実感出来るようになると、気だけが自分の衣服ではなく、もっと沢山の衣服に包まれている事が分かってきた。
先ず、己の心・魂を包み守ってくれているのが肉体の衣服である。「肉体すなわち魄がなければ魂が座らぬ」と大先生は言われている。また、「自分の身の内、すなわち魂のことである」とも云われ、魂は身体の衣服にあることになる。
肉体でも、骨は肉の衣服をつけているし、肉は皮膚の衣服をつけている。肉体は皮膚に包まれている。

これらの衣服をつけた肉体は、上記の気を衣服としている。
更に気をまとった肉体は空気という衣服に包まれることになる。これを大先生は、「自然に空気に自分の身が接触して、天地自然の衣服を与えられている理を感じられる。（武産合気　Ｐ．９６）」と云われる。
それでは身を包む空気を包む衣服はないかというとある。それは大気圏外の真空である。真空が大気圏の空気、そしてその下にあるものを包み込んでいるのである。

このように沢山の衣服に人間は包まれているわけだが、衣服に包まれているのは人間だけではない。動物も植物も鉱物も同じように包まれている。水にいる魚は、空

気の衣服の代わりに水を衣服としている。中には空気と水を身に付ける贅沢な両生類もいる。

ミクロの世界での衣服を見てみると、すべての生物の細胞は表面が膜の衣服で包まれている。最近、暴れ回っているコロナウィルスも膜の衣服をまとっている。



生物だけでなく、無生物と言われるものも、万有万物は皆同じように衣服に包まれているし、また、ほぼ同じ衣服に包まれているのである。
この意味から、大先生が教えておられるように、人々はみな家族であり、万有万物も家族であり、他人というものはなく、それ故、みんな仲良くしなければならないわけである。宇宙はそのように万有万物を創られたということであり、それが宇宙の愛であろう。

【第765回】 古い衣服を脱ぐ

合気道は技と体を練って精進していくわけだが、精進・上達していくために技や体をどのように練ればいいのかということになる。
これまでは技と体を宇宙の法則に則ってつかっていくことがそれらを練る事であり、そしてそれが精進・上達であるとしてきた。
しかし、この事は正しいが、どうも更に大事な何かがあるようなことが分かった。
これまでの精進を土台にして、その上に何かを載せなければならないということで

ある。

大先生は、「合気道は、周知のごとく年ごとに、ことごとく技が変わっていくのが本義である」とか、「合気は日々、新しく天の運化とともに古き衣を脱ぎかえ、成長達成向上を続け、研修している」と教えておられるのである。
つまり、技は変わらなければならないということである。勿論、技そのものは宇宙の営みを形にした宇宙の法則であるから、時代や場所によって変わることはない。技が変わって行かなければならないのは、己がつかう技と言う意味である。つかう技は、年ごとはいうまでもなく、日々変わって行かなければならないという事である。質と量が変わらなければならないという事である。己のつかう技の数を増やし、技の深みを出すようにしていくことである。

もう一つの意味は、技が変わって行くためにも、身に付けている古いモノ（衣）を脱いで、新しいモノに変えなければならないということである。この古いモノ（衣）とは、間違ったり不完全な技、考え、思い込み等であろう。

大先生は、そのためにどうすればいいのかを、具体的な例で次の様に教えられておられる。
「昔は鳥船の行事とか、あるいは振魂の行事、いままでの鳥船や振魂の行ではいけないのです。日に新しく日に新しく進んで向上していかなければなりません。それを一日一日新しく、突き進んで研究を、施しているのが合気道です。」
我々も準備運動などでやっている鳥舟と振魂も、先人から教わったままやっては駄目で、一日一日新しく、突き進んでいかなければならないということである。
それでは実際どうすればいいかというと、鳥舟・振魂の基本を先人から教わり、それが出来るようになったら、今度は新しく進んでいくのである。重心の移動、腰の返し、手先・指先に気と力を入れる、手先と腰腹を結ぶ、エイサ、エイホの掛け声の出し方、半身・横向き・一重身での鳥舟等、やることは無限にあるものだ。勿論、崩してはいけないモノや規則もあるが、他は自由にできるはずであり、先人も許してくれるだろうし、喜んでくれると思う。

鳥舟・振魂のように、己のつかう技を一日一日新しく、突き進んで研究していかな

ければならない。同じことをただ繰り返していても上達はないということである。やるべきことは無限にある。一つを身に付けたら次に挑戦していくのである。そのためには古い衣服を脱いでいかなければならない。

【第766回】 布斗麻邇（ふとまに）の御霊

これまで合気道を技と体を練って精進してきた。宇宙の営みを形にした法則に合し○△□で、また、天地の呼吸イクムスビや阿吽の呼吸に合わせ、技と体をつかってきたわけである。
お陰で大分魄の力に頼らずに、気をつかって技をつかえるようになってきたところである。
しかし、まだまだ魂の次元の入り口の前に来たところで、魂の次元に入るにはどうすればいいのかを迷っている状況にあるところである。

有難いことに、そのためになるであろう新たな教えに巡り合った。それは新聞広告で紹介されていた本である。それは偶然に目にとまり、即購入したものである。タイトルだけで欲しいと思っただけで、内容など分かっていなかったが、むしょうに欲しかったのである。そして、読んでいる内に、合気道のこれからの精進に必要不可欠な教えが書いてあるので大いに喜び驚いた次第である。

その本は「言霊と日本語」（今野真二著、ちくま新書）である。
この中で江戸時代中期以降において多くの国学者たちがコトダマの思索をしたきたわけだが、その中の一人である山口志道（１７６５－１８４３）のコトダマ観を紹介している。彼は、日本には、無文字時代があったわけだが、無文字時代にも日本語はあったのだから、その時の日本語は音声がすべてであったとある。更に山口志道の家に「布斗麻邇の御霊」（図）と呼ばれる文章があったという。そして「古今のことば」を集め、『古事記』神代巻に照らして３０年余りの研究結果、「布斗麻邇の御霊」は、「水火の御伝」で、「形仮名は神の御名こと」が現われたものであることを悟ったという。



上図の左枠内「布斗麻邇の御霊」の縦に並んだ７つの図像の意味は次の通りであるという。上から順に、
①「天之御中主神御霊」　②「高御産巣日神」と「神産巣日神」との両神合体の御霊　③「伊邪那岐神の御霊」　④「伊邪那美神の御霊」　⑤「伊予の二名の島」　⑥「筑紫島」　⑦「大八島国」

そして更に、この「布斗麻邇の御霊」の一番上に描かれている「天之御中主神御霊」の図像は、後に、出口王仁三郎によって、宇宙の真神「主（ス）神」の象徴図形とされ、大本教の重要なシンボルになっていくという。
合気道の開祖植芝盛平先生は、一時期、大本教の出口王仁三郎に師事していたので、この山口志道のコトダマ観や宇宙観の影響を大いに受けたということになるだろう。そして合気道での宇宙観、○□や言霊、「天之御中主神御霊」「高御産巣日神」「神産巣日神」「伊邪那岐神の御霊」「伊邪那美神の御霊」などの神様が出てくるのかが分かったわけである。

最後に、前述の次の次元に入る道がこれで示されるわけであるが、この『言霊と日本語』と山口志道の「布斗麻邇の御霊」との偶然の出会いと、実はもう一つの出会いが加わったのである。
それは『合気神髄』の次の文章との出会いである。
「合気は天の浮橋に立たされて、布斗麻邇（ふとまに）の御霊、この姿を現すのであります。これをことごとく技にあらわさなければならないのであります。これはイザナギ、イザナミの大神、成りあわざるものと成りあまれるものと・・・。　自

分の中心を知らなければなりません。自分の中心、大虚空の中心、中心は虚空にあるのであり、自分で書いていき、丸を描く。丸はすべてのものを生み出す力をもっています。全部は丸によって生み出てくるのであります。きりっと回るからできるのです。武術は魂さえ、しっかりしていればいくらでもでき、相手をみるのではない。みるから負けるのであります。何時でも円を描きだし、ものを生みだしていかなえればならないのです。（「合気神髄 P153,154」）

これで現わした技こそ、魄の次元から脱する事が出来ると思うが、文章量が多くなりすぎるので次回にする。

参考文献　　「言霊と日本語」今野真二著　ちくま新書

【第767回】 布斗麻邇（ふとまに）の御霊　続

前回の「第７６６回　布斗麻邇（ふとまに）の御霊」に引き続き、この布斗麻邇を具体的にどのように技につかえばいいのかを記すことにする。これで現わした技こそ、魄の次元から脱する事が出来ると思うしだいである。

具体的にここからどのように技を生み出していくかというと、前回示した「布斗麻邇の御霊」と大先生の布斗麻邇の御霊の教えを照合しながら技にするのである。
「布斗麻邇の御霊」の順に、大先生の教えを重ね合わせて技をつくり、姿を現していくわけである。
分かり易いように、その両方を再度ここに掲載する。



「**布斗麻邇の御霊**」

1. 「天之御中主神御霊」
2. 「高御産巣日神」と「神産巣日神」との両神合体の御霊
3. 「伊邪那岐神の御霊」
4. 「伊邪那美神の御霊」
5. 「伊予の二名の島」
6. 「筑紫島」
7. 「大八島国」

大先生の「布斗麻邇の御霊」の教え

「合気は天の浮橋に立たされて、布斗麻邇（ふとまに）の御霊、この姿を現すのであります。これをことごとく技にあらわさなければならないのであります。これはイザナギ、イザナミの大神、成りあわざるものと成りあまれるものと・・・。　自分の中心を知らなければなりません。自分の中心、大虚空の中心、中心は虚空にあるのであり、自分で書いていき、丸を描く。丸はすべてのものを生み出す力をもっています。全部は丸によって生み出てくるのであります。きりっと回るからできるのです。武術は魂さえ、しっかりしていればいくらでもでき、相手をみるのではない。みるから負けるのであります。何時でも円を描きだし、ものを生みだしていかなければならないのです。（神髄 P153,154）」

先ずここで大先生が布斗麻邇（ふとまに）をどのように謂われているかというと、「合気は天の浮橋に立たされて、布斗麻邇（ふとまに）の御霊、この姿を現すのであります」と、技で布斗麻邇（ふとまに）の御霊の姿をあらわさなければならないと言われている。

更に、大先生は『合気神髄』『武産合気』で、布斗麻邇とは、
〇気体と気体と正しく打ち揃った美しい様を布斗麻邇という。
〇布斗麻邇とは気の動きでいうと「う」ということだまの御働きによる。だから「う」のことだまの御働きを神習わなければいけない。
と謂われているから、これも念頭におかなければならない。

「布斗麻邇の御霊」の最初は⊙である。「天之御中主神御霊」である。先ず、技をつかう際は天之御中主神になるということである。これを大先生はここで、「自分の中心を知らなければなりません。自分の中心、大虚空の中心、中心は虚空にあるのであり、自分で書いていき、丸を描く。丸はすべてのものを生み出す力をもっています。全部は丸によって生み出てくるのであります。」と教えておられる。何もない大虚空や自分に中心（丶）を作るのである。腹をぎゅっと締めると出来る。そして締めた腹を緩めるとお腹、そして体中に気が満ちてきて体はどんどん丸くなる。それが⊙である。従って立体的な丸であって、平面的は円ではない。

⊙が膨らんでいくと、両足が地を圧するようになる。そして気が回り出す。それが◎である。これを大先生はここで「自分で書いていき、丸を描く。丸はすべてのものを生み出す力をもっています。全部は丸によって生み出てくるのであります。きりっと回るからできるのです。」と言われているのだろうと思う。

⊖◑⊕である。「伊邪那岐神の御霊」「伊邪那美神の御霊」「伊予の二名の島」である。
正面打ち一教で説明する。半身で立っているので、腹は乾、前足は北、前肩は東北を向くことになる。
◎から、半身で乾（西北）にある腹と手を北の正面に返す、これが⊖で、次に手を手先の方に伸ばす。これが◑であると考える。そして伸ばし切った処で、縦に伸ばしてある手先、腕、腰腹を横に拡げると他方の手先、腕、腰腹は伸び両手で玉を抱くような感じになる。これが⊕である。これを大先生は、「これはイザナギ、イザナミの大神、成りあわざるものと成りあまれるものと・・・。」と言われておられるはずである。

更に、その横に拡がった横の動きに合わせて、息を吐きながらつかう手と体の形が「筑紫島」となり、そして最後に地に着けて抑える姿が「大八島国」である。この「大八島国」を山口志道は、「天地人、容(かたち)成って、水火(いき)を為すの御霊を謂う」と言っている。つまり、天と地と人が一つになるということであると考える。
尚、「布斗麻邇の御霊」には、○と□がつかわれているが、○は息を引く・入れる、吸うで、□は息を吐くのである。従って、「天之御中主神御霊」から「伊予の二名の島」までは、息を引き続けなければならない事になる。但し、この息は気に代わらなければならないと思っている。

合気道の技はすべて、大先生が言われるこの「布斗麻邇（ふとまに）の御霊、この姿を技にあらわさなければならない」と確信した次第である。

参考文献　　「言霊と日本語」今野真二著　ちくま新書

【第768回】 赤玉　白玉

前回書いたように、布斗麻邇（ふとまに）の御霊からこれまで分からなかった事や新たに重要なことが分かってきた。しかし、更なる疑問も生まれてきた。その一つが赤玉と白玉である。縦横からの玉が生まれ出ることは分かったし、生み出すことが出来るようになったが、このが赤玉、白玉であるということが、①どういう事なのか、またどういうものなのか、②そしてどうすればその赤玉、白玉を創り出すことができるかという問題が出てきたわけである。今回はこの赤玉白玉の研究をしたいと思う。

赤玉白玉を大先生は、塩盈(しおみつるの)珠、塩涸(しおひるの)珠とも言われているが、ここでは赤玉白玉をつかう事にする。
先ずは、①赤玉白玉はどういう事なのか、またどういうものなのかである。

赤玉も白玉も完全な十字からつくり出される丸い球（玉、珠）である。合気道はこの玉をつくり出さないと技にならないはずである。魄の技を脱し、魂の技に入って行くためには必須であると考える。
但し、この赤玉白玉の玉は風船玉のような玉ではなく、“金剛不壊の珠“である。すべての合気道の技の形（一教とか四方投げ等）は勿論のこと、剣や杖でもこの“金剛不壊の珠“の赤玉白玉でやらなければ合気にならないはずである。

次に、②どうすればその赤玉、白玉を創り出すことができるかということである。
まず、赤玉である。赤玉白玉は決して白玉赤玉にはならない。赤玉が先で、その後が白玉にならなければならないからである。
赤玉をつくるには、体と息（気）を十字につかわなければならない。「上達の秘訣第７６６回　の上に収める」で書いたように、腹を横、そして腹と手を縦と┛に返すが、これではまだ完全な十字ではない。そこで、手先を伸ばし切った処で、縦に伸ばしてある手先、腕、腰腹を横に拡げる。これで手先と腹と前足と後ろ足の縦の線と腹と両肩と両手の横の線で完全な十字の╋になる。すると他方の手先、腕、腰腹も十字になり、これで丸い玉が出てくる。両手で玉を抱くような感じになる。この丸い玉がである。
尚、息はここまで引く息であるが、阿吽の呼吸であり、腹中が広がり、息と気が腹中満たされる。塩が盈つる感覚、そして“金剛不壊の珠“を持つ気持ちになる。これが赤玉である。

赤玉を持ったところから、更に阿吽の呼吸で息を引いていくと、後ろ側にあった手と足と腰が更に返り腹が締まってくる。この時につくられる玉が白玉である。この玉も“金剛不壊の珠“である。
赤玉白玉というのは、赤玉をつくったら、それを白玉に変えるということであると思う。赤玉をしっかり作らないと白玉もできないのである。
また、重要なのは、赤玉も白玉も阿吽の呼吸でやらなければならないことである。

諸手呼吸法などは、この赤玉白玉をつかわなければ、強く掴まれた場合は制するのが難しいはずである。
この赤玉白玉が技の形を徒手でつかえるようになれば、剣でつかえばいい。大先生

の剣は、俊敏で強力、そして美しかったが、この“金剛不壊の珠“の赤玉白玉を駆使されていたからだと拝察する。

【第769回】 魂の比礼振りと六根

「魂の比礼振りは、あらゆる技を生み出す中心である。」そして「我々の造化器官は身魂を通じて複雑微妙なる働きを示して武を顕すが、絶えずこの身魂、すなわち六根を清浄することが必要であり、いつでも魂の比礼振りを起こさす状態に自分をおくべきである。」と大先生は教えておられる。
つまり、武を顕し、技を生み出すのは魂の比礼振りであり、そしてこの魂の比礼振りを起こす状態をつくるのが清浄な六根であるということである。
六根とは、六つの器官の眼(げん)・耳(に)・鼻・舌・身（触覚）・意（意識）である。この六根を清浄にしておくのである。穢れを取り除き、穢れのない六根にしておくということである。
このために仏教では六根清浄、合気道では“禊ぎ”となるのである。

六根を清浄にするためにはどうすればいいのかということになる。
簡単に言ってしまえば、六根が喜ぶようにすることだと思う。敏感に感じ、反応するよう禊ぎ、磨くのである。
そのためには六根を清浄にしなければならない。その為にやること、やれることは沢山あるようだ。
例えば、一般的に云われている、目や耳を洗い、口（舌）を漱ぎ、祈りや水を被るなどして身と心を浄めればいい。
更に、目を清浄にする、目を禊ぐために、清く美しいモノを目にし、清く美しいモノを描いたり、つくるように心がけることである。例えば、絵であり、陶芸、美術品、自然（海山川）等である。耳を禊ぐためには、いい音楽を聞いたり、自然の声や子供たちの声を楽しんだり、また、歌ったり、音を奏でたりすればいいだろう。
また、六根の禊ぎに最適なのが祝詞と思うが、祝詞が古代から消えずに残っているのはこの耳や口（舌、喉）の禊ぎという、人としての必要性を無意識にもっている本能にあるからではないかと考える。

「魂の比礼振りを起こすためには六根を清浄にしなければならない」と大先生はいわれているが、大先生は「我々は六根ばかり頼ってはいけない」とも、次の様に言われているのである。「我々は六根ばかり頼ってはいけない。仏教では六根清浄などというが、六根というものは、この顕界において、この明るい世界を眺めるために肉体にそなえたものである。」
つまり、六根は目に見える顕界のために備わったものであるというのである。ということは、目に見えない世界では、六根ではない何かがあるということになる。
それを大先生は「心を磨いて、本当に六根の働きをば融通の変えやすいように、つまりいう魂の道を明らかにしておいたらよい。そうすると六根は光となって、表にあらわれてくる。六根が光を放ってくるというと、やることがみな魂の比礼振りということになってくる。己が物を生みだすようになる。」と言われている。要は、心を磨くことだと教えておられるのである。更なる修業である。

だが、そうだからといって六根は大事ではないと、お先生は言われてはいない。大先生は、「しかし物質の世界をみるにつけても、やはり六根の道をきれいに掃除しておかなければならない。」（合気神髄P.44）と言われているのである。
先ずは、六根を禊し、磨かなければならないのである。魂の比礼振りが生まれるためには必須という事である。

【第770回】 △○□

合気道は目に見えるものだけを追っていてもいずれ行きづまってしまう。目に見える稽古をある程度積んだら、今度は目に見えない次元での稽古に入らなければならない。しかし、これはよほどの指導者につくか、または自己努力をしないと難しいものである。今度は己の心と体の心の声を聞き、従うことになるからである。つまり、技や体づかいの良し悪しは、形（かたち）ではなく、心の心や体の心が判断し、こうやれ、ああやれと助言し、改善してくれるのである。この心の心や体の心の判断や助言や改善は何に基づくかというと“宇宙の営み”“宇宙の法則”である。これは言うなれば、絶対的な基準である。

合気道をつくられた植芝盛平開祖は、この見えない“宇宙の営み”“宇宙の法則”を我々稽古人に教えるために、どれだけご苦心されたのか、今になってようやくわかってきた。我々凡人にはとても出来そうにない事である。しかしながら、大先生の教えを理解し、身につけ、それを後進達に引き継ぐようにしなければならないと考えている。

さて、本題に戻る。
「合気道の極意は、己れの邪気をはらい、己れを宇宙の動きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある。」また、「合気道は、大自然の絶対愛を基として、体を△に象り（かたどり）、○を中心に、気により△□の変化と気結び、生産びを身体に現わし、生み出しつつ気魂力を養成し、皆空の心と体を造り出す精妙なる道である」と教えておられる。
これは宇宙の営みは△○□であり、この営みに調和させて己の動き、つまり、技も体もつかわなければならないということである。

これまでも△○□で技と体をつかってきた。△で入身して、手は腰腹で円を描くように○くつかい、息を吐いて四角く収めるである。
しかし、これは△○□の導入部であり、次の△○□があることが判明した。
まず、△○□の順序である。大先生は常に△○□の順序を△、○、□とされていることである。□、△、○などはないということである。△○□の順序がこうでなければならない事は、これで技をつかう事が出来るようになるのだと納得できる。

△からはじまるが、△とは上記の説明にあるよう、体三面に開く半身の三角体であり、△で相手に切り込むことである。△は霊的には“奇霊、荒霊”であり、物質的には“天・火”である。強力なエネルギーで入身できるのである。

○はこれまでの○とは違う。以前の平面の円ではなく、立体的な丸の○である。合気道の技はこの丸の円、十字からなる⊕をつくことになる。例えば、腕を横や上に上げたら、指先方向の縦に気と力を出し、引き続き息を出しながら手先を横に拡げ、更に手先を縦の上下に拡げると手が十字に働き⊕となる。この後引き続き息を

引けば□、⊞となる。
因みに、○は、霊的には“和霊”、物質的には“水”である。△○□で技と体と息をつかっているとそれを感じる。
これが△○□の○である。

□は、○では息を吐いているが、息を吐き切ると自然と息が入ってくる。返ったところから□になり、これで技を収める。因みに、□は、霊的には“幸霊”、物質的には“地”である。

△○□で技がつかえるようになると、宇宙の営みも△○□であることが感得できるようになるようだ。

【第771回】 フトマニ古事記　その１

これまでも書いてきたが、合気は「古事記の営みの実行で神習っていかなければなりません」「古典の古事記の実行」「天の浮橋に立たされて、布斗麻邇の御霊、この姿を現すのであります。これをことごとく技に現わさなければならないのです」であると、大先生は教えておられる。古事記の営みの実行で技をつかわなければならないということになる。
「古事記の宇宙の経綸の御教えに、神習いまして日々、練磨していくこと」なので、古事記には宇宙の経綸の教えが書かれているので、その教えに習っていくのである。
古事記は古事記神代巻である。

しかし、古事記神代巻だけでは“古事記の営み”や“宇宙の経綸の御教え”を理解し、身に付けるのは難しいと思う。この古事記の営みが分かるためにはフトマニでやらなければならないのである。これを大先生はフトマニ古事記と言われていると考える。大先生は、「フトマニ古事記によって、技を生み出していかなければなりません」と教えておられるのである。
それを具体的に、また、分かり易く、次の様に教えておられる。

「合気は天の浮橋に立たされて、布斗麻邇（ふとまに）の御霊、この姿を現すのであります。これをことごとく技にあらわさなければならないのであります。これはイザナギ、イザナミの大神、成りあわざるものと成りあまれるものと・・・。　自分の中心を知らなければなりません。自分の中心、大虚空の中心、中心は虚空にあるのであり、自分で書いていき、丸を描く。丸はすべてのものを生み出す力をもっています。全部は丸によって生み出てくるのであります。きりっと回るからできるのです」

しかしながら、これでもまだ難しく、まだまだ不明な点がある。
一つは、古事記と布斗麻邇（ふとまに）との関係。別物であるのに何故一緒になるのか？
二つ目は、何故、合気道の植芝盛平開祖がフトマニ古事記を合気に取り入れたのか。その経緯は？
三つ目は、フトマニ（布斗麻邇御霊）の中身の解釈
等である。
これらの事項が明らかになれば、合気の真の技、武産合気の技を生み出すことが出来るようになると考えている。時間とスペースを取りそうだが、一つずつ研究していくことにする。

一つ目は、「古事記と布斗麻邇（ふとまに）との関係。別物であるのに何故一緒になるのか？」である。
そこで古事記と布斗麻邇の出会いについて簡単に記す。

「言霊学」研究者・国学者山口志道（1765年～1842）は国学者荷田春満（かだのあずままろ）の流れを汲む荷田訓之（かだののりゆき）に学び、伝授された「**稲荷古伝**」が手がかりとなり、山口家に伝わる神宝「**布斗麻邇御霊**」を**古事記神代巻**に照らしてみると、これが天地の水火(いき)の教えであることを悟ったのである。
これが古事記と布斗麻邇の出会いである。
志道は、これに基づいて、自身の「言霊学」を構築し、丹波亀山で、「水穂伝」（1834）を著したのである。

二つ目の「何故、合気道の植芝盛平開祖がフトマニ古事記を合気に取り入れたのか。その経緯は？」である。

植芝盛平翁は、一時、大本教におられ、出口王仁三郎から言霊の教えを受けた。その教えの基が『大本言霊学』であると思う。この書に出口王仁三郎は、霊学真理を先師本田九郎親徳(1822？1889)に授けてもらったとある。本田は神道霊学中興の祖と言われ、鎮魂帰神を中核とする本田霊学を日本に確立した。出口王仁三郎は本田から「稲荷古伝」「水穂伝」「布斗麻邇御霊」を教わり、大本教の言霊の教えとしたと考える。
『大本言霊学』を読んでみると、山口志道の「水穂伝」とほぼ同じであるのである。つまり、大本教で教えていた言霊学は山口志道の「水穂伝」ということになる。
そして合気道植芝盛平開祖がこれを学び、フトマニ古事記として合気道に取り入れていったということになるわけである。従って、我々合気道家は『大　本言霊学』でも「水穂伝」のどちらを勉強してもいいことになるだろう。

三つ目の、フトマニ（布斗麻邇御霊）の解釈であるが、次回から、『大本言霊学』の布斗麻通御霊を研究してみたいと思う。

参考文献
『大本言霊学』出口王仁三郎著　八幡書店
『言霊秘書』大宮司朗監修　八幡書店

【第772回】 フトマニ古事記　その２

前回述べたように、今回からは『大本言霊学』から、布斗麻邇御霊（フトマニノミタマ）を研究してみることにする。この布斗麻邇御霊は山口志道の布斗麻邇御霊とほぼ同じである。



布斗麻邇御霊は７つの図像からなり、これで宇宙の創造、天地の生成、人の形成を顕すと言われる。更に、万有万物の産みだしと完成はこの布斗麻邇御霊に則ることになるから、合気道の技もこの布斗麻邇御霊に合してつかわなければならない事になるのである。大先生は、いつも合気道は宇宙の営みにしたがわなければならないし、宇宙の法則に則らなければならないと言われていたが、この布斗麻邇御霊こそがそれであると考える。それ故、この７つの図像は重要であり、大事な意味があるはずであるはずなので、一つ一つ研究していきたいと思う。が、難解なのではじめはさらっと表面的なものになるだろう。

今回は最初の⊙である。「天之御中主神御霊である。“此の形は布斗麻邇御霊より割別たる水火の形なり、是をもて天地の気を知ることを得”である。『大本言霊学』には、「古事記曰く天地初発之時於高天原成神御名天之御中主神云々」にある神である。この御霊の真中にある丶（シルシ）は天地未生の丶（キ）なり。・・・其の言義（ココロ）は天地の初虚空の正中に丶（シルシ）の気（イキ）と云御名にて則ち○（アメ）の正中の丶（シルシ）をなして其御形⊙是の如し則ち天之御中主の御霊なり」「萬物この御霊より発するなり」と、天之御中主神御霊を説明している。

これを合気道ではどのように教えておられるかというと、
「天もなく、その一番初めが「三千世界一度に開く梅の花」ということで世の発し兆しをいうのである。それでいちいち昔から世を組織するためには、大虚空をつくる。ちょうど、朝の曙みたいなものである。造り主の御姿が現れる折りに、本当に曙のように大太陽がそこに現れる。」（合気神髄　p.134）
となる。

これを合気道の技をつかうに際して、どのように考え、つかえばいいかということになるだろう。合気道では物事を技に現わすことが出来てこそ、それが分かったということになるからである。
私の解釈と技づかいは次の通りである。

- 天地の初までは、天もなく、大虚空であったから、稽古で技をつかう等など稽古の事や技のこと等何も考えていない虚空状態ということになる。
- そして合気の稽古をする、技をつかうという心の〇が生じ、その真ん中に「よし、やってやるぞ！」と丶（ポチ）が現われる。これが天之御中主神である。具体的には、腹を締めるのである。これが丶（ポチ）であり、それも感じられる。
- 「萬物この御霊より発するなり」とあるから、この天之御中主神の御霊が働いてくれるようにしなければならないことになる。

  実際には、締めた腹の丶（ポチ）の気が腹から拡がり天地と結ぶ。

  この気の広がりこそが、“朝の曙みたいなもの”であり、⊙を感得する。丶（ポチ）は〇の中心にあるポチであると同時に、天地を結び貫く芯でもあると感じる。この芯のしっかりした天之御中主神になると、次の横への返しが上手くいく。正面打ち一教、片手取り・諸手取呼吸法などでこれが分かり易い。

  大先生が杖や剣や扇子で神楽舞をされたが、その最初は天を突く動作であるが、それは⊙で天之御中主神になって天地を結ぶ動作であると考える。（写真）

これらの事を大先生は、次の様にも教えておられる。「自分の中心を知らなければなりません。自分の中心、大虚空の中心、中心は虚空にあるのであり、自分で描いていき、丸を描く。丸はすべてのものを生み出す力をもっています。全部は丸によって生み出てくるのであります。きりりっと回るからできるのです。---何時でも円を描きだし、ものを生みだしていかなければならないのです。」（合気神髄 p 154）

大先生は、「合気道は、自分が天之浮橋に立つ折は、天之御中主神になることである。」（武産合気P.101）と言われておられるのである。

確かに、技をつかう際に天之御中主神にならないと上手くいかないものである。後で分かってくるが、天之御中主神にならないと、次の高皇産霊神、神皇産霊神、そして伊佐那岐・伊佐那美神が働けないのである。つまり、体が布斗麻邇御霊で動

けないし、技にならないのである。何事も初めが肝心なのである。

【第773回】フトマニ古事記　その３　布斗麻邇御霊“高皇産霊神・神皇産霊神”

『大本言霊学』では、◎高皇産霊神

両神合躰の御霊

神皇産霊神

“父のヽヒ母の○ミゾに興クみ母の○ミゾ亦父のヽヒを搦む”がこの段の見出しである。

そしてこの両神の解説になる。部分的に抜粋、省略､補充している。
「この御霊は両神合体の御形なり、**タカムスヒの神**とは即ち玉搦タマカラムということなり。**カミムスヒの神**とは搦結の神火水ということにて、その言義は､火の○水に搦結へば○水亦､火を搦結ふと云ふ御名。其搦時に､火の御霊の動くを“宇麻志阿志訶備比古地の火水カミ（イキ）”と云う。,亦動き廻りて上に別れて昇るを“天常立の火水カミ（イキ）と云う。亦動き回りて下に降りるを”國の常立の火水カミ（イキ）“と云う。次に動くを”豊雲野の火水カミ（イキ）“、次に動くを”角杙の火水カミ（イキ）・　活杙の火水カミ（イキ）“、次に動くを”意富斗能地の火水カミ（イキ）　大斗能辨の火水カミ（イキ）“、次に動くを”淤母陀流の火水カミ（イキ）阿夜訶志古根の火水カミ（イキ）“と云う｡是の如く火水動き回り火水イキ興開きて搦々て竟ツイに鶏卵のごとく凝カタマリて五体の基をなす。此御霊◎の御形を以て知るべし。是までの一段は天地人の気の搦て天地をなし、水火搦て人をなす。万物搦こと皆一なり。」

この一段は、「天地人の気の搦て天地をなし、水火搦て人をなす。万物搦むこと皆一なり」が主旨であるという。

合気道では、タカムスヒの神、カミムスヒの神、(カ)水(ミ)（イキ）、宇麻志阿志訶備比古地を初め、これらの神々が出てくる。特に、國の常立の神と豊雲野の神が大

事なようである。『大本言霊学』のここでは搦結や搦という言が重要なようで、よくつかわれているが、合気道ではこの搦は使われない。この搦、搦結を合気道では“結ぶ”、また螺旋、十字と言っていると思う。

次に合気道での解釈である。合気道開祖の大先生は、タカムスヒの神・カミムスヒの神の御霊に関して次の様に言われている。
「“からだ”は五臓五体といって造り主に神習い、足は高御産巣日、神産巣日となって、つまり霊系の祖と体系の祖に神習い、三位一体である。気はちょうど、三角法になっている。」（合気神髄 P.146」
＜**要点**＞高御産巣日は霊系の祖、神産巣日は体系の祖であり、天之御中主の神と三位一体で、気は三角法になっているという事。日は霊と同じ。
これが『大本言霊学』にある“鶏卵のごとく凝カタマリて五体の基”であると考える。

「宇宙の動きは、高御産巣日神、神産巣日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の行為により日月星辰の現われがここにまた存し、宇宙全部の生命は整って来る。そしてすべての緩急が現われているのです。」
＜**要点**＞高御産巣日神は右に舞い昇り、神産巣日神は左に舞い降り、両神は舞昇りと舞降るの摩擦作用行為をし、万有万物を生み出し、緩急を現わす。
これが円になりとなると考える。
御中主神だけでは円はできない。高御産巣日神と神産巣日神が働いてくれて初めて円になるのである。また、御中主神がしっかり働いてくれないと高御産巣日神と神産巣日神、そしてその後の伊邪那岐、伊邪那美も働けないのである。

過って大先生は、たまに道場でご自身が御中主神になり、高御産巣日神、神産巣日神と三位一体となり、神楽舞を見せて下さった。特に、を杖や扇子で天を突き回し、高御産巣日神、神産巣日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用を見せて下さった姿を覚えている。

次に、この高皇産霊神・ 神皇産霊神の両神合躰の御霊を合気道の技でどのようにつかえばいいかという事になる。

先ず、己が御中主神になったら、高御産巣日神、神産巣日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の気を生み出し、天と地と己を結ぶ。そして、立つ所に天盤、地盤のふみをもって霊系の祖と体系の祖を左の足に、ずっとそこの国まで突き戻して、常立の姿に宇宙一杯に気の姿を拡げるのである。

そして、この高御産巣日・神産巣日神の天（上）と地（下）の気の縦の流れが伊佐那岐・伊佐那美神は横への気の流れと結び、この二つが相まってラセン状に舞い上がり、舞い下がる合気道の気の結びが生じ、十字になる。と次回に続く。

参考文献　『大本言霊学』出口王仁三郎著　八幡書店
『言霊秘書』大宮司朗監修　八幡書店

【第774回】フトマニ古事記　その４　伊邪那岐の御霊、伊邪那美の御霊

㊀　，胞衣火エナの内に動て一火の形を作す

伊邪那岐の御霊 ㊁　**○水胞衣の内に動て?水の形を作す**

伊邪那美の御霊 故ニ柱神立天浮橋而 指下其沼矛以畫者 塩許袁呂許袁呂邇画鳴而 引上時 自其矛末垂落塩累積成島 是淤能碁呂島。
（読み：フタハシラノカミ　アメノウキハシニタタナシテ　ソノヌボコヲサシオロシ　モッテカキタマエバ　シホコヲロコヲロ二カキナシテ　ヒキアゲノトキ ソノホコサキヨリ　シタタルシオツモリテシマトナル　コレオノコロシマナリ）

この段は、伊邪那岐と伊邪那美の二柱の神が天浮橋立つから始まるが、天浮橋を次の様に定義している。
「天浮橋といふ言義は、アは自と云ふことなり、メは回ることなり。ウキはウキ・クと活用ハタラキ　ハシはハシ・スと活用詞にて、ウは水にして竪をなし即ち㊁なり。ハは火にして横をなす。　即ち㊀なり　水火イキ自に回り浮発ウキハシて竪横をなすを天浮橋といふなり」

これを『合気神髄』は次の様に説明し、これが神業になるとしている。
「天の浮橋に立たされて、「ア」は自ずから「メ」は巡る。浮橋の「ウ」は空水にして縦となす。橋の「ハ」は横となす。水火結んで縦横となす、縦横の神業。自然に起きる神技。」（合気神髄 P.151）

ここから分かることは、一つは布斗麻邇御霊と古事記と密接な関係があること、二つ目は合気道の植芝盛平開祖はこの大本教の教えを学び、合気道に取り入れておられたということである。
但し、『大本言霊学』は言霊学であり、宗教的に山口志道の布斗麻邇御霊を解釈し、使用していたのに対し、合気道はこれを真の武道、神業、神技を生み出すために重視しているはずだということである。

例えば、合気道ではそのために伊佐那岐・伊佐那美神に働いてもらわなければならないとしている。
「高御産巣日・神産巣日神の天（上）と地（下）の気の流れが伊佐那岐・伊佐那美神は左から右への気の流れと結び、この二つがあいまってラセン状に舞い上がり、舞い下がる合気道の気の結びが生じ、十字になる」。
これは高御産巣日・神産巣日神の縦の気の流れと伊佐那岐・伊佐那美神の横の気の流れが相まって舞い上がり、舞い下がる十字になり、これが神業に結びつくということであろう。
これから技で試して確認していこうと思っている。

伊佐那岐・伊佐那美神について武道的に大事な事を忘れていたのでここに記す。
それは布斗麻邇御霊の図像で㊀伊佐那岐神が先で、㊁伊佐那美神が後になっていることである。これは体や技をつかう際に、まず横、次に縦とつかわなければならないという事である。例えば、開脚での柔軟体操の場合、先に体を縦に倒すのではなく、腰を横に開くようにし、それから前に倒すのである。技も同じである。これが布斗麻邇御霊に合した、宇宙の法則ということになるわけである。

【第775回】 フトマニ古事記　その５　謂伊豫の二名島

出る息の正中に位して昇る御霊

⊕　伊豫の二名島

「この御霊は伊邪那岐神の丶火と伊邪那美神の|水と興合玉（くみあいたま）ふ御形にして、五十連の息に調に従て形も調べあり、此御霊━|火水興合なるを見て知るべし。息胞えな衣の内に興合て母体を出むとして吹義なり。人は十月にわたりて息胞衣の内に満々て自ら吹切って出るなり。水火イキは水火シホなり。故に水火シホ満つ時水火イキ生なり。其時胞衣の破る丶を淡道穂狭別島を生と云ふ。其胞衣を出て息を吹出すを伊豫二名島を生と云う。
此島身一而有面四毎面有名といふは、此靈の御像みかたち一にして、⊕　是の如く舫もやいひて四つの形をなすと云う傳なり。是を伊豫土佐粟讃岐の國を借て名とする。息出る時は四ッの形をなすと云ふ傳なり。」

前段では、伊邪那岐神は胞衣の内に一火の形を作り、伊邪那美神は胞衣の内に|水の形を作り、誘い双で天の浮橋ができる、とあった。この段はこれに続くのである。
胞衣とは、胎盤のことである。
ここで興味深いのは、宇宙規模の話に胞衣が出てくることであり、女性の胎盤の胞衣で宇宙の営みを説明していることである。

合気道ではこの段の教えを次の様に云っている。

＜十字に関して＞

- 「合気道は魂の学びであります。ちょうど丸に十を書いて三角が四つ寄っております。これは魂が剣と槍とになっています。」
- 「天地火水」十字の交流。天火水地の十字の交流によって生みだされる言霊の響きによって宇宙万物が生成されたのであり、それに習うことが合気の道なのである。」等

＜天の浮橋に関して＞

- 「天の浮橋は、丁度魂魄の正しく整った上に立った姿です。これが十字です。

これを霊の世界と実在の世界の両方面にも一つにならなければいけない。」

- 「ウ」は浮にして縦をなし、「ハ」は橋にして横にして横をなし、二つ結んで十字、ウキハシで縦横をなす。その浮橋にたたなして合気を産み出す。これを武産合気といいます。」
- 「合気は天の浮橋に立たされて、布斗麻邇（ふとまに）の御霊、この姿を現すのであります。これをことごとく技にあらわさなければならないので　あります。これはイザナギ、イザナミの大神、成りあわざるものと成りあまれるものと・・・。」等

次に⊕の○についてである。「布斗麻邇御霊」の７つの図像は○と□に分けることが出来る。初めの5つが○、残りの2つが□である。
○は吐く息で水であるという。合気道も同じであるが、○を、△○□、イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビの中でも捉えられている。また霊的に見て、△奇霊、荒霊　○和霊　□幸霊とし、物質的に見て、△天・火　○水　□地とする。
従って、初めから5つの図形では吐く息になる。
さて、⊕である。○に十である。○は息を吐くわけだが、十がどうなるかということになる。
十の―は火であり、|は水であるから、この火の引く息と水の吐く息をつかわなければならないことになる。つまり、息を水で○く吐きながら、お腹（胞衣）で―に息を引き（火）、そして|で息を吐く（水）と二重の息づかいになるわけである。
この息づかいで、伊豫の二名島を感じる事ができるようである。

【第776回】フトマニ古事記　その６　謂筑紫島

入る息の外を搦みて降る御霊

⊞　謂筑紫島

「次に生むを筑紫島という。この島亦身一つの面四有。筑紫国、豊国、肥国、日向国という。舫てこれ由如し。四の形をなすの義なり。
息引く時は此の四の形をなすと云う傳なり。出る息は水にして○なり。引く息は火

にして□なり。産るる時出る息は胞衣を吹き割りて吹く息をもて生きるあり。ナニヌネノの㊥(𠀋)、ラリルレロの⊞の中に収まることは口伝に曰う可し。秘するにあらず。幽玄微妙にして筆紙に盡し難きを以ってなり」とある。⊞は四つの面のある島であるというが、それ以上の事は“筆紙に盡し難し”と云っている。

さて、合気道である。合気道では⊞を次の様に教えている。

- 「一霊の中心に対して霊魂を作り、その霊に又四つの働きをもたらしている。各々四つはまた四つの働きをもっている。それを一霊四魂といっている。」（武産合気P.110）
- 「精神的にいえば四魂（奇霊、荒霊、和霊、幸霊）の行にして、物質的には、天下水地の四大活動造営なのである」（武産合気P.79）

つまり、四つの國、四つの形は、精神的には、一霊四魂三元八力の四魂であり、物質的には、天下水地としているのである。

⊞を一つの島の四つの國とするものから、一霊からの四つの働きの魂、また天下水地とされたことは驚異である。これでは“幽玄微妙にして筆紙に盡し難き”とあるのも理解できるというものである。
後はこれを技にどのように活用されなければならないかという事になる。この教えで技をつかってみることにする。

【第777回】フトマニ古事記　その７　謂大八島

天地人容かたち成て水火いきを為す御霊

⊠　謂大八島國

「次に生まれたのが伊伎島いきのしま、亦の名を天比登都柱あめのひとつはしらと謂う。次に生まれるのが津島、亦の名を天之狭手依比賣あめのさてよりひめと謂う。次に生まれるのが佐渡島。亦の名を・・・・（不明）。次が大倭豊秋津島おおやまととよあきつしま、亦の名を天御虚空豊秋津根別あめのみそらとよあきつねわ

けと謂う。故に、此の八島を大八島國という。
此の御霊は出息の御（タマ）と入息の御（タマ）とくみて呼吸をなす。其のくみたる形是の如し。即ち大八島なり。布斗麻邇御の御霊より発ひらけて天地日月いきを現わし、人生まれて呼吸をなすの傳なり。故に此御霊は則ち天地なり人なり。一天四海形をなすも此の像を洩るることなし。」

この条が布斗麻邇御の御霊の最後で、何もない宇宙から天の御中主神、その後いろいろな神が生まれ、そして最後に天地と人の容を成し、天地は日月いきを現わし、人も呼吸をなすとある。
また、とでをつくる。これを八つの島から成る大八島國というとある。

これを合気道ではどのように解釈し、技につかわれているかを見てみる。
大先生は、

- 「言霊の動きはすべての仕組みを作り、その仕組みを作るについては奇しきなる部分は奇霊の働きとなり、荒き部分は荒霊となり、柔和なるものは　和霊となる。そして個体にだんだん動かなくなり、冷結し大地になって動かなくなる。いぬるが如くのろくなる、これを幸霊というのです。
  四つの霊によって**八つの力**が出てきます。**八つの引力**がますます濃厚に生み出され、全宇宙の生命を明示しているのです。」
- 「この三元**八力**が固体の世界を造り、人類社会もそれによって完成されてゆくのである。」
- 「この三元**八力**の引力によって、大地を全部固めしめて、一つの大きな全大宇宙という活動機関が出来上がった。」（注：動、静、解、疑、強、弱、合、分（開祖の言霊））」
- 「合気は本を忘れ、本をはなれてゆこうとする人を悲しむ。本を忘れるということは、罪を構成するの始まりである。その本とは、スの大神様である。この世の一霊四魂三元八力を出された、その八力のもとに立たされた大御親たる、一番根源の大神様である。」

つまり、『大本言霊学』の大八島國の八つの島を合気道では、大神の営みの姿で

ある一霊四魂三元八力の八力としていると考える。四つの國から成る筑紫島が一霊四魂三元八力の四魂と同様である。

布斗麻邇御の御霊は、天地人創造の大神の営みの姿であることはこれで分かった。古事記が語っていることを布斗麻邇御の御霊の図像で表したことも分かった。更にこの布斗麻邇御の御霊の教えに従って、合気道では技をつかわなければならないことも分かった。これが大先生が謂われている、「フトマニ古事記によって、技を生み出していかなければなりません」ということのはずである。
頭で分かっただけではまだわかったことにならない。これで技を出していけるようにしなければならない。

【第778回】 宇宙の法則とは

合気道は技を練って精進していくが、この技は宇宙の法則に合していなければならない。例えば、大先生は「技は、すべて宇宙の法則に合していなければならない。宇宙の法則に合していない技は、すべて身を滅ぼすのである。このような技は宇宙に結ぶことができない。」と教えておられる。
これまで宇宙の法則に則って技をつかおうと努めてきた。例えば、陰陽十字の法則である。足も手も右、左、右・・と陰陽に規則正しくつかってきたし、手足や腰を十字々々につかってきた。お陰で技はそれ以前とは大分違い、上手くいくようになった。
しかし、宇宙の法則がこの陰陽十字だけだとは考えられないので、更なる宇宙の法則を探していた。

そしてそのきっかけとなる事を見つけた。大先生の教えである。まず、「この道は宇宙の道で、合気道の鍛錬は神業の鍛錬である。これを実践してはじめて宇宙の力が加わり、宇宙そのものに一致するのである。」（合気神髄 P.43）
つまり、合気道は宇宙の道であり、それが神業の鍛練であるということである。
また、「合気道は宇宙のいとなみが自己のうちにあるのを観得するのが真の合気道

なのであります。」と大先生は言われているのである。つまり、宇宙の営みを自分自身に取り入れていかなければならないということである。それが出来るとしたら、宇宙の営みには法則がなければならないことになるだろう。

ここまでは頭ではわかったが、実際どのように技につかった稽古をすればいいのかが分からなかった。
しかし、その答えを大先生は用意されておられたのである。只、これまでそれに気づかなかっただけなのである。
大先生は、「フトマニ古事記によって、技を生み出していかなければなりません」「合気は天の浮橋に立たされて、布斗麻邇（ふとまに）の御霊、この姿を現すのであります。これをことごとく技にあらわさなければならないのであります。これはイザナギ、イザナミの大神、成りあわざるものと成りあまれるものと・・・。」と教えておられるのである。
つまり、宇宙の法則とは布斗麻邇（ふとまに）の御霊である。天地人が生まれ、成長するまでの営み・法則を記したものである。この布斗麻邇の御霊に則って技と体と息をつかって行けばいい、いかなければならないということである。勿論、布斗麻邇御霊にも法則がある。例えば天の呼吸の「天の呼吸との交流なくして地動かず、ものを生み出すのも天地の呼吸によるものである」である。今後は布斗麻邇御霊の法則を見つけ、身につけていくことになる。
恐らくこの布斗麻邇御霊こそが、究極的な宇宙の法則ではないかと考える。

【第779回】 宇宙との一体化

長年、合気道を修業してきているが、もう一度「合気道」について考えてみたいと思う。「合気道」とは何かということである。合気道を知らない人にも分かるように簡単明瞭でなければならない。勿論、合気道を創られた大先生の教えに合していなければならない。
「合気道」は「合気」の「道」であるが、まず、「合気」とは何かということになる。大先生は合気を、「合気というものは、宇宙の気と合気しているのである」と云われているから、「合気」を簡単明瞭に言えば、宇宙との一体化ということにな

るだろう。

次に「道」であるが、これは誰もが知るものであるから説明の必要がないと思うが、敢えて説明すれば、「道」は己と目的を結び、進むべく、見えない通りと考えている。

つまり、合気道とは宇宙と一体となるための道ということになる。
しかし、人が宇宙と一体になれるかという疑問を誰もが持つはずである。が、この問題も合気道では解決されている。人と宇宙は同じであるということである。人は宇宙から生まれ、生まれも営みも同じなのである。更に、一般的な科学の世界でも、大宇宙のコスモスに対して人はミクロコスモスと云われるように、同じであることを認めている。更に、合気道のフトマニ古事記の稽古をしていけば、人と宇宙は非常に似ているし、同じであると思うようになるはずである。

だが、大宇宙と人には時間空間的な隔たりがあるので、同じでも一体となるのは容易ではないわけだが、この問題に対して、それを念で気結びすればいいと、次の様に開祖は教えて下さっている。「念を五体から宇宙に気結びすれば、五体は宇宙と一体となる」（合気神髄p105）との教えである。強い心の念で五体から気を産み、宇宙に結ぶのである。

この宇宙というのは、宇宙の営みのことであり、宇宙の営みに五体を同化・一体化するということである。
それでは具体的にどうすればこの宇宙の営みに五体が同化・一体化出来るかという事になる。
それが布斗麻邇御霊の働きに合して、技と体と息をつかって錬磨することである。
布斗麻邇御霊と一体化することが宇宙との一体化ということになると考える。

【第780回】 布斗麻邇御霊で技を

これまでの研究から、真の合気道、魂の学びに入るためには、布斗麻邇御霊を技に

現わしていかなければならないことが分かった。
大先生は、「合気は布斗麻邇（ふとまに）の御霊の姿を現すのであります。これをことごとく技にあらわさなければならないのであります。」と教えられているのである。
布斗麻邇とは大宇宙の法則であり、御霊とは、魂の尊敬語で、荒魂・和魂、奇魂、幸魂などの魂の様相のことである。
布斗麻邇御霊の図像は下記の通りである：



この御霊を技にどのように現わしていけばいいのかを、今後、研究しなければならないのである。
非常に広大無辺であり、繊細微妙でそう簡単にはいかないと思うが挑戦するほかないし、始めるほかない。表面的で大ざっぱなことから始めることになる。

先ず、布斗麻邇御霊でこれまで分かったことを記す。

- ○は水で吐く息であり、□は火で引く息である。
- ―は火で引く息、|は水で吐く息である。
- ○の中に―は、息を吐きながら、息を引く息づかいであるし、□に十字は、息を引き乍ら、息を引き、そして息を吐いて十字を生むということである。非日常的な息づかいである。
- この複雑な息づかいは阿吽の呼吸でやらなければ出来ない。大先生は、「武産の武の阿吽の呼吸の理念力で魂の技を生み出す道を歩まなくてはならない。」と云われている。
- そして、この複雑な息づかいは祈りでやればいい。祈りは声を出しながらでも、腹中の息・気は―|に自由につかえるものである。これを大先生は、「祈りも又実在のもとに武技となって生まれるのである。祈りそのものが悉く武術でなければならない。即ち祈りそのものが武の実行と同じである。」（武産合気 P.81)と教えておられる。

この七つの御霊で技を現わすのである。今回は初回と云う事で、基本的なつかい方になる。特に、息づかいを中心に研究してみたいと思う。

⊙は、天之御中主神御霊である。阿吽の呼吸のアーで息を吐いていくと腹中に丶ポチが現われる。これが天之御中主神である。キリスト教のゴット、仏教の阿弥陀仏である。
まずは、天之御中主神になって宇宙の中心に立つことである。

◎は、高皇産霊神・神皇産霊神、両神合体の御霊である。
天之御中主神になって更に息を吐いていくと、体が地に結び天に結び、しっかりした体が出来る。そして技の発兆の土台ができる。つまり、ここまでは、技をつかうための土台であり、準備段階ということである。
故に、⊙や◎の段階で技をつかおうと手足を動かしても技にならない。また、⊙でしっかり天之御中主神として宇宙の中心に立たないと、次の◎の段階に移れないし、天地と結べなく、しっかりした体ができず技にならない。

⊖は、伊邪那岐神の御霊である。火にして陽神である。
⊕は、伊邪那美神の御霊である。水にして陰神である。
両神が誘い並び天の浮橋をつくるのである。
伊邪那岐神で息を吐きながら、腹中で横に息を引くと天の浮橋の━の⊖（ハシ）となり、伊邪那美神で息を吐きながら、腹中で縦に息を吐くと天の浮橋の⊕（ウキ）となる。ここで大事な事は、横→縦に腰腹も手も動かさなければならないことである。これを縦→横でつかうと体は働いてくれないし、体を壊すことになる。柔軟体操でもこれでやらないと体は固まってしまい、柔軟にならない。

⊞は、伊予の二名島である。
この御霊は、伊邪那岐神の━火と伊邪那美神の|水の組合う形。
⊞の⊕から更に腹中で息を吐いていくと、吐いている息が引く息に自然に返る。そして次の⊞に繋がっていく。□は引く息である。これまで吐いてきた息が引く息に変わるのである。

は、筑紫島である。

ここからは、更に息を引くことになる。息を引き乍ら、腹中では息を引き、そして息を吐き十字にする。息を引くだけで中に十字がなければ形にならないし、技にならない。

は、大八島國である。

前の息を引くの形に息を吐いてを載せ、の形をつくり、技を収めるのである。技の最後の形である。

これまで稽古してきた合気道を土台にして、布斗麻邇御霊を技で形作っていく真の合気道に進んでいくのである。今後は、この布斗麻邇御霊をもっと深く掘り下げ、もっと細かく観察し、それを技に取り入れていきたいと思う。

【第781回】 あ、お、う、え、い

これまで呼吸、息づかいの研究をしてきたが、中々一筋縄ではいかない。前から言っているように、合気道では形は教えてくれるが息づかいはほとんど教えない。自分で見つけていかなければならない事になる。何事も、一生懸命にやっていけば、大体の事は達成するものだが、この息づかいは中々の曲者でその正体を現してくれない。

これまで息づかいで分かった事は、まず、イクムスビの息づかいで技と体をつかう事である。この息づかいで技と体をつかえば、体がよく働いてくれるし、力も出るし、技もそれまでになく効くようになる事は間違いない。取り敢えずは、イクムスビから始めるのがいいと思う。

次の息づかいは阿吽の呼吸である。技を阿吽で収めてしまうのである。この阿吽の呼吸でやると、早くも遅くも、激しくもやさしくも自在に出来る。

言うなれば、前出しのイクムスビの呼吸はまだ魄の息づかいであり、阿吽の呼吸で魂を表に出す息づかいになるようである。大先生は、魂を表に出すためには、阿吽

の呼吸でやることであると言われているのである。つまり、阿吽の呼吸でなければ魂を表に出すことはできないという教えなのである。

三番目の息づかいは、布斗麻邇御霊の息づかいである。



○は天の呼吸で吐く息。□は地の呼吸で引く息。この○と□の中にある
ヽポチや―や｜や十字に従って更に息を引いたり吐いたりする複雑微妙な呼吸である。合気道の技はこの布斗麻邇御霊の息づかいでやるわけだが、これが中々容易ではない。

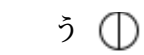
この問題を解決してくれるのが「あ、お、う、え、い」である。これも大先生の教えなのである。例えば、「この一元より出てくる宇宙の営みのみ姿、水火のむすび、つまり天の呼吸と地の呼吸とを合し、一つの息として生み出していくの武産合気というのであります。それはどういうことかというと、「す」と「う」の働きによって、自分というものは、この与えられた魂と肉体との不離一体の交流によって、腹の底から「あ、お、う、え、い」を身体の口から鳴り出さしめるところの形式と、水と火との動き、つまりタカミムスビ、カミムスビの二神の、右にらせんして舞昇りたまい、左にらせんして舞い降りたもう御行為によって、水精火台の生じる摩擦作用の模様と全く同一形式なのであります。」（武産合気P.75）」といわれているのである。これを一言で云えば、布斗麻邇御霊の営みを「あ、お、う、え、い」の息づかいでやればいいということである。つまり、「あ、お、う、え、い」の息づかいで技をつかえば、一元の神と結び、タカミムスビ、カミムスビの摩擦作用と同じ形式になる等のように、布斗麻邇御霊の営みの形になるということなのである。

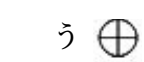
それでは、布斗麻邇御霊と「あ、お、う、え、い」の息づかいの関係を示してみると次の様になる。

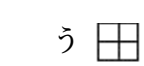


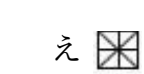
あ 

お 

う 

う 

う 

え 

い

また、これを実際にやると、布斗麻邇御霊の息づかいは、これまでになく上手くできるようになるのである。更に、魂が魄の上に載り、魂で己の魄や相手の魂魄を導けるようになるのである。
しかし、この「あ、お、う、え、い」も中々難しい。布斗麻邇御霊の息づかいが出来なければ出来ないのではないかと思う。先ずは、布斗麻邇御霊の息づかい、そして、その前に阿吽の呼吸、またその前にイクムスビの呼吸を身に付けなければならない。

今のところ、この「あ、お、う、え、い」が最高の息づかいではないかと思っているが、また、変わるかもしれない。

【第782回】 △○□

真の合気道は、「気△○□を根本として気によって技を生んでいく」と、大先生は教えておられる。長年、この“気△○□”を解明しようと研究してきたが、これまでその手掛かりになるようなものを見つける事が出来なかった。最近ようやく、“気△○□”とはこういう事であろうと思えるようになった。つまり、理合いと技で“気△○□”が多少分かったということである。今回は、これまで“気△○□”で分かった事をまとめて書いて見たいと思う。

まず、「気△○□を根本として気によって技を生んでいく」ための“気△○□”を理と言葉で表してみることにする。
最初の頭にある“気”は、次の△○□に技を生み出すために働いてもらう“気”（生

命・宇宙エネルギー）である。つまり、まずはこの“気”を造り出さなければならない。
この“気”は布斗麻邇御霊の天之御中主神御霊⊙から生まれることになる。阿吽の呼吸のアで息を吐き腹中に気を集めるのである。この気を高御産巣日の神と神産巣日の神に結び三角体をつくる。これが心を丸く体三面に開くの“気△”である。すると「△は気にして力を生じ、また、体の三角体は破れざる丈夫（ますらお）の姿勢を具備する」という事になるわけである。

この△から息を吐きながら、腰腹・手を横に回し、そして腰・腹・体軸を地と天に伸ばすと腰腹が━よこと|たてで十じゅうじとなり、⊕となる。これが気△○□の○である。
尚、体三面（半身）から━と|で十をつくるためにわかりやすい動きは“一教運動”である。この一教運動”の動きは、対正面打ちや横面打ち、また、対片手取りや諸手取りでもつかう基本的な動きであり、この動きをつかわなければいい技を産むのは難しいものである。
次は最後の□である。布斗麻邇御霊でも説明したと思うが、⊕で息を吐いていくと、自然と引く息は吐く息に変わり、⊞となる。これを大先生は、「ウ声を呼びながら舌をもっと下顎に突いて、杵のごとく、喰い入らしたなら（塞ぎきった目を一転して裏に開く形）、自然に「エ」と鳴ります。」と言われている。勿論、ウ声は⊕、エ声は⊞である。

この“気△○□”で技をつくり出していかなければならないが、“△○□”にはもう一つの教えがある。それは「△奇霊・荒霊、○和霊、□幸霊であり、これを物質的に見ますと△天・火、○水、□地であります。」である。
△は天と結び、そして大きな宇宙生命エネルギーを出す火なる気、○は火を抑える水である、和する気、□は天地人を結び安定させる気であるということではないかと考えている。つまり、気△○□は精神的、肉体的（物質的）にやさしくやったり、激しくやった、抑えたりと自由自在にできるということである。

また、顕界はこの世の現れた世界。幽界は物の世界、物の魄の世界。神界は神の世

界と教わっているが、△は顕、○は幽は、□は神と言われる。
△の体三面に開くは目に見える次元の顕の世界にあり、○は体内での働きで目に見えない幽の世界、そして□は顕界も幽界も超越した神界での働きということだと思う。だから、大先生の技は、初めの体三面に開くだけは見えたが、後はどんなに目を凝らしても見えなかったわけである。

まだまだ△○□を研究していかなければならない。そしてその内に、何か新しい発見があればいいと思う。

【第783回】 信じる事が大事

合気道の修業をしていく上で大事な事は信じることだと思う。特に何を信じなければならないかというと、自分自身と目に見えないモノである。自分自身の体と心、そして目に見えない宇宙の営みである。これが信じられなければ、合気道の修業は進まないはずである。
今の世は信じる事が難しい。下手に信じれば、おれおれ詐欺などの被害に遭ってしまうし、連れ去られたり、金銭や財産を取られてしまうからである。
もう一つ、信じることを難しくしているのは“科学”の普及である。物事はすべて科学的でなければならないという風潮である。しかし、科学の基本は先ず疑う事から始まるという事である。その疑いが晴れて初めてそれが科学的に認められたという事になるわけである。
また、科学で問題なのは、すべてが科学で解明されると思うことである。取り分け、程度の低い科学者や一般人はそう思っているようである。しかし、一流の科学者は物事に科学の限界を知り、科学の絶対性を信じていない。科学で解明できない事の方が、解明できているものに比べて断然多いという事を知っているのである。宇宙の物質で解明されているのはほんの数パーセントだけで、後は未解明なのである。
更に、宇宙や万有万物がどのように生まれたのかなどほとんど解っていない。この点に関しては、合気道の方が進んでいると思っている。

人は概して見えるモノを信じ、見えないモノを信じないものである。また、自分が出来る事は信じるが、出来ない事は信じない傾向にある。更に、自分の生活に関係するものは信じ大事にするが、生活に直接関係ないものは無視したり、大事なことと信じない。合気道の世界にもこの傾向はあるようである。

合気道の修業は顕幽神界の修行である。見える世界の顕界だけの稽古ではない。目に見えない幽界の稽古もしなければならない。そのためには、目に見えない幽界・神界を信じなければならない。
また、合気道は宇宙との一体化のための道であるわけだから、宇宙を信じなければならない。宇宙の営みや法則があること、それが働いていることを信じなければならない。例えば、陰陽十字や布斗麻邇御霊である。宇宙は布斗麻邇御霊の営みで産まれ、活動しており、その基本の営みの姿は陰陽十字であるということである。
先ずは、これを信じなければならない。そして次に、これを信じる根拠、確認が必要になる。その確認は合気道の技と体ですることになる。この陰陽十字、布斗麻邇御霊で技と体をつかい、宇宙は陰陽十字や布斗麻邇御霊で創られ営んでいることを確認していくのである。これでそれが確認でき、そして真から信じることができるようになるわけである。このためには、自分自身の体を信じなければならない。体を信じれば、体はこれはいい、悪い、ここをこうした方がいいとか教えてくれる。また、時には、体自身で動いて導き教えてくれる事もある。体を信じ合うためにも、体との対話も大事である。

先ずは、信じる事である。

【第784回】 摩擦連行作用

長年にわたって正面打ち一教に挑戦しているが、まだ上手くいかない。いろいろな体づかいや技づかいをしてきたがどうしても上手くいかないのである。そこで何が問題なのか、この上手くいかない原因は何か、そしてその原因を解決するためにはどうすればいいのかを改めて考えてみた。

原因と解決法が見つかった。上手くいかなかった原因は、技をつかう心構えにあることが分かったのである。つまり、正面打ち一教の技をつかう際、相手を何とかしようとしていたことである。柔術的な、相手を制することを目的にしているわけである。このやり方では、相手も警戒したり、防御しよう、反撃しようと頑張ることになるから技が効かないことになるという精神的な原因と、そして武術的、強いて言えば、人工的な動きになり、自然な動き・技にならないという物理的な原因があるわけである。

これを改めればいい事になる。それでは具体的にどうすればいいのかということになる。それは、己自身の身も心も、また、相手も気持ちよく受け入れて納得する自然で強く美しい技でなければならない。合気道が追求する真善美の技である。
それではその真善美の技はどうすれば創出されるのかということになる。答えは、大先生の教えのフトマニ古事記でやることである。布斗麻邇御霊の営みとアオウエイの五声「大母言」でやることである。宇宙の営みでやるのである。
つまり、これまでの相手や人を相手にした稽古ではなく、宇宙の営みに己を入れ込んでいく稽古をすることである。

正面打ち一教も初めが肝心である。まずは、相手に対し気と体の体当たりをするわけだが、只、体当たりしても技にならない。直線的な当たりだから、ぶつかったり、弾き飛ばされたりしてしまう。これまでは、この状態での稽古をしていたわけである。
これを布斗麻邇御霊の営みとアオウエイでやるわけだが、簡単に言うと、高皇産霊神・神皇産霊神両神合体の御霊でやるのである。この両神合体の御霊から出る摩擦連行作用で体当たりし、一体となり、そして導くのである。
大先生は、これを「呼吸が右に螺旋しつつ舞い昇り、左に螺旋して舞い降り、水火の結びを生ずる、摩擦連行作用を生ずる。」、また、「高御産巣日神、神産巣日神の右に舞い昇り左に舞い降りるみ振舞の摩擦作用の行為により、宇宙全部の生命は整って来る。そしてすべての緩急が現われているのです。」と言われている。
更に、「この摩擦連行作用を生じさすことができてこそ、合気の真髄を把握することができるのである。」（合気神髄ｐ87）と教えておられるのである。
この摩擦連行作用は宇宙の営みであり、宇宙の法則と実感する。正面打ち一教だけ

ではなく、手を掴ませる場合、例えば、片手取り呼吸法や四方投げでも必須なのである。更に、剣を振るにも、抜刀居合でも、また、相撲のすり足も摩擦連行作用を生じさせるようにやると上手くいくようだ。つまり、摩擦連行作用は宇宙の営みであり、すべてのものに関係するということである。

摩擦連行作用を生じさすためには上記にあるように、水火の結びが必要になる。〇水と㇏火の息づかいである。
摩擦連行作用は布斗麻邇御霊の高皇産霊神・神皇産霊神の合体から生じ
と記される。㇏火と四つの〇水で成る。㇏火は引く息で〇水は吐く息である。
摩擦連行作用は体の上部と下部が反対に返えることによる心身への作用と云えよう。地に体重がめり込んで体が安定し、そしてその地からの力が反転する上体に送り出され、大きく安定した力（エネルギー）がつくられるのである。
以前から不思議に思っていたのだが、に〇水が四つあることである。
稽古をしている内に気がついたのだが、摩擦連行作用が起こるためには、体の上部と下部が反対に返らなければならない。ということは、その間に支点がなければならないことになる。そこでその支点を探してみると四つあるのである。親指（母指球）、足首、膝、腰の四点である。この四点を支点としてその上の体（部位）と下の体（部位）が反対に返るという事ではないかと推論する。
尚、㇏火は腹中の火ということになるだろう。

しかし、摩擦連用作用のためにの運化に身を入れるために大事な事ある。それはこの前段で天之御中主神にならなければならない事である。〇(水)と㇏(火)の息づかいでしっかりした腹と体をつくることである。そうしないとが出来ないからである。
また、で摩擦連用作用が働くようになると、次段の伊邪那岐神の御霊につながることになるのである。

【第785回】 合気は科学である

これまで何回か「合気は科学である」について書いてきたが、最近、合気道は科学

であり、合気の技も科学であることに痛感したので、改めて書くことにする。

合気道は目標に向かって、技を練って精進していく。合気道の修業の目標は宇宙との一体化である。己が宇宙と合し、宇宙になる事である。己が合し、一体化する宇宙は理合いで産まれ、秩序をもって営まれ、運化している。宇宙の創造・営みは科学であり、それに一体化する合気も科学ということになる。大先生はこれを、「合気は天の科学である。精神科学の実践を表しているのである。」（合気神髄p176）と言われておられる。合気道はこの天の科学で進む合気の道ということになる。

それでは宇宙の科学、天の科学とは何かということになる。それは大先生が言われる「フトマニ古事記」である。つまり、布斗麻邇御霊の営みである。この営みによって宇宙が生まれ、万有万物が生成化育しているという科学である。この布斗麻邇御霊の営みに則って技と体と息をつかえば技が生まれるのである。７つの御霊にしっかりと合すれば、誰でもいい技を創出することが出来るわけだから、天の科学なのである。

また、練っていく技も秩序立ったものである。秩序立つというのは、科学ということでもある。やるべき事があり、それを順序よくやっていけば結果が出る。誰がどこでやっても同じ結果が出るわけだが、実際には上手くいったり上手くいかなかったりする。人の能力や性が異なるからである。勿論、間違えてやれば、出てくる結果も違ったものになる。これも自明の理の科学の基本である。
例えば、陰陽十字は技をつかう上で必須である。体を陰陽十字につかわなければ、決していい技にならない。陰陽十字は法則であり、科学ということになる。
更に、先述の天の科学の布斗麻邇御霊の営みに合して技をつかわなければならないわけだから、技も科学的に生み出さなければならないことになる。これを大先生は、「技はその造化機関を通して科学化されて湧出してくるものである。」と教えておられるのである。

尚、科学とは、一般的には狭義で自然科学を指すが、広義では、「再現性」や「客観性」、「論理」的な推論の過程を重視する学問的態度を指すという。
合気はこの狭義と広義の科学であると考えるが、いずれにせよ、合気は科学である

ということを自覚して修業に励んでいかなければならない。

参考資料　　ウィキペディアフリー百科事典

【第786回】 魄を土台に魂で

合気道は魂の学びであると教えられているので、魄に頼らずに魂で技をつかおうとしているが中々上手くいかない。魄を土台にし、その上に魂を載せてその魂で技をつかわなければならないわけだが、相手により、また、時として上手くいくこともあるが、魂で技を掛けているような実感がない。

このように出来るようで出来ない状態、分かったようで十分に分かっていない状態にあるところで、一冊の本のことばに出会い、この状態から脱することが出来るのではないかと思った。
その本は、今年の三月に１０７歳で亡くなられた美術家・篠田桃紅さんが遺された「人生のことば」を集めた『これでおしまい』である。
そして多くのことばの中で、私のこの疑問を解いてくれるのではないかと感じた言葉が、「**歳を取って、だんだんと腕力で引く線の力は薄らいで、線に込める心の部分が出てきている**。」である。



篠田桃紅さんと作品

歳を取るに従い腕力は衰えるので腕力を使わなくなるが、その分より心をつかうようになり、よりよい作品になるということだろう。腕力を使わないので描く線は薄らぐが、心を込めた心の線がくっきりと出るということである。

これを合気道に当てはめて解すれば、大事な事は、腕力を使わないが、それはこれ

まで最大限に培っており、その培った腕力を直接使わないが、それを土台にして土台の上に心を載せて、心で描くということであろう。
従って、合気道の技を魄力ではなく、この篠田桃紅さんのことばの「心」でつかえばいいわけである。そして段々と、この「心」を「魂」に変えていけばいいと考えている。今のところ、「心」とは己の意志、念、精神で、自分で出したり引いたり制御する人的なものであり、「魂」は自分の外の世界・次元に働く非人工的ものであると考える。また、「心」は意識の世界、「魂」は無意識の世界で働くものと考える。
そして、「心」と「魂」が一つに合するとき、魄の力に勝る大きな力が創出することになるのだろう。篠田桃紅さんのお話では、作品は無意識で描いておられるというから、「心」と「魂」が合体した状態で描かれているということになろう。
篠田桃紅さんは１０７歳。傘寿の８０歳で一人前などまだまだだと思わされた。まだまだ先輩方に教わることはあり、尽きることはないようである。

参考資料：『これでおしまい』　篠田桃紅　　講談社

【第787回】 気の妙用

フトマニ古事記の次元に入っていくと、不思議とこれまで解らなかった大先生の教えが急に多少解るようになってきたのである。例えば、これまでチンプンカンプンだった『合気神髄』の教えが解明できる糸筋が見えてきたのである。

最近のその一つの文章を記す。見出しは『「気の妙用」によって身心を統一』である。
「気の妙用は、呼吸を微妙に変化さす生親（いくおや）である。これが武（愛）の本源である。気の妙用によって、身心を統一して、合気道を行じると、呼吸の微妙な変化は、これによって得られ、業が自由自在にでる。この呼吸の変化は、宇宙に気結び、生結び、そして緒結びされる。また、呼吸の微妙な変化が五体に深く喰い込み、喰い入ることによって、五体はその働きを、活発にし、千変万化神変の働き

を示すことができる。変化とは違う。こうなって、はじめて五体の五臓六腑は、熱と光と力が生じ結ばれ、己れの心の意のままになり、宇宙と一体となりやすくなるのである。この呼吸の微妙な変化を感得することによって各自に合気道の業が生ずるのである。呼吸の微妙な変化は真空の気に波動を生じさせる。この波動は極烈であるか、遅鈍であるかということで、宇宙に種々なる成因をつくる。この波動の極烈と遅鈍によって、心身の凝結が知られる。」（合気神髄　P.85）

先ず、「気の妙用は、呼吸を微妙に変化さす生親（いくおや）である。これが武（愛）の本源である。気の妙用によって、身心を統一して、合気道を行じると、呼吸の微妙な変化は、これによって得られ、業が自由自在にでる。」である。
これまでよく分からなかった「気の妙用」が身心を統一するということである。気で身心を統一し、呼吸を微妙に変化させることによって技（業）が自由に出ると云われるのである。気で身心を統一するとは、異質の心と身体を気によって合するということである。これまでは息（呼吸）によって、心身を統一してきたが、息に代えて気をつかうと云う事である。

また、呼吸を微妙に変化させるとは、気によって布斗麻邇御霊の呼吸を、吐きながら引いたり、吐きながら吐いたり、また、引きながら吐いたり、引きながら引くなどと微妙な呼吸の変化で技を出すということである。この呼吸は微妙であるが、この呼吸は気でやるということであり、これで気というものが実感出来るように思う。

次の「この呼吸の変化は、宇宙に気結び、生結び、そして緒結びされる。また、呼吸の微妙な変化が五体に深く喰い込み、喰い入ることによって、五体はその働きを、活発にし、千変万化神変の働きを示すことができる。変化とは違う。こうなって、はじめて五体の五臓六腑は、熱と光と力が生じ結ばれ、己れの心の意のままになり、宇宙と一体となりやすくなるのである。」である。
この布斗麻邇御霊の呼吸によって宇宙と結び、そしてまた五体に食い込み、食い入り、五体の働きを活発にし、そして五体は心の意のままになるので、宇宙と一体となりやすくなるということである。尚、千変万化神変の働きを示すことができるが、変化とは違う。とは、五体の働きが活発に千変万化神変に働いてもそれは布斗

麻邇御霊の営みの中での変化であった、その法則を破って別なものに変わることではないということだと思う。

更に、「この呼吸の微妙な変化を感得することによって各自に合気道の業が生ずるのである。呼吸の微妙な変化は真空の気に波動を生じさせる。この波動は極烈であるか、遅鈍であるかということで、宇宙に種々なる成因をつくる。この波動の極烈と遅鈍によって、心身の凝結が知られる。」である。
気によって呼吸が○、□、━、|、十字と繊細な変化を感じる事ができれば、波動（言霊）が生じ、そしてそれは技になっているということである。

ここまでは実感出来るが、この後はまだよく解らないのでこれからの研究となる。

尚、今になると分かるが、『合気神髄』だけを何十篇、何百篇読んでもこれは理解出来なかったと確信する。何篇も読むことに加え、布斗麻邇御霊の営みに身心を合するフトマニ古事記の修行に入る必要があると思うからである。
また、己一人だけではそれは出来ないことも分かった。何ものかが協力し、支援してくれていることを実感する。これを大先生は、「私の合気道は、八百万の神がことごとく協力して和合していくみちなのです。」（合気神髄　P.50）と云われているのだと感じる。
合気の修行は、肉体的と精神的、体と頭、動く事と考える事、相対稽古と読書、動と静、顕と幽、人と神等々の相対するものに協力してもらうものであるといえよう。つまり、その片方だけでは駄目だという事である。

【第788回】 合気妙用の導き

前回の『気の妙用』に引き続き、次の教えがわかってきたので記すことにする。これもフトマニ古事記の世界に入ったお陰だ。フトマニ古事記の布斗麻邇御霊の御働きと合わせてみると分かるのである。

その教えの文章は次のものである。尚、１～４は便宜上付け加えたもので、本文に

はない。

「技は、すべて宇宙の法則に合していなければならない。宇宙と結ばれる武を武産の武というのである。武産の武の結びの第一歩はひびきである。五体のひびきの槍を阿吽の力によって、宇宙に拡げるのである。五体のひびきの形に表れるのが「産（むすび）」である。

1. 武産の武の結びの第一歩はひびきである。五体のひびきの槍を阿吽の力によって、宇宙に拡げるのである。五体のひびきの形に表れるのが、「産び」（むすび）である。すべての元素である。元素は武の形を表わし、千変万化の発兆の主である。
2. 呼吸の凝結が、心身に漲みなぎると、己が意識的にせずとも、自然に呼吸が宇宙に同化し、丸く宇宙に拡がっていくのが感じられる。
3. その次には一度拡がった呼吸が、再び自己に集まってくるのを感じる。
4. このような呼吸ができるようになると、精神の実在が己の周囲に集結して、列座するように覚える。これすなわち、合気妙応の初歩の導きである。合気を無意識に導き出すには、この妙応が必要である。」（合気神髄　P.86,87）

これを頭と体で理解し実感するわけである。先ず、番号のない前文である。三つの事を教えている。一つは、技は、すべて宇宙の法則に合していなければならない事。宇宙の法則とは陰陽十字、布斗麻邇御霊の営み等である。二つ目は、宇宙と結ばれる武を武産の武ということである。武産の武は真の合気道である。合気道はこの武産の武、真の合気道を目指さなければならないわけである。三つ目は、武産の武の結びの第一歩はひびきであるという事。阿吽の呼吸によって五体をひびかせ宇宙に拡げると宇宙とむすぶという事であろう。次に、この前文を踏まえて、実際にどうすればいいのか、どのようにすれば宇宙と一体化できるかの説明となる。

1. 武産の武の結びの第一歩はひびきであると前文と同じことを云っているが、このひびきこそがすべての元素であり、武の形を表わし、千変万化の発兆の主であるというのである。つまり、千変万化を生じる技の元であるということであろう。合気道は形が無く、ひびきであるといわれるのはこの事に関係するだろう。先ずは、阿吽の呼吸によって五体をひびかせなければならない。
2. 「呼吸の凝結が、心身に漲る(みなぎる)と、己が意識的にせずとも、自然に呼

吸が宇宙に同化し、丸く宇宙に拡がっていくのが感じられる。」と呼吸で宇宙と同化し、宇宙の広がりを感ずるわけであるが、これが布斗麻邇御霊の天之御中主神御霊⊙の運化と一体となることであると思う。ここで関係するのは、⊙の内の○の吐く息である。

3. 「その次には一度拡がった呼吸が、再び自己に集まってくるのを感じる。」とあるが、これは⊙の○の中の丶（ポチ）である。息を吐き続けていると、自然と息が丶（ポチ）に集まってくるのである。
4. 「このような呼吸ができるようになると、精神の実在が己の周囲に集結して、列座するように覚える。これすなわち、合気妙応の初歩の導きである。合気を無意識に導き出すには、この妙応が必要である。」は、この布斗麻邇御霊の最初の営みに合した⊙の呼吸をすれば、己と宇宙が結ばれ、己と宇宙を感得できるようになるということだろう。

   これが合気妙応の初歩の導きであり、これが出来れば技も無意識に導き出すことが出来るということである。

   また、この合気妙応の導きができるようになれば、次に進めるということである。

大先生は、「こうして合気妙用の導きに達すると、御造化の御徳を得、呼吸が右に螺旋しつつ舞い昇り、左に螺旋して舞い降り、水火の結びを生ずる、摩擦連行作用を生ずる。水火の結びは、宇宙万有一切の様相根元をなすものであって、無量無辺である。この摩擦連行作用を生じさすことができてこそ、合気の真髄を把握することができるのである。」（合気神髄ｐ87）と教えておられる。

つまり、麻邇御霊の天之御中主神御霊⊙の呼吸が出来るようになれば、次の高皇産霊神・神皇産霊神両神合体の御霊◎に進み、摩擦連行作用を生ずるようになるということである。言葉を返れば、天之御中主神御霊⊙の呼吸が出来なければ、◎での摩擦連行作用を生じさせることが出来ないということである。

先ずは、合気妙用の導きを身に付けなければならない。

【第789回】 気と魂魄の違いと関係

これまで“気”について研究してきて解った事は、気には真空の気と空の気があり、真空の気と空の気を性と技とに結び合わせて技を生みだしていかなければならない事。また、技をつかう際の微妙な呼吸は気、気の妙用によって変化するなどである。だが、まだ、気は十分に分かったとは言えない。つまり、気の実感がなかったのである。しかし、有難いことに、前回の第７８８回論文『合気妙用の導き』にあるように、気の働きの実感を得る事が少しできた。布斗麻邇御霊の微妙な呼吸を変化できるのは気であると実感し、これが気であると感得したのである。これを基として、更なる気の研究をしていきたいと思う。

合気道の稽古は、魄の稽古から魂の稽古にかわらなければならないわけであるから、魄の稽古をしっかりして、今度はそれを基にして、魂の学びの稽古に移っていかなければならない。魄の稽古とは、簡単に言えば、腕力や体力に頼る魄力をつかう稽古である。この稽古で力をつけ、内臓などの体を鍛えるのである。武道の基本の魄を身に付けるのである。

この腕力や体力に頼る魄力で技と体をつかうと、相手に大きな力を加えるわけであるが、これは腕や体の肉体的な力である。相手が弱ければ崩れるが、強ければ弾き返される。また、そこで頑張れば当然争いになる。これが魄の稽古の限界である。この限界を乗り越えなければならない。

しかし、ここからすぐに魂の稽古に移ることは難しいので、魄と魂の中間の稽古をすることになる。それが気による技づかい、体づかいの稽古である。
気の細かな説明をする前に、魄力に換えて気をどのようにつかうかを説明する。
腕の力の腕力や体の力の体力で打ってくる手や掴んでくる手を捌くわけであるが、捌くのは骨と筋肉である。骨と筋肉で受け止めて捌いているのである。手先と腰腹は繋がっていなければならないが、手先と腰腹は骨と筋肉で結んでいるわけである。これが魄の技づかいであると考える。

骨と筋肉のかわりに手先と腰腹との繋ぎをするのが気である。手先を思い切り伸ばしたり拡げても、手先と腰腹は骨や筋肉ではなく、気で繋がるのである。従って、手先に息を吐いて力を入れても、肩は貫け、手は自由に動くし、大きな力も出る。

腕力では肩や手の関節などが固まってしまい自由に動けないから、その違いはすぐ分かる。また、特に、息を引いた際に気が働いている事が実感出来る。息を引けば手が伸びるわけだが、伸びると骨や筋肉の支えがなくなり、はじめの内は、手が弱くなり壊されてしまうのではないかと不安になるが、どうしてそれまでの骨や筋肉の支えよりも強力なことが分かるはずだ。気が骨や筋肉の魄力よりも強力であるという事である。
気は体を自由に動かし、強力な力を産み出すわけである。ましてや引く息は“火”であるから、“火”と気によって大きな力が出ることになるのだろう。

気には空の気と真空の気がある。「空の気は物である。それがあるから五体は崩れずに保っている。空の気は重い力をもっている。また、本体は物の気で働く。空の気は引力を与える縄。」、そして「真空の気は、宇宙に充満している。宇宙の万物を生み出す根元。」と大先生は教えておられる。
ここでは真空の気を忘れて、空の気だけにする。
この教えが実感できれば、気がある程度分かった事になると思う。分かったところを記してみる。

- 「空の気は物である」とは、気力は魄であるということであろう。気、気力はものの霊だからである。考えるに、気はあるが見えないモノであると云えよう。つまり、霊体の霊の体であると思う。体のある霊である。因みに、例えば、体の体は見えるし在る身体、魂は霊の霊で見えないし掴まえられないとなるだろう。
- 「それ（空の気）があるから五体は崩れずに保っている」とは、五体が立っていても崩れないだけでなく、技をつかう際も手が腰腹としっかり結びついて折れたり曲がったりしないということでもあると考える。
- 「空の気は重い力をもっている」とは、気に満ちた手も身体も重くなる。力んでしまう力は軽いということだろう。指一本で相手を押さえつける事が出来るのはこのことだと思う。
- 「本体は物の気で働く」とは、身体は空の気で動かさなければならないということだと思う。気で呼吸を変化させ、陰陽十字、陰陽水火の呼吸で身体をつかうのである。

- 「空の気は引力を与える縄」とは、相手とくっついて合気するのは気であり、気は引力があるということである。合気道はこの引力の養成であるといわれるのは、気の養成ということであると考える。

「気力はものの霊の魄である。合気は魂の力です。これを修業しなければなりません。」であるから、気から魂への更なる精進が必要になる。

【第790回】「ア、オ、ウ、エ、イ」と「ス、ウ」

「合気道は天、地、人の理により悟り、宇宙の大道、言霊の大妙用たることを深く知ることが肝要である」（合気神髄P108）。そして、「精進するための技はフトマニ古事記によって、生み出していかなければなりません。」（武産合気P.77）という。布斗麻邇御霊の運化に合して体と息をつかい技を生み出していくわけである。これまで書いてきたように、その七つの御霊をアオウエイの息で働かせるのであるが、これが容易ではないのである。
先ず、の息づかいの複雑さである。○は息を吐くき、□は息を引くわけだが、その○や□の中にある━、|で息を吐いたり引いたりしながら、同時に更に息を引き（━）、息を吐く（|）と二重の息づかいになるからである。しかし、これは普段でもつかっている息づかいなので、意識して稽古をしていけば身につけることができるので、それほど問題がないだろう。その息づかいは、普段でもつかっているはずで、例えば、歌をうたう、祝詞をあげる、お経をあげるなどでつかっているはずである。歌や祝詞で声を出すわけだが、お腹の中では、息（気）を縦横十字にも動かしているはずである。胸で息を吐き、腹で更に息（気）を出したり、引いたりするわけである。

難しさはもう一つある。これが難問なのである。後で分かるわけだが、この問題はこれまでの知識や方法では解決出来ないからである。新しい解決法が必要になるからである。
その問題は最初の御霊のアーである。アーと息を吐くわけであるが、この息を上にあげるのか、下に下すのか、それとも前に出すのかが分からないのである。分からないということは、これでいいという実感が持てないということである。体が感

じ、反応してくれないのである。
更に、⊙の・は何なのか、どのような息づかいをすればいいのかが分からないのである。

この問題を解決してくれたのは「ス、ウ」である。このス声とウ声がア声をどのように発すべきなのかを教えてくれるのである。
まず、大先生はこのス声とウ声について次の様に教えておられる。
「ス声が生長して、スーからウ声に変わってウ声が生まれる。絶え間ないスの働きによってウの言霊が生じるのである。ウの霊魂のもと、物質のもとであります言霊が二つに分かれて働きかける。御霊の両方をそなえている。一つは上に巡ってア声が生まれ、下に大地に降ってオの言霊が生まれるのである。」（合気神髄P111）
つまり、ス声からウ声が生まれ、ウ声から上に巡ってア声が生まれ、下に大地に降ってオ声の言霊が生まれるのである。
そして、「スとウの働きによって、魂と肉体との不離一体の交流によって、腹の底から「ア、オ、ウ、エ、イ」を身体の口から鳴り出さしめる」と、「ス、ウ」が「ア、オ、ウ、エ、イ」の息づかいに結びつき、そして働かせるというのである。

「宇内の活動の根源として七十五声があり、ス声はその大元であり、霊と体、万有万物を創られた」という。これを大先生は、「スの御親、七十五（ななそいつつ）を生みなして森羅万象を造りたもう」と詠われておられる。
「ス」声はすべてのものを生みなした御親であるが、一元の御親、一元の本、一元、元津御親の親神、大御神、大神様などと称されている。

ここまで、「ス、ウ」と「ア、オ、ウ、エ、イ」を見てくると、ある事が見えてくる。それは大宇宙と地球との関係である。つまり、「ス、ウ」は大宇宙創造、そして「ア、オ、ウ、エ、イ」は地球創造の息づかいであるという事である。「ス、ウ」の息づかいが、「ア、オ、ウ、エ、イ」の地球創造の息づかいに結び、そして導くということである。つまり、問題になっていた「ア」声は、「ス、ウ」に導かれなければならないという事である。

この世は、一霊四魂三元八力のご活動によって出来上がっている。一元の現れであ

るこの世界は、物の根源と霊の根源で営まれている。これが「ス、ウ」の一霊四魂の世界である。体については三元八力という働きがある。これが「ア、オ、ウ、エ、イ」の世界であると考える。大先生は、「この三元八力が固体の世界を造り、人類社会もそれによって完成されてゆくのである。」（武産合気Ｐ．１０１）と教えておられるのである。

【第791回】 アオウエイのエイ

布斗麻邇御霊の形をアオウエイで技にしている。これまでと異なる異質・異次元の稽古になり難しいが、真の合気道をしていると感じ、これまでにないやりがい、張り合いがある。
前回は布斗麻邇御霊の天之御中主神の御霊とアーを主に研究してみた。この御霊は天地の創成と営みの形であるが、その前からある大宇宙の創成と営みと結ばなければならない事が分かったし、この最初の言葉のアが五十連の総名で重要なことを確認した。
高皇産霊神・神皇産霊神の御霊のオーと伊邪那岐神の御霊・伊邪那美神の御霊・伊予の二名島のウーは、他の箇所で研究した。余り深くはできなかったので、その内に再度研究してみたいと思う。

今回はアオウエイの後ろのエイを研究してみたいと思う。エーは筑紫島、イーは大八島國である。
エイは一般的に、剣を切り下ろしたり、相手を投げたり極める時に発する、なじみ深い、身近な掛け声である。
この御霊の形を見ると、エーもイーも引く息である。これまでのアオウの吐く息から引く息に変わったのである。勿論、布斗麻邇御霊の形に従ってアオウエイで技（体と息）をつかえば天地との一体化を感じるし、いい技いい力も生まれて気持ちがいい。大先生が、「フトマニ古事記によって、技を生み出していかなければなりません。」（武産合気ｐ．７７）と教えておられるのがよく解る。

しかし、このエイに対して大先生は、「吐く息はエイーと、円」（合気神髄 P.141）

とも云われておられるのである。技の最後の収めのエイは、四角く息を引くのか、または円く吐いて収めるのかということである。

字面では矛盾するわけだが、両方ともに正しいはずである。つまり表現は違っていても中身は正しく、同じであると考える。何故ならが、布斗麻邇御霊も大先生の言葉も共に宇宙の条理であり、宇宙の法則に則っているはずだからである。もし、布斗麻邇御霊、フトマニ古事記を信じる事が出来なかったり、大先生の言葉・教えが信じられなければ、合気道を続ける意味はなくなってしまうだろう。
従って、布斗麻邇御霊と大先生の言葉の字面ではなく、その見えないところを見ればいいと考える。
エイを大先生の教えのように円い吐く息でやっても上手くいくし、やはり気持ちがいい。また、先述のように、布斗麻邇御霊の四角の引く息でも同じである。

それでは大先生が「吐く息はエイーと、円」云われた意味を考えてみたいと思う。
円とは○で吐く息である。
大先生は、魄を土台にし、魂を上にしなければならない、また、魂魄の正しく整った天の浮橋の上に立った十字の姿でなければならないと云われている。
これを現わした図が、である（武産合気P98）。の中にである。
エーで引く息の筑紫島の御霊に天の気（天之御中主神の御霊）を
合わせて、イーで大八島國で収めるが、この中にもが入っていることになる。はこれらの図には見えないが、息を引く□しかくの中の―、|、／、＼で息を吐いたり吸ったりするので、○も□もあることになると考える。

技と体をつかってイーで大八島國で収めることも出来るし、やにを載せて収める事も出来る。どちらも天の浮橋に立つ感じにはなる。
つまり、布斗麻邇御霊のとでとなり、大先生の吐く息とでとなると考える。
技をこれでやると上手くいくし、剣を切り下ろす場合もこの引く息と吐く息でやれば陰陽表裏一体の力がでるようだ。因みに、の引く息だけや、の吐く息だけでやれば伸びのないこわばった力になってしまうようだ。

また、一教や坐技呼吸法の最後の押えはこれでやらないと、返される危険性がある。また、ウナギ掴みもこの気のつかい方であると思う。

まだまだ不完全だが、この稽古を続けて行けば更なる発見があるだろう。

【第792回】イクムスビと布斗麻邇御霊で

これまでの研究を振り返ってみると、テーマ毎に分けて五月雨のような論文であったと思う。勿論、それらの各々のテーマは重要であったし、乗り越えなければならないものであったが、どうもこの一つづつのテーマだけを技に取り入れても不完全であることが分かってきた。ではどうすればいいかというと、それぞれ研究してきたテーマの組み合わせによる技づかいである。

これまで、イクムスビの息づかいや体づかいの研究はしてきたし、布斗麻邇御霊も研究している。勿論、これからもこれらのテーマは研究し続けるが、今回は、このイクムスビと布斗麻邇御霊のコンビネーションの必要性と効用などの研究をすることにする。

技は手で掛けるから、技を掛ける手は折れ曲がらずにしっかりしていなければならない。天竜さんが体感した大先生の鉄棒のような手である。
そこでしっかりした手をつくるためには、手を出して、手先からイーと息を吐きながら気と力を出し、気と力を出しながら引き続きクーと息を引き、更に気と力を出し、また更に引き続きムーと息を吐いて気と力を出すといいと書いた。
しかし、イクムスビでしっかりした手はできるが、技にはなかなかつかえないものである。技でつかおうとしても気と力が途切れてしまい、手が折れたり曲がったりしてしまうのである。

イクムスビでできたしっかりした手を技につかうためにはどうすればいいかということになる。それは布斗麻邇御霊の動きに則ってつかうことである。
布斗麻邇御霊をアオウエイの声に合わせ、イクムスビの息づかいで手をつかうので

ある。布斗麻邇御霊のからまでのアーオーウーでイクムスビのイーで手先から気を出し、でクーと息を引き乍ら手先と腹方向に気を引き気を出し、でムーで手先、腕、体から気を出して技を収める。
気に満ちた強力な手で技をつかえることになるし、気によって動きが途切れたり弱まることはなくなる。

剣をつかうのもこのイクムスビと布斗麻邇御霊のコンビネーションでやればいい。また、腕回しの準備運動もこれでやれば、有効的な準備運動になるし、技にも繋がっていくはずである。

勿論、技をつかうためには、手同様に足も大事である。足も手と同じようにイクムスビと布斗麻邇御霊でつかわなければならないはずである。近い内に研究したいと思う。

【第793回】 息から気へ

気というものが少しずつ分かりかけてきている。ようやくこれこそが気であると感じる事ができるようになってきたし、どうすれば気が出るようになるのかがわかってきたようなのである。長い道のりだった。以前にも書いているように。無意識のうちには気をつかっていたし、気を出していたが、ようやくそれを自覚することができ、そして意識して出すことができるようになったということである。

これまでを振り返ってみると、気に辿り着くまではいろいろな過程があったことが分かる。その過程を簡単に言えば、合気道上達のための稽古の段階であったと言える。合気道の技を練っていく過程にあったのである。
大ざっぱに云うと、まず、①手を振りまわして技を掛ける。②次に、手先と腹を結んで、腹で手をつかい技を掛ける。ここまでは腕力や体力による魄の力で技を掛けることになる。③この②の魄力に息を加えて技を掛ける。が、魄主体で息が従である。④今度は?の腕力・体力を従にし、息を主体に技を掛けるのである。この息で技を掛けるようになれば相手を痛める事は無くなると大先生は言われている。⑤この

④の息に気を加えて、息と気で技を掛けるのである。これまで無意識のうちに、技を息と気で掛けなければならないと書いてきたが、何故、息と気、息・気、息（気）等と書いてきたがよく解らなかった。それが何故かが分かった。
⑥気で技を掛けるのである。息もつかうが、あくまで気が主体である。息と気の違いは、息には吐いても、吸っても、止めても限界がある。つまり、息は続かないのである。そこにいくと、気には制限がない、自由である。例えば、話（説明）をしながらでも、気は出し続けることができるから、気力は衰えることなく、手先や体に満ちる気が減退することもなく、いい技が生まれ、収まるのである。息では、息が切れてしまえば、力も技も切れてしまうので、後は腕力で収めることになるわけである。過って、大先生や有川先生は説明をしながら、技を示されていたが、受けの相手は技が掛かったままで動くことも逃げる事も出来ないのが不思議であったが、それがどういうことなのかがこれで分かったわけである。

⑥の段階の気で技をつかうようになると、手や足を上げたり進めたりと動かすのではなく、気によって自然に動いてくれるようになる。これによって技は生むのではなく、生まれるようになる。大先生の技の素晴らしさ、美しさ、強さはこの気によるものであると思う。

この段階になると気を感じ、気を出し、気に働いてもらう事ができるようになるから、ここから気を練ることになる。そうすれば、“魂“の段階に進めるはずである。

【第794回】 呼吸法が出来る程度に

呼吸法の重要性を改めて認識した。これまでも呼吸法は大事な稽古法であると思っていたし、稽古もしてきた。時間があり、相手がいれば、出来るだけやっていた。これまでも書いてきたが、呼吸法は大先生が居られる頃から、ほとんどの先生の稽古時間のはじめにやられていた。過っては準備体操などやらなかったので、準備体操のかわりに呼吸法はやられるものと思ったほどである。片手取り呼吸法や諸手取呼吸法で始まり、坐技呼吸法で終わるのが一般的だった。故に、どの先生、どの稽古時間も呼吸法は行われていたわけである。如何に呼吸法が大事なのかが分かる。

これも書いたことであるが、有川定輝先生はこの呼吸法の稽古を始めや最後にすることを晩年まで続けておられた。先生は呼吸法を重視されておられたのである。
何故、呼吸法を重視されるのかと思って自分でもいろいろ考えてはいた。一つは、諸手取呼吸法のように、一本の片手を二本の手で掴ませるわけだから腕力がつくことである。二つ目は、そのように二本の手で持たせた一本の手をつかうためには腰腹と結んで、腰腹でその手をつかわなければならないことである。つまり、腰腹が鍛えられることである。また、後で段々分かってくるわけだが、このためには、手と足と腰腹を陰陽十字につかう事が分かってくるのである。これが三つ目である。

或る時、有川先生は、「技は呼吸法が出来る程度にしか出来ない」と云われたのである。そしてその後もこの言葉を度々お聞きすることになるのである。そこで周りの稽古人の稽古を見てみると、確かに、呼吸法が不味いのは技も下手であるし、呼吸法の美味さ、不味さとほぼ比例して、技の美味さ、不味さが決まっているようだということが分かった。
そこでそれまで以上に呼吸法を研究し、稽古をするようになったわけである。
そして呼吸法が少し上手くできるようになると、技も少しよくなるという実感ももったのである。

ここまではこれまでの話しであり、ここからが今回のテーマになる。有川先生の「技は呼吸法が出来る程度にしか出来ない」の更なる深い意味である。

これまでの呼吸法は言うなれば力の稽古、魄の稽古であったと思う。勿論、これも必要であるし、必須である。しっかりした手足、腰、力が出る腕をつくり、腰腹で手をつかい、陰陽十字に動ける体をつくるからである。
しかし、呼吸法とは呼吸力養成法であると考えているわけだが、これでは呼吸力の養成には限界を感じるのである。どんなに力んでも、息込んでもそれほど大きな力は出ないし、自由に使えない。これは呼吸力ではないので、呼吸力養成法になっていないのである。

呼吸力とはこれだと自覚できるようになった。大先生の言われる、フトマニ古事記

とアオウエイの親音の実行によってである。これは既に何度も説明しているので省略する。
このフトマニ古事記の布斗麻邇御霊の営みに合わせて、アオウエイの気と息で技を生み出していく。どの技（形）もこれでやるのであるが、やりやすいモノとやり難いモノがある。そして最もやり易いモノ、つまり稽古をしやすいモノこそ、呼吸法であると思うのである。呼吸法によって、腹中の十字から気と力が生じ、それが胸中に上がって更なる縦横の十字を生み、手先に強力な力を生じさせるのである。この力こそ気の力であると感得する。また、この力こそ呼吸力であると感じるのである。また、この呼吸力は練れば練るほど強力になると感じるのである。

この呼吸法の稽古で一般的なのは片手取り呼吸法である。最もやり易いし、他の技づかいにも汎用性がある故に、一般的となっていると考える。汎用性があるから値打ちがあることにもなる。実際、片手取り呼吸法は他の呼吸法や技（一教、四方投げなど）と比べても、布斗麻邇御霊の営みとアオウエイの声が明確に働き、その結果がはっきり分かる。布斗麻邇御霊の営みとアオウエイの声の基本稽古の土台でもあると考える。勿論、諸手取呼吸法、後ろ両手取呼吸法、坐技呼吸法などの呼吸法も、片手取り呼吸法に準ずると思う。

従って、技はこの土台である片手取り呼吸法に準じてつかえばいいという事になる。片手取り四方投げでも、正面打ち一教でも、この片手取り呼吸法を基盤としてやるのである。片手取り呼吸法で手先から力や気が出るよう、天地の力が働くようにするのである。そうすれば、呼吸法の出来る程度に技がつかえるようになるわけである。
それが上手くいくためにも、まずは呼吸法、特に、片手取り呼吸法を錬磨しなければならないと考える。

【第795回】 桃の実と地ひきの石

大先生は、古事記は法典であり、合気は古事記から多くの事、重要な事を学ぶ事ができると云われている。つまり、「合気は古典の古事記の実行」であり、「古事記

の宇宙の経綸の御教えに、神習いまして日々、練磨していくことです」ということである。
これまで古事記の実行を宇宙の経綸の教えに従ってやってきた。布斗麻邇御霊の運化に習って技を練って来たわけである。
ここでまず、古事記と布斗麻邇御霊にどのような関係があるのかを確認したいと思う。布斗麻邇御霊は七つの御霊であるが、これらの御霊やその働きを古事記の文や言葉で解説していることである。例えば、最初の⊙天之御中主神御霊は、「古事記曰　天地初発之時於高天原成神御名天之御中主神云々」で始まり、「この御霊の正中の丶しるしは天地未生の丶きなり。この神の御名のアメというアは空中の霊にして・・・」と続く。他の御霊も同様である。古事記と布斗麻邇御霊は天地創造と完成のための営み、運化、そして天地の気を知ることができるという意味で同類であり、それぞれの表現は違うが、意味するところは同じということだろう。
これが古事記と布斗麻邇御霊が一緒となり、大先生が云われるフトマニ古事記ではないかと思う。

このように古事記は布斗麻邇御霊と共に、天地創造という大局的な観点から見ており、これを合気道で学んでいくわけであるが、これを局所的な観点からも学ぶ事ができるし、学ばなければならないと思う。つまり、古事記は大局的だけではなく小局的な教えもあるということであり、それが法典であると云われる所以でもあるように思う。

今回は、その一つの例として、古事記でよく知られる箇所の桃の実と地（千）ひきの石(いわ)を例にあげよう。
古事記では次の様に語られている。「黄泉国に逝かれたイザナミノ命に会いに行かれたイザナギノ命は、イザナミノ命の姿を見られると、その姿のすさまじさに驚き、逃げ還られた時イザナミノ命はその姿を見られたことを憤り、軍勢をもって追わせた。イザナキノ命はかづらを投げ、櫛をなげ、剣を後手にふって懸命に逃げて来られたのを、なお追って黄泉国と現界の境に来かかった、その時イザナギノ命が桃の実を三つとって投げ打たれると、黄泉国の軍勢は悉く逃げてしまった。」
「二人の命は塞がれた石（地ひきの石いわ）をへだてて黄泉国と現界とに各々立った。そして一日にあなたの国の人を千人殺しますと、イザナミノ命がいわれると、

イザナギノ命は、あなたが千人殺すなら、私は千五百の産屋をたてようとそれに答えていわれた。」

ここには合気道の修業、技づかいにおいて二つの教えのポイントがあると思う。
一つは、イザナギノ命が桃の実を三つとって投げ打たれると黄泉国の軍勢が逃げていったことである。
『武産合気』では次のようにある。
「これが産屋である。また黄泉（幽界）の軍勢を追いはらった桃の実が合気道であるということを植芝先生から筆記者はききました。」（武産合気P.28）
この桃の実は、布斗麻邇御霊で技と体をつかって稽古をしていくことであると感得できる。腹中で感得するのである。布斗麻邇御霊のである。三つ投げ打った三つはこの三つの御霊（気）であると考える。イザナギノ命とイザナミノ命が、布斗麻邇御霊で共に協力して天地創造に携われた御霊である。同じ御霊が創造と防御・攻撃としてつかわれたわけである。
桃の実を投げ打たれたのは、黄泉国と現界の境に来かかったところであるから、まだ、黄泉の国の幽界のことである。吐く息をつかわなければならない。

二つ目は、地ひきの石(いわ)である。これはイザナギノ命が幽界から顕界に出ての事である。これを布斗麻邇御霊で現わすと、からに成るということである。吐く息から引く息に、幽界から顕界に変わるという事である。イザナギノ命は、地ひきの石(いわ)で黄泉国と現界を遮蔽し現界に復帰する事ができたわけである。
地ひきの石(いわ)の教えは、この岩で幽界（黄泉国）の邪霊をしっかり防がなければならないという事である。つまり、地ひきの石(いわ)とは、桃の実が腹中であるのに対し、胸・胸中であると考える。
技をつかう際、この地ひきの石がしっかりしていないと、技にならない。また、剣を振る際もこの地ひきの石が重要な役割を果たす。

合気は桃の実の養成であるといわれるように、桃の実の腹を鍛える事、そして地ひきの石の胸・胸中を鍛える事が大事であると実感する。

【第796回】 古事記は法典

大先生は、合気は「古典の古事記の実行」であると言われている。「つまり古事記の宇宙の経綸の御教えに、神習いまして日々、練磨していくことです」
ということである。
そして大先生は、「我が国の法典たる古事記」と、古事記を法典と謂われておられるので、今回は、何故、古事記が法典になるのかを研究してみたいと思う。想像するに、古事記には、合気道と深い関係がある、合気道の教えになる事があると思うので、古事記のその箇所を拾い出し、合気道の関係を見てみたいと思う。初めに古事記の文章（省略した所もある）、次にブロックの太字で合気道への教えや解釈等を記す。尚、古事記の文は口語訳を使用した。

- 天地創造：　「タカアマハラにアメノミナカヌシが現われ、タカムスビ、カミムスビの三柱の神、ウマシアシカビヒコジ（下の國）、アメノトコタチ（タカアマハラ）。この５柱の神は別天つ神という。次に、ウイジニ、妹スイジニ、ツノグイ、妹イクグイ、オホトノヂ、妹オホトノベ、オモダル、妹アヤカシコネ、つぎにイザナキ、妹イザナミ。天つ神の命により、イザナキ、妹イザナミはアメノヌボコで漂っている地（くに）を修めまとめ固める。コヲロコヲロと?き回しオノコロ島を現わす。」

  古事記は天地創造を記している。合気道はこの天地創造に合して技を生み出していくことになる。他でこのように天地創造を表してくれるものは見当たらない。
- 「イザナキ、妹イザナミがオノコロ島に天降りされ、国土（くにつち）を生み成そうとマグハイをするが、妹イザナミが先に言葉をかけて求めたためにヒルコを生んでしまう。天つ神の言葉に従って、イザナギが先に言葉をかけ、イザナミが応えると、アワヂノホノサワケの島、つぎにイヨノフタナジマが生まれた。」

  合気道の技づかいでも、先にイザナギ（横、火）をつかい、その後イザナミ（縦、水）をつかわなければ不完全な上手くいかない技（ヒルコ）になってしまう。
- 「イザナミはホトを焼かれて神避ってしまう。そしてイザナギは神避ってし

まったイザナミをひと目見ようと、黄泉の国へと追いかけていくが、イザナミの醜い姿を見てしまい逃げ出してしまう。シコメやイカズチ達に追われるのを、黄泉つ平坂の坂のふもとに辿り着き、桃の実を三つ取って投げつけると、みな逃げ帰ってしまった。」 **合気道は顕界から降りて幽界で修業しなければならないということである。また、合気道の技づかいで、イザナギが投げた三つの桃の実は㊀㊁㊉であると考える。**

- 「しまいには、いよいよ妹イザナミが自ら追いかけてきた。そこでイザナギは、千人がかりで引いてようよう動かせるほどの大岩（千ひき岩）を、黄泉の平坂の中ほどに引き据えて塞いでしまう。そしてこの岩を中において話をすることになる。」 **合気道に於いて、この千ひき岩が胸中であり、この岩によって体中・腹中の邪気（弱気、迷い気等）を止め、この上に来た気で体と技をつかう（剣で切ったり、投げたり決める）。**
  つまり、千ひき岩の胸の下は目に見えない幽界であり、上は目に見える顕界であると考える。
- 「葦原の中津国にようようと戻ってきたイザナギは、「われは、この身を禊をせねばならぬ」と云い、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に出て、禊ぎ祓いをした。其の時に投げ捨てた杖から成り出た神の名は、ツキタツフトナ・・・。このツキタツフトナからヘツカヒベラまでの神々は、身に着けた物を脱ぐことによって生まれた神であった。」
  一仕事を終えたら禊をして古くなったものを捨てていかなければならない。これを合気道ではカスを取るという。新たなモノを得るためには、古いモノを捨てなければならない。肉体的と精神的なカスを取るためには禊ぎが必要になる。合気道は日々かわらなければならないというのはこの事であろう。「みそぎをしなければものは生まれて来ない。武産合気P.58」のである。
- 神界　顕界　幽界：
  古事記は天地創造に始まり、多くの神様が活躍される神界、伊邪那美を迎えに行く伊邪那岐の黄泉の国の幽界、そしてこの世に国づくりをしていく顕界と、神界、幽界、顕界の三次元を舞台としており、このような壮大なものはない。
- ヤマタノオロチ：
  時が経つと邪気がたまっていくから、それを払いのけなければならない。その邪気を払いのけられれば素晴らしいモノ（草薙の太刀）が出てくる。この太刀

で邪気を払っていくことになる。合気道では、この草薙の太刀が合気道であるという。

- 天の浮橋：

●お二人は天の浮橋にお立ちになり、そのヌボコをズズッと下に向けて差しおろして・・・・

●「アマツヒコヒコホノニニギは・・・、天の浮橋に至り着き、しっかりとお立ちになると、そこからひと息に・・・、天降りなされた。」

「合気道は、どうしても「天の浮橋に立たして」の天の浮橋に立たなければなりなせん。これは一番のもとの親様大元霊、大神に帰一するために必要なのであります。またほかに何がなくとも、浮橋に立たねばならないのです。大神様に自己を無にして、自分は鎮魂帰神の行いにかなうように努めることであります。」と大先生は言われている。

- 天津神と国津神：

「葦原の中津国に降りた天津神の御子（アマツヒコヒコホノニニギ）は、天津神の力に加えて国つ神（コノハナノサクヤビメ）の力をも秘め宿した子をうることになった。」

合気道では、「天地の呼吸に合し、声と心と拍子が一致して言霊となり、一つの技となって飛び出すことが肝要」という。“子“を”技“と置き換えてみればいい。また、「天の息と地の息と合わして武技を生むのです。地の呼吸は潮の干満で、満干は天地の呼吸の交流によって息をするのであります。天の呼吸により地も呼吸するのであります」とも言われている。

- ウミヒコとヤマヒコ、潮籠珠と潮盈珠：

ヤマヒコが兄のウミヒコから借りた釣り針を探しにワダツミの宮に行き、トヨタマヒメと夫婦になる。探していた釣り針が見つかり、ワダツミから潮籠珠と潮盈珠を授けられて家に戻ってくる。

合気道では、潮籠珠と潮盈珠が大事であると教えられている。潮籠珠と　潮盈珠は顕界の地上界で得ることは出来ず、見えない世界の深海で得る事が出来るという事であろう。深海に当たる腹中で潮籠珠と潮盈珠を生み出すといことであると感得する。

古事記にはまだまだ合気道のための教えがあるはずだが、今回はここまでとする。

私がちょっと見ただけでもこれだけの教えがあることが分かったわけだが、大先生のようなレベルとなれば無限の教えや宝を見つけられるだろうから、古事記は法典であるということがよく分かった次第である。

参考資料　　『口語訳　古事記』三浦佑之訳・注釈　文藝春秋

【第797回】 ウの言霊

最近は、布斗麻邇御霊とアオウエイで技をつかっている。そして明らかになってきたのが、まず、技を布斗麻邇御霊の運化に合致してつくらなければならないことである。この御霊の一つ、一か所でも間違ったり、不正確にすると技にならないということである。次に、布斗麻邇御霊に正確に働いてもらうためには、正確にアオウエイで布斗麻邇御霊に働いてもらうことである。
このアオウエイは声ではあるが、息であり、気であり、念であり、そして霊である。従って、只の声、音声ではないのである。その証拠に、只、アオウエイと声を出して技を掛けても布斗麻邇御霊は働いてくれないし、力も出ない。

この声と息、気、念、霊との関係、そして言霊について、二代目吉祥丸道士は、次の様に説明されておられる。
「心身の極限的最高潮時におのずから人の発するコトバには、ある不思議な宇宙的生命力というか、いわゆる霊威が宿るものであり、そのさい発動する切実なる人の言行は、その言行の成就を念じつつおこなうとき、おのずから念ずるとおりの事象を招来すると信じられた。・・・コトバ以前のひびきとしては「声」「音」「韻」としてあらわれるが、より純粋には「気」「念」というほかにいいようのない状態にまで抽象化される。そしてそ「気」「息」なる極点において発せられるコトバは、人智の解析を超えるがゆえに「霊」（たま）といわざるをえない純粋直観的な悟性の対称、すなわちいわゆる霊感あるいはインスピレーションの象徴にまで止揚される。そこにおいてコトバは神とともにあり、つまり神人における一如の玄妙至境におけるコトバが「言霊」として慧悟される。」（『合気道開祖　植芝盛平伝』

植芝吉祥丸著）
つまり、アオウエイは、只の声ではなく、息、気、念、霊でもある言霊でなければならないと云われているのである。

誰もが諸手取呼吸法で苦労しているはずである。稽古を真剣にやればやるほど、この諸手取呼吸法は大事な稽古法であると思う反面、難しくなってくる。
こちらの一本の腕に、相手は二本の手の諸手で抑えてくるという物理的、理論的には不可能な事をやろうとしているわけである。
一本の腕で諸手を制するためには、異次元で、異質の力をつかわなければならないことになる。その主力は“ウの言霊”であると考える。布斗麻邇御霊の㊀㊁を“ウの言靈”でつかうのである。口（くち）からは息を吐きながら、腹中で息を引き㊀、息を吐き㊁、そして十字㊉をつくって気を生むのである。
ここから大きな力（気、エネルギー）が出てくるので、諸手でも、諸手の二人掛けでも制する事ができるようになるわけである。
しかし、㊀㊁㊉がしっかり働いて大きな力が出るためには、この“ウの言霊”の”ウ“と声で発するか、無声で念じ、腹中を縦横十字に練って気を生み出さなければならない。もし、この”ウ“が無かったり、軽すぎると、力は腹の上に浮き上がり、力が出ない。
また、⊙◎でしっかりと天地と結ばないと、“ウの言霊”が働けない。

若い頃、大先生は、大本教の出口王仁三郎師の元で修行されていたが、ある日、若い人たちと大岩を動かそうとしている処に出口王仁三郎師が通りかかって、「これはウの言霊じゃ」と云われた。大先生はそのウの言霊で、ウーーと渾身の力を込めると岩はぐらりと動いたと云われている。
この“ウの言霊”こそ、上記の“ウの言霊”であると、これまでの疑問が一つ氷解した次第である。

“ウの言霊”の鍛練は、呼吸法がやりやすいと思う。特に、片手取り呼吸法がいいだろう。これで“ウの言霊”が働いてくれるようになれば、諸手取呼吸法、そして他の技でつかっていけばいい。これまでと違った技づかいになるはずである。

参考資料　　『合気道開祖　植芝盛平伝』植芝吉祥丸著　講談社）

【第798回】 言霊の妙用

「合気とは言霊の妙用である」と大先生は教えておられる。合気の技は言霊をつかわなければならないという事である。
そこで先ず、言霊とは何かどのような働きをしてくれるのかを確認しなければならない。まだ、十分には技に活かせないが、これではないかと思えるものが見えて来たので、それを基として書くことにする。
これまで布斗麻邇御霊の気の動きに従い、アオウエイの五声「大母言」・親音で技をつかわなければならないことが分かってきたと書いた。そして更に分かってきらことは、このアオウエイは只、声を発しても布斗麻邇御霊は働いてくれないし、技にもならないということである。つまり、このアオウエイは言霊にならなければならないという事である。

そこで声と言霊の違いと言霊について見てみると、大先生はいろいろと教えて下さっていることが分かる。例えば、「言霊とは声とは違う。言霊とは腹中に赤い血のたぎる姿をいう」「天地の呼吸（布斗麻邇御霊）に合し、声と心と拍子が一致して言霊となり、一つの技となって飛び出すことで、これをさらに肉体と統一する。声と肉体と心の統一が出来てはじめて技が成り立つのである。霊体の統一ができて偉大な力を、なおさらに練り固め磨きあげていくのが合気の稽古である。」等である。
これを二代目吉祥丸道主は、「心身の極限的最高潮時におのずから人の発するコトバには、ある不思議な宇宙的生命力というか、いわゆる霊威が宿るものであり、そのさい発動する切実なる人の言行は、その言行の成就を念じつつおこなうとき、おのずから念ずるとおりの事象を招来すると信じられた。（略）「身心の極限的最高潮時におのずから人の発するコトバとは、論理をともなえばいわゆる「言」「語」として表現されるコトバの核であり、コトバ以前のひびきとしては「声」「音」「韻」としてあらわれるが、より純粋には「気」「息」というほかにいいようのな

い状態にまで抽象化される。そしてその「気」「息」なる極点において発せられるコトバは、人智の解析を超えるがゆえに「霊」（たま）といわざるをえない純粋直観的な悟性の対称、すなわちいわゆる霊感あるいはインスピレーションの象徴にまで止揚される。そこにおいてコトバは神とともにあり、つまり神人における一如の玄妙至境におけるコトバが「言霊」として慧悟される。」（『合気道開祖　植芝盛平伝』植芝吉祥丸著　講談社）と説明されている。
つまり、身心の極限的最高潮時に発せられる、アオウエイのアーという言、語の言葉は、それが出る前に「声」「音」「韻」のひびきであり、そしてこのひびきは、「気」「息」なる極点において発せられ、また、この「気」「息」は霊によって生み出されるということであり、このアーは、只の声や音ではなく、「気」「息」と「霊」を兼ね備えた言葉で、これを言霊ということになるだろう。
相手がしっかり掴んでいる手で、諸手取呼吸法を制することができるのは、この言霊の妙用であると思う。
これを大先生は、「業の発兆を導く血潮が言霊なり。業の発兆をおこすには、言霊の雄たけびが必要なり、浮橋に立って、言霊の雄たけびをせよとの武神の示しである。」とも教えて下さっているのである。

大先生は、アオウエイの各語の働きを、合気神髄p.77で詳しく説明されている。また、タカアマハラについても、武産合気P.65で詳しく説明されている。
更に、天の浮橋についても、「ア」は自ずから「メ」は巡る。浮橋の「ウ」は空水にして縦となす。橋の「ハ」は横となす。水火結んで縦横となす、縦横の神業。自然に起きる神技(合気神髄 P.151)と説明されている。
この三つの言葉を特に詳しく説明されているのは、これらの言葉が重要な言霊として働くということだと考える。しかし、アオウエイは、技を導く言霊であることは明白であるが、他のタカアマハラや天の浮橋は如何に言霊を生み出しても技（業）の発兆をおこすことはできないようであるから、もしかして、言霊ではないのかとも思った。
しかし、大先生は、「合気道も神楽舞もその根底にあるのは「合気」ということであり、合気とは言霊の響きによる禊の業をいうのである。」と教えておられるのである。つまり、言霊が響けば、それが禊ぎになるからそれは言霊ということになるということである。合気道の技だけに言霊が働くのではなく、神楽舞でも言霊は働

くという事である。
これが合気道は禊ぎであるということなのだろう。
合気は言霊の妙用での禊ぎということである。

【第799回】 エの言霊と目

第７９７回の「ウの言霊」に引き続き、アオウエイのウの次のエ声、布斗麻邇御霊の伊予の二名島の次の筑紫島を研究してみたいと思う。
これまで書いてきたように、アオウエイと布斗麻邇御霊で技、体、息、気をつかうようにしてきた。最も苦労したのがウでのであった。これがある程度できるようになると、不思議とそれまで出来ていたと思っていたができていないことがわかったのである。
までは息を吐くが、で息を引くに変わるのだが、この吐くから引くの切り替えが自然にいかないのである。相対稽古で技をつかう際も上手くいかないし、剣を振るにも息や気が切れたり、止まってしまうのである。これでは武道的に隙ができてしまうので、何とかしなければならないと、息づかいをいろいろ試してみた。

結論からいうと、この問題の解答はすでに大先生の教えにあったのである。レベルが低かったためにその教えに気づかなかったのである。
大先生は、「ウ声をよびながら下顎へつき、杙（くい）の如く食い入れしめれば、ふさぎ切った目が裏に開く。自然とエ声となるべし。」（武産合気P.30）と教えておられるのである。
つまり、ウ声の吐く息を引く息のエ声に変えるのは目であるということである。“目を裏に開く“のである。確かに、目を上手くつかうことによって、吐く息から引く息に自然にかわるものである。“目を裏に開く“を上手く説明できないし、これがそうだろうともまだ自信を持っては言えないが、ウ声がエ声に自然にできたときが、“目を裏に開いた“はずだから、それをやればいいということになる。

この目で、吐く息を引く息に変えてつかえるようになると、技が変わってくる。二教裏のような極め技はしっかり極まるようになるし、また、諸手取呼吸法でも強力

な力が出るようになるようだ。更に、剣を振るにも切れ目なく、自然に、そして強力に振る事ができるようである。
ウの言霊をエの言霊に自然に変えるためのポイントは目にあるのである。

【第800回】 イの言霊と頭

これまで布斗麻邇御霊の運化をアオウエイ五声の言霊で、息と体と技をつかう稽古をしてきた。前回は、エの言霊までいったので、今回は五声の最後のイの研究ということになる。
まず、これまでのおさらいを簡単にすると、「アーで天之御中主の神になり、天地・宇宙と一体化する。次に、オーでタカミムスビ・カミムスビの神になって、地を踏み、地と結ぶ。下肢が鍛えられる。ムーで息を吐きながら、腹中の気を横⇒縦⇒十字に働かす。腹が鍛えられる。吐いていた息をエーで吸い、胸中の気を縦⇒横⇒縦と動かす。胸が鍛えられる。」と書いた。
そうすると残りはイーということになる。

エーから引き続き息を引いていくと、気が胸中から首を通って頭に流れ、イーとなる。下からの縦、頭の中で横に流れ、頭が気で満ち、非常に爽快になる。これが頭のカスを取る頭の禊ぎであることを実感する。
尚、ウーの研究までは、イーの役割と重要性をよくわからなかったので無視していた。つまり、エーとイーではなく、エイと一緒にしていたのである。
しかし、イーがしっかり働かなければ、体も技を上手く働いてくれないことがはっきりしたわけである。

イーと気を頭に入れたなら、それを出さなければならない。合気の技をつかったり、剣をつかうとそれがよくわかる。
イーと息を引き乍ら、頭の中の気を縦に落すと、体の下肢、腹、胸と頭の気が一つになる。これを布斗麻邇御霊の形ではとなる。技は頭で掛けると以前書いたが、これが頭をつかうということである。

繰り返すが、この頭の禊ぎは心の禊ぎである。オーとムーとエーは下肢、腹、胸の肉体を鍛え、禊ぎするが、イーはアーと共に、心を禊するということである。
つまり、布斗麻邇御霊とアオウエイにより、体の下肢、腹、胸、首、頭を鍛え、禊ぐことができると共に、頭、心を鍛え、禊ぐ鍛錬ができるということである。
肉体的な鍛錬と精神的な鍛錬の両面を兼ね備えているのである。恐らく、他にはないものだろうと思う。これでこれからの稽古も続けて行こうと思っている次第である。
